白蒼月夢幻譚～二つ月の二つ世界（種シリーズ?）

汐井サラサ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
白蒼月夢幻譚～二つ月の二つ世界（種シリーズ？）

【Ｎコード】
Ｎ７４８２Ｗ

【作者名】
汐井サラサ

【あらすじ】
種シリーズ第四弾。
剣と魔法と素養の異世界シル・メシアで永住権を獲得し結婚したマシロのその後のお話。
メインではないので特に指定は掛けませんが、微エロは標準装備なのでいちゃらぶっているのが苦手な方はご注意ください。

▼登場人物紹介的なもの（前書き）

今更ですが、人物紹介。知っている人は知っている。知らない人は覚えてね。良かったら第四段スタートの準備運動的にお楽しみください。

▼登場人物紹介的なもの

■　月見里真白（やまなしましろ）

シル・メシアに落ちて永住決定した上に、結婚までしてしまった。順応能力マックスの主人公。

基本的に前向きだけど、旦那様関係のことになると若干病み気味。なんでもかんでも受け入れる体制だけは整っている。来るもの拒まず去るものは場合により、蹴りくらいは入るかも……。

■　ブラック（ルインシル＝ミア）

シル・メシア唯一独占職。種屋の店主。黒猫耳尻尾付きの獣族。

マシロの旦那様。奥様同様、相手のことになると猛烈に病み中。

そして、大抵一人で突っ走る（そのせいで奥さんが病んでる気がしないでもない）

天下無敵で、暗殺業も健在です。

なので、やっぱり命に対して価値を見出すことが出来ない。空回りが大得意っ。

■　ルカ

種屋候補生として、蒼月教団に在籍。

現在はマシロの薬剤店の手伝いをしている。白猫耳尻尾付きの獣族。

店長さんに対して淡い恋心を抱き中。そのうち、嫉妬パワーで薬剤店を崩壊すると思う。思春期真っ只中の少年。

■　エミル（エミリオ）

シル・メシア王家。三王の筆頭。

常に穏やかで誰にでも優しく賢王と名高いけれど、マシロが大好き過ぎて、マシロが絡むと大暴走する。（周知の事実『王陛下は白

月の姫に囚われ中』）結構、周りに迷惑をかけているが、人徳か諦めか、誰もそのことを責めたりしない得な性格の持ち主。

■　カナイ（本名不明）

エミル専属の魔術師。

魔術系の素養が特出していて、現在シル・メシアにて並ぶものは居ないほどの使い手。……なのに、性格がちょっと残念なので、常に貧乏くじを引いている。

エミルが王位継承した時点で、あれほど嫌っていた王宮職につき主に魔法具関係を管轄している。平和協定が結ばれている関係上、攻撃的な魔法は必要とされず、魔力が余って仕方ないので、エネルギー源とされている。（その辺も微妙に残念すぎる逸材）

比較的地味とされる容姿の割りに、派手なことが好きで大技を使いたいのに使う先がなく、暇つぶしにアルファに雷を落としてみたりして遊んでいる。↑有能な部下に恵まれたため割と暇。

マシロのことは大切に思っているものの、世話焼きな性格のためマシロに『お父さん』と認識されいつまでも訂正されないため、もうその枠に満足しつつある。

■　アルファ（アルファルファ）

エミル専属の騎士。

王様専属師団の総括をやっていて実は忙しい、はず……。

天賦の才を持つといわれるほどの剣技を極めているものの、今は平和なので、大抵は型試合総舐め。ギルド名簿から抹消していないのを良いことに、こっそり大きな（危険度の高い）依頼が入ったら回すように根回しするくらい、アウトドア派（違うだろ）天真爛漫で細かいことは気にしないおおらかなタイプ。

マシロのことは大好きだけど、ご主人様が大好きなので、出来るだけ隠している。決して既婚者相手だからではない。

■　シゼ（シルゼハイト）

エミル専属の薬師。

幼少の頃より面倒を見てもらっているせいもあり、エミルが大好き。常に、エミル様第一。エミル様エミル様エミル様、なはずなのに気が付いたら、マシロに首根っこつかまれて王宮から引っ張り出されている。

根っからの引き篭もり体質なので、本当に勘弁して欲しいと思っているのだけれど、口に出していっているつもりなのだけど、どうしても分かってもらえず。今日もずるずるずる……。エミル様の許可が下りているのなら仕方ないと、諦めモード入ってても認めない。基本ツン。几帳面で折り目正しい性格も災いして、素行があまり宜しくないルカと折り合いが悪い。

■　ラウ＝ウィル

三王に通じる宰相閣下。

のはずなのに、エミル贔屓でエミルのところにばかり嫌がらせのように仕事を回している。本人曰く「愛故に」らしいから仕方ない。常にマイペース。自分の好きにしか生きられない。ある意味不器用な人物でもある。

最近は三王中、一人だけ独身であるエミルにかこつけて、自身もそれ相応の姫と婚姻関係を持つよう迫られていて、苛々中。当たる先は……もちろん、エミリオ陛下。

■　メネル&ナルシル

エミルの異母妹とその息子（男の娘）

バツイチ子持ちのお姫様。星詠み素養を強く持ち王宮専属の占星術師として活躍中。連れ子のナルシルは実はメネルの双子の妹の子ども。亡き妹に代わり面倒を見ている。

■　レニ&レムミラス

マリル教会司祭と、蒼月財団々長。
実は兄弟。対照的な信仰を持ち相容れない。けれど、根っこの根っこのほっそい根っこ辺りくらいは繋がっていて、一応お互いを気にはしている。
兄の、レムミラスは冷酷無比を体言化したような冷たい容貌で、常に周りを威嚇しているような指導者。
弟のレニは温厚。陽だまりの園という孤児院も管理している関係上子ども好き。しかし、真面目過ぎるところがあるため、暴走したこともある。

■　ハクア&シラハ
白銀狼の夫婦。聖獣指定を受け、国の保護下にあるはずの獣。
ハクアは、マシロと主従関係を結んでいるため王都に在住。因みにマリル教会で厄介になっている。
人と変わらないくらいの知能と、ずば抜けた魔力戦闘能力を持っている、ハズだが活かされる場所がないことと、主人激ラブで何かを見失い気味なので、本来の姿はよく分からない。

■　ハスミ&キサキ
三王の残り二人。エミルの異母兄と異母姉。
両方既婚者。英雄然としたハスミには四人の妻あり（一人増えました）男装の麗人キサキには一人の夫がいる。本来、決め事は三人で締結することとなっているが、二人とも好戦的な部分をエミルにことごとく見抜かれて、案を切り捨てられまくったため「最終決定件は、エミルにある。頑張れ」とほぼ可愛い（そう本人たちは思っている）異母弟に丸投げだったりもする。

他多数、でお送りします。
良かったら最後までお付き合いいただけると嬉しいです。

第一話：白猫と私（1）

白い月青い月二つ月
貴方の夢見る夢世界。もう一つの別の世界。
月が夢見ることあれば、それはきっともう一つの現実世界……
――

――　……サァァァァ

剣と魔法と素養の世界。二つ月の浮かぶ異世界シル・メシア。生まれ育った世界が故郷となり。有り得ないものばかりしかなかったこの世界がホームグラウンドになった。
そして、その世界の王都の一角で今日も閑古鳥が鳴いている薬剤店を切り盛りするのが、私、月見里真白（やまなしましろ）こと、マシロだ。ここでは姓を名乗ることがまずないから、ヤマナシという姓を捨てたも等しい。

「なあ、店長。こんなに必要ないだろ？」
「店番はどうしたの？」

裏にある温室の――主に薬草類――世話をしていると、ひょっこり顔を出したルカが意地の悪い台詞を投げ掛けてくる。これはいつものことだ。だから、私は振り返ることもなく、そう告げる。ルカは「どうせ誰もこねぇよ」と失礼極まりない事実をいいながら――そう、事実だ。哀しいけど――大きな欠伸を隠そうともしない。

「必要ないっていっても、あるんだから、まだ枯らせちゃ駄目でしょう？　収穫の頃合いになれば乾燥庫に移すから良いの」

「で、それでも捌けなきゃ、マリル教会や、辺境の町で破格で配るのか？」

多少呆れたようにそういったルカに私は、はぁと大きく溜息を吐き肩を竦める。

「――　……ルカって結構見てるよね。ブラックでさえ口出ししないんだから、貴方もしないの」

因みにこのルカという少年――今年で幾つになるのだろう、多分、十四歳？　くらいのはずだ――は、元の世界では有り得ない猫耳、尻尾付。色は白。黒いのは私の……まあ、今は良い。

「なあ、これ枯れてるんじゃね？」

私がぼんやりしていれば、勝手に温室を物色し、今日私が直々に仕入れたものにけちをつけている。けれどそれは、そういわれても仕方のない品だった。私はのんびりと歩み寄ってルカの手元を覗き込む。

「分からないけど、表通りの生花店で処分に困ってたみたいなの。だから、貰ってきたんだけど」

「……本当に、なんでもかんでも拾ってくるよな」

「拾ったんじゃないよっ。貰ったんだって！」

いや、力説の場所がちょっとずれていることは私でも分かる。分かるけど、もう、そっとして置いてもらって良いと思う。

「なんか凄く珍しいものでこの一鉢しかはいらなかったとか。でも見た目も大して派手じゃないし認知度も低くて、売れなかったみた

いで……」

ちょっと可哀想だと思ったのだ。

確かに見た目枯れているように見える。でもまだ生花なのだそうだ。茶色の葉に花……瑞々しさにかける姿では枯れていると判断されても仕方ない。

あまり乱暴に触れては、葉や花が散ってしまいそうで、鉢植えのまま置くことにした。それに今はまだでも、そう長持ちしそうにもなかったし……。

「ふーん……」

しげしげとそれを眺めていたルカに、私は、触らないでよ。と注意して、後片付けを始めた。がたがたと片付けたあとも、まだ眺めているルカに再び歩み寄る。ねぇ、と肩を叩けばびくりっと尻尾が逆立った。

「そんなに珍しい？」

「え、あぁ、いや。そうじゃなくて、なんか見たことあるような、いやでも……こんなんじゃなかったような……なんか引っかかって気持ち悪いと思って」

「ブラックにでも聞いてみたら？　きっと直ぐ分かるよ」

にこりとそういえば、ルカは苦虫を噛み潰したような表情を隠そうともせず「嫌だ」と語気を強めた。

「絶対あの人に聞いたら鼻で笑われる。絶対聞かない。聞くくらいなら知らなくて良い。どうせ、直ぐ枯れるだろ」

あーぁ、退屈ーっとぶんぶん腕を振り回して、ルカは私の頭をご

すっと叩いてから温室を出て行った。
もう、可愛くないんだから。
ふぅ、と叩かれて乱れた髪を梳き整えながら私もそのあとを追い掛けた。

私の毎日は、平穏そのものだ。
一日の大半を、この店と、家の用事で費やし、のんびりと過ごす。
一応形としては結婚もしているのだけれど、それまでとそれからはあまり吃驚するほどの変化は私にはない。
ただ、あまり大きな声ではいえないけれど、以前にも増してお客さんは減ってしまった。沢山お客さんが来てくれる日でも三人とか四人程度。誰も来ないほうが多い。
それでも店を畳まないのは、畏怖を感じながらもここしか頼る人が居ない人たちがいることと、それなりにこの店に必要性があるからだ。色んな意味で。

「ちょっ！　このチビっ！　店ん中走るなっていってんだろっ！」

店舗部分に近づくと、ルカの怒声が聞こえる。

「にゃんこさんっ！」
「おれは猫じゃねーっ！！」
「にゃんこさんにゃんこさんにゃんこさーんっ」

……完全に遊ばれている。

私が「どうかした？」と声を掛ける前に直ぐに状況は飲み込めた。
騒がしいお客さんは、ナルシルだ。ということは保護者であるメネルも一緒だろう。

「いらっしゃい、メネル」

ひょっこりと裏から顔を出せば、ルカとナルシルのやりとりをにこにこ眺めていたメネルを発見して微笑む。私が声を掛けた麗人は、光を紡いだような美しい金色の髪をさらりと揺らして「こんにちは」と笑い私のところまで歩み寄ってくる。

「今日はどうしたの？」

私は、猫とネズミの追い掛けっこを横目にしながら、カウンター裏に掛けてあるエプロンを取って身に付ける。

「マリル教会からの帰りなのよ。ナルシルが貴方に会いたいと騒ぐから、迷惑かと思ったんだけど、連絡も取らずに立ち寄らせてもらったわ」

にっこりとそういってくれたメネルに「そうなんだ」と、私が答えるより先に「マシロはっけーん」とナルシルに飛びつかれた。

文字通り飛びつかれた。

げふっと息を詰める。子どもの勢いは侮れない。

私は体勢を整えると、ナルシルを抱き上げる。ナルシルはメネルの双子の妹アセアの実子であるが、未婚であり秘密裏に出産させられたため、孤児院：陽だまりの園へ暫らくの間預けられていた子だ。

それをメネルが王宮に戻る際に引き取ったのだけど、容姿だけでいえばメネルとアセアがそっくりであったのと同じように、ナルシルもとても良く似ていて親子として育っている二人としてはとても良いことだと思う。

「ナルシル、なんか益々女の子っぽくなってない？」
「だって、女の子の方が可愛いと思うわ」

そうか、この髪を両サイドの高い位置で縛ったりしているのは、メネルの趣味なのか。深く気にしてなかったけど、このふわふわな洋服は女の子の、だよ、ね。うん。

「ナル可愛い？」

私の腕の中で、こてんっと首を傾げると、さらりと光を結い上げたような金糸が揺れる。美少年ではなく美少女だ。じっと見上げてくる愛くるしい瞳。小動物的だ。そして、私は小動物が大好きですっ。

「……可愛いっ！」

ぎゅむっ！
ええ、ええっ！
もう可愛いに決まっているじゃないですかっ！
可愛いよっ。性別なんてどうでも良いよ。似合ってるよっ！

ちょっと興奮気味に抱き締めたら、メネルに「でしょう？」と微笑まれた。そんな私たちを冷めた目で見たルカは「おれ、茶でも淹れてくる」と若干やつれた感じで奥に引っ込んでいった。

第二話：白猫と私（2）

メネルは呆れたように笑いを溢し、隅っこに置いてあるテーブルに着いた。私がナルシルを降ろせば、ナルシルはメネルの傍に寄ることなく「にゃんこさーんっ」とルカのほうへと走り去る。どうにもこうにも気に入られてしまっているようだ。

その後姿を見送って

「ナルシル、元気そうだね？」

と微笑ましい気持ちになり同時に安堵する。

「ええ、今のところ王宮医も大丈夫だといってくれているわ」

今も元気に駆けていったナルシルは、心臓に病を抱えている。だから、あまり無理が押せる身体ではない。小さな子にそんな説明しても分かるわけもなく、自分の身体のギリギリまで酷使してしまうので目が離せない。

「マシロはあの子、いつまで置いておくの？」

メネルはルカがミニキッチンのある裏から、かちゃかちゃとお茶の準備を整える音を点て始めるまで待って静かに口を開く。そんなの考えるまでもない。答えは決まっている。

「ずっとだよ。特に期限なんて決めてない。ルカが他に行きたければそれでも構わないけれど、でも、出来ればここに居て欲しいかな？」

「居させてるんじゃなくて、居て欲しいのね」

マシロらしいわ。とメネルは笑みを深める。
そんな風にいわれるとなんかむず痒いけれど、実際ルカはとても役に立ってくれているし――一番に私の伽的なものとして――今更私の意志で蒼月教団に突き返すつもりもないし、追い出すなんて持っての他だ。

「私はルカのこと好きだし、離れるなんて考えられない」

――……カシャンッ！

いった途端、奥から食器の割れる派手な音がした。

「大丈夫ー？　ルカ。怪我してなーい？」

私が呼びかけると「うるさいっ！」と怒鳴られた。うるさいとはなんだ。人が折角心配しているのにと、眉を寄せれば、メネルがくすくすと笑っている。

「そうそう、それにね、あれで結構ブラックと仲が良いんだよ」
「良くねーよっ！！」

かしゃんっ！　と、今度はいつの間に来たのか、私の隣に立っていたルカはそう怒鳴って、私の前に多少乱暴にティーカップを置く。あの振動で、紅茶が零れていないのが不思議だ。

「急に出てこないでよ。広い店じゃないんだから、ちゃんと歩きなさいっ。それから、何度もいうけど、お茶はお客様から出すの」
「そんなの、どっちでも良いだろっ！」
「良くないよー、ルカ。マナーくらい身についてるでしょう？　ま

だなら、もっと徹底的にブラックにでも躾けてもらえば？」

つんっとそういった私にルカは歯噛みしそうな表情で「やり直せば良いんだろっ！」とカップに手を掛けたから、とりあえず掴まえた。

「勿体無いから、今日はこれで良い」

「っだよ！」

ぷりぷりと怒り露わに踵を返すルカの背に「ありがとう」と付け加えれば「んー」とそっけない返事が返ってくる。その周りをまたナルシルがうろついている。その様子を見ていたメネルがもう我慢出来ないとばかりに噴出した。

「本当、仲良しなのね。何しろ貴方に危害を加えた獣族でしょう？最初は心配していたし、今でも少し気がかりなのだけど、ふふ、なんだか、家族みたい」

「――　……家族だよ」

「え？」

「ルカは家族だよ」

きょとんっとするメネルに繰り返せば、ほわりと胸の辺りが暖かくなる。

ルカは私の家族だ。

この世界に血縁者の居ない私からすれば、そう考えるのはとても自然なことだった。だから迷いなく応えることが出来る。

そんな私を暫らく感慨深げに見詰めていたメネルは、ふっと瞳を細めると「そっか」と優しく微笑んでくれる。宗教画みたいに綺麗で清廉とした姿は流石お姫様だ。

「っと、そういえば、どうしてマリル教会？」

ルカの淹れてくれた既に適温とはいい難い紅茶に口をつけつつそういった私に、メネルは「時々行くの」と話してくれた。

「週に一度か二度。司祭が“星詠み”をもっと深く学びたいということで、大聖堂から依頼を受けたのよ」

ほら、私暇人でしょう？　と続けて笑ったメネルに苦笑する。

本人の評価がどうであれ、メネルは、国の歴を預かる特別職に就ける数少ない占星術師だ。まあ、その時期以外は暇なのだと、重ねていたけれど。

「普通ならそんな話お断りするのだけど、ナルシルも一緒で構わないというし、あそこには面倒見の良い子どもたちが多いから」

「陽だまりの園の子達だよね。私も時々健診に行くけど、そんな話聞いたことなかった」

別に他意はなくそういった私が、拗ねたとでも思ったのかメネルは「ごめんなさいね」と先に謝罪した。

「私は知っていたわ。大抵、シゼを王宮から引っ張り出して行くときでしょう？」

「ちょ、と、待って、もしかして、それ、王宮で有名？」

恐る恐る問い掛ければ、メネルは「ええ」と迷うことなく頷いた。

なるほど、だから、回数を重ねるごとにシゼの諦めが悪くなるのか。

さっさと諦めて、仕事の一部に組み込んでくれれば良いものをシゼは相変わらずケチだ。

「それに、レニ司祭の口からも良く聞くから」
「は、何で？」
「え、だって、星の話以外に共通点といえばナルシルのことと、貴方の知り合いであることくらいですもの。話題に上がっても仕方ないと思うわ」
――……し、仕方ないか、なぁ？
「陰口なんかは叩いてないわよ？」
「そんな心配はしてないよ」
真剣に否定してくるメネルが可愛かった。そんなこと私は微塵も思っていなかったんだけどね？　笑いつつ、ちらと掛け時計に視線を送る。もう直ぐ夕時だ。
「何か予定があった？」
「え？　あ、ううん。何もないよ」
それを素早く発見されて私は慌てて否定する。
特に予定というわけではないのは本当だし、その程度のことで、二人を追い返すようでは忍びない。そう思ったのに、ナルシルの首根っこ掴まえてきたルカは「ほら」とメネルにナルシルを押し付けて
「おれ買出しにいってくる。ブラックさん、もうすぐ戻るだろう？」
「っあ、あ、うん……」
間が悪い。
ルカ絶対わざとやったんだろうと確信して益々、楽しげに揺れる尻尾掴んでぶんぶん振り回したい衝動に駆られた。けれど、立ち去るルカを他所に、どういうこと？　というメネルからの視線を受け

て、ふぅと一息。

「えーっと、ブラックがね、数日遠方に出てたの、それで、今日、日が暮れるまでには戻るってことだったから……その」

「それでそわそわしてたの？」

くすりとメネルに笑われてしまった。ううう。恥ずかしくて顔が真っ赤になるのが鏡を見なくても分かる。

――……はぁ。

第三話：これが私の旦那様（1）

＊＊＊

「今、戻りました……と、なぜ喧嘩をしているのですか？」

ルカと食事の準備を私が手伝うかどうかで、激揉めしていたところにブラックがひょっこりと戻った。

「ルカが夕飯の準備を手伝わせてくれないのよっ！」

「だから、今日はおれの当番だろっ！　邪魔するなよっ。お前が加わったら、手間が倍なんだっ！」

きゃんきゃんっと先ほどから堂々巡りのいい争いを繰り返すと、ブラックは私の肩に腕を回し背後から抱き締めつつ「なるほど」と擦り寄ってくる。

私の家に居るもう一匹の猫はこの黒いので、私の旦那様だ。ふわふわと時折触れる猫耳がくすぐったい。その効果も合ってか直ぐに怒りは鎮火してしまう。

「では、マシロは疲れている私にお茶を淹れてください」

「え、ああ。うん、もちろん」

私が頷けば、ブラックは私からそっと離れてワゴンの上に茶器を用意し促す。

上向きにされたティーカップには既にお湯が注がれていて、ふわりと湯気を上げている。新しくお茶を注ぐだけで出来るって、私が淹れる意味があるのか。

「これで、ルカは思う存分私のために腕をふるってください」
「――　……今、猛烈にやる気をなくした」
「ふふ、冗談が好きですね」

いってブラックは笑ってるけど、とても分かりやすい殺気を放出中だ。

ルカは「さ」と何事もなかったように準備を再開した。子どもを脅さないでください。思っても、もうあまり口出しはしない。スキンシップの方法はそれぞれだろう。

きっと、これが二人の関係、適切な距離感なのだと、もう私は諦めた。

キッチンをあとにして、リビングのローテーブルの傍にワゴンを安定させると、私は早速お茶の準備を始めた。

「それで、大丈夫だった？」

かちゃりとブラックの前にティーカップを置き、自分の分を片手に隣りへ腰掛ければ、ブラックはいつもどおり優雅な所作で一口口に運び「問題ないですよ」と微笑む。

問題ないというのは、何が問題ないのか微妙なのだけど、気にしたほうが負けなので「それなら良いけど」と私も一口。

そして、ティーカップをテーブルに載せるのを見計らって引き寄せられた。

「ちょっ、ブラックっ」

こめかみ辺りに頬を摺り寄せ、目尻に口付けられて、ぱぁっと頬が赤くなり身体中が熱くなる。慌てて離れようとするけど無理。力

の差があり過ぎるし、私も本気にはなれないから。

「まだ、聞いていません。私は今、可愛い奥さんのところへ戻ったのですよ？」

いって、はむっと耳を食まれ、尚暴れた。

「ちょ、ちょちょ、ちょっと、ブラックっ！」

「はい？」

慌てる私を無視して、耳の付け根とかに容赦なく舌を這わせ口付けてくる。

「くす、くすぐったいからやめ、やめてっ」

「マシロって本当に感じやすいですよね？」

可愛い、と付け加えて頬を包まれ舐めるように、しっとりと撫でられる。そのくすぐったさに思わずきゅうぅっと目を閉じると、ふふっと色香を含んだ笑い声を注がれ、ようやく解放してもらった。

私の顔は鏡を見なくても真っ赤になっていることくらい容易に想像出来る。

ううっと耳を押さえて声を殺したあと、私は一つ深呼吸。手のひらと甲を交互に頬に当てて、無駄だと分かっているけれど、頬の熱を取る努力をした。

そして、ブラックのほうへ向き直ってにこり。

「お帰りなさい」

怪我がなくて良かったと、改めて抱き付いた。

ふんわりと私を抱きとめたブラックは、優しくそっと髪を撫でる。

耳に届く鼓動はいつもどおりで本当にほっとした。
別にブラック自身が命に関わることがあると思わないけど――基本的に周りへの被害の方が大きいだろうし――やっぱり、顔を見ることが叶わない日は不安に思う。

「でも、また大聖堂が変な研究とかしてたの？」

ソファに深く腰掛けたブラックに体重を預けながら、のんびりと問い掛ける。

ブラックが遠方まで出向くということは、あまり嬉しい話ではないが基本的に大量死が待っている。その原因は色々あるけれど、一昔なら、領土同士の小競り合いが多かったらしい。今は平和協定が全域に巡らされているし、王宮からの監視も厳しいので互いに牽制しあって人が大量に死んでしまうような騒ぎは起きていない。

ということは、時折派手好きな大聖堂――魔術学校。魔術研究所完備施設――学園長が起こす、魔術実験が大きな要因であることが多いのだ。

あの人は「あーんっ、ごめんなさぁい。絶対上手くいくと思ったのにぃ」としなを作ってそういう場をあっさり切り抜ける。

いろんな意味で良い迷惑だ。

これまでのことを思い出して、やれやれと息を吐く。

台所からは、良い香りが漂ってきた。

お腹がぐぅと鳴りそうだ。なんか家主がここでだらだらまったりとしていて、子どもに働かせているのはどうかと思うけど、手伝って怒られるのだからこちらとしても複雑だ。

「大聖堂というよりは、今回、流行り病が出たようですね」

私の肩に腕を回しゆるゆると髪を長い指で絡め取って遊びながら、そう口にするブラックに「流行り病？」と問い直した。

「ええ、原因はまだ分かってないみたいでしたけど、結構な人数消えてしまっています」

「それって、大変よね」

「海は渡っていませんし、王都までは来ませんよ」

「んー、そうじゃなくて。原因とか分かってないんでしょう？　私も薬師の端くれとして」

原因究明をと口に仕掛けて、ブラックの手がその口をそっと押さえる。何？　と目で問えば、困ったように微笑んだブラックに見詰められた。

「マシロは何もしなくて良いです。こういうことの調査には王宮が乗り出しますよ。マシロがもし、いつも自分でいうように『一般人』であるなら、口出しはしないことです」

にっこりと人の揚げ足を取るように告げるブラックに複雑な気分になる。

違わないし、その通りだけど、手をこまねいているというのは性に合わない。そんな私の気持ちを察したのか、ブラックは話を続ける。

「私にそこまでの役目はありませんが、一応、エミルにも伝えておきました。急ぎ、原因の究明に乗り出してくれるでしょう」

そんな面倒があったので、少しだけ戻るのが遅くなってしまったのです。と締め括って再びぎゅーっと抱き締められる。

ブラックのことだから、これからその病気に罹る人のことを思っ

てというよりは、私を大人しくさせておくためだろうけど、王宮が直接動いてくれるなら問題ないだろう。

現在この国は、三人の王様によって治められている。エミルというのはその筆頭で、私やブラック――はお互いに認めないだろうけど――の友人だ。

第四話：これが私の旦那様（2）

「片付けなんてルカにさせれば良いでしょう？」
「ダーメ。一応、当番制なんだから守らないと意味ないの。もう直ぐ終わるから、ルカとでも遊んで待ってて」

夕食の後片付けを始めた私を眺めつつ、キッチンカウンターに体重を預けて、ぶつぶついっているブラックにそう告げればあっさり「嫌ですよ」と返してもらうけれど、それ以上はせっついてはこなかった。
しかし、黙ってくれたものの、次は痛い視線に眉を寄せ

「そんなに見なくても私は消えないし、気が散るし、恥ずかしいから、あっちでお茶でも飲んでるか休んでてよっ！」

私は泡々のついた手を振って、ブラックにしっしっと告げる。
ちょっとつれないことをしてしまったかなと、罪悪感。

至極残念そうに踵を返したブラックの尻尾が萎えている。でも、早く家に帰るためにもさくさく終わらせたいのが私の本心だ。
店は一応自宅兼だったのだけど、結婚してからは、一応辺境の地にある——王都に住んでいるとつくづく思う。本当に何もない田舎だ——種屋の方が私たちが寝起きする場所だ。

こちらの留守はルカに預ける形になった。
今回のように、ブラックが屋敷に居ないときは、私の店で過ごすのが通例。ブラックは常に心配性で、私を一人にしておくのが多分嫌なのだろうなと思う。

図書館で学生をしていたときも、大抵は先にあげた今は国とか治めちゃってるエミルとか、そのお付の人、稀代の天才魔術師という偉大な肩書きを持った残念なお父さんカナイ――因みに残念なのは立ち位置と性格――天賦の才を持つ王宮騎士。天使の容貌を持ち不屈な消化器官を持っている――質量保存の法則とか完全に無視、底なし胃袋保持しているとしか思えない――アルファが一緒だった。

あと、メネルとの話にも上がったシゼが居たけど、一緒くたにすると怒られそうだ。

シゼは誰よりも引き篭もり率の高かった少年だ。今は、みんな王宮勤めになってしまって私だけ離れ離れ。図書館でわいわいやっていた頃を思うと懐かしくもあり、寂しくもある。

「やはり変わりましょうか？」

「っ」

物思いに耽っていた私の背後に立ち、そこから腕を伸ばし私の手を包み込んだブラックに、びくりと肩を強張らせ息を詰めた。心臓に悪い。

「――　……何か考え事ですか？」

私の肩口に顎を乗せそう囁くブラックに「ううん」と首を振ったけど無駄だろう。ブラックはそんなに鈍くないし、兎角私の機微には敏感だ。

「マシロも、王宮に入りたいですか？」

彼らと居るほうが楽しい？　と重ねられ苦笑する。

「違うよ。そういうことじゃない。私はここが良い」
「無理、していませんか？」
「してないよ。思い出に浸ることって誰にでもあると思うけど、懐かしむだけでそれを永遠に続けたいというのとは違うと思う。時間は流れてるんだよ。止まらない。その中で、いっぱい選択してきたんだから、」
「間違っていませんか？」

濡れた手のままブラックは私の身体をぎゅっと抱き締めた。
間違ってない？　と不安げに重ねるブラックに、胸がきゅっとする。私は手についていた泡を流して、そっとブラックの手に触れた。

「間違ってないよ。ブラックが私以外を必要としないように、私もブラック以上に大切なものなんてない」

この人は、獣族で、種屋で、世界最強だったり唯一無二の存在だったりするけれど、その内側はとても孤独でとても繊細な人だ。

そして私以外を大切に出来ない人。
自惚れでも何でもなく事実だ。

ブラックは自分すら大切には出来ない。ただ死なないようにしているだけ、それも役目だから。そして何より、私が悲しむし私の命も消えるから。

私たちはそういう関係でもある。

ふっと後ろに体重を預けブラックの腕に頬を摺り寄せて、深い息を吐く。暫し瞑目したあと、ちらと振り仰げば目と目が合う。
瞳の持つ吸引力は半端ない……お互いの吐息に触れ合い唇が重な

……

――……バキッ

らず。家の中であってはいけない音が響いた。

「おれがいうのもなんだけどさ。さっさと終わらせるか、おれに代わるかして、出て行けよ。あんたたち」

「ルルルルルカ！　おっおかえりなさいっ！！」

ブラックの腕を振り払って、瞬間湯沸かし器の如く赤くなった私は、微妙に意味不明な台詞を吐いてしまった。

今更だ。

今更なのは分かってる。

分かってるけど、やっぱり、子どもの前ですることじゃない。と、私は思ってる。

そして、普通の子どもは

「壁に拳突っ込むのやめなよ……」

そんなことはしない。

「折角お風呂から出たところなのに、汚れちゃうよ？」

仕方がないなという風に続ければ、猫が二匹黙った。あれ？　なんかズレたことをいっただろうか？　ルカは私から顔を逸らし、無言で壁から拳を引き抜きつつ、ぺっぺっと払う。

「そこ、綺麗に直して置いてくださいね。全く、自分で直すのが分かっていてどうしてやるのですか？　私には理解出来ません」

二人揃って私を無視した。

私は、むっとしつつも作業再開。本当、さっさと終わらせよう。

＊＊＊

「ルカ、戸締りと火の始末を」

「分かってるよっ！　うるせーな。ったく、くそーっ！　面倒臭ぇ！　誰だよこんな粉砕したのっ」

片付けを終えて、さて帰ろうかなと思ったところでルカに声を掛けると、ルカはまださっき自分で壊した壁の修復に手間取っていた。床に散らばった欠片が、ふわりふわりと浮き、元の場所に戻っていっている。

「明日の朝食はルカが代わって下さいね」

すっと私の隣りを通り過ぎたブラックは、そういってにっこりと壊れた壁に手をついた。その瞬間、ぽっと壁全体が光り一瞬にして壁の穴が塞がってしまった。

「ちょっ！　邪魔すんなよっ！」

「力を注ぐ場所を間違えています。そんなことではこんな穴程度のことで徹夜ですよ。いくら大量に力があっても、配分と使う先を間違えては時間を食うばかりです。手際、良くなってくださいね？」

にっこり……と、したり顔。
物凄く悔しそうなルカの表情――尻尾も耳も逆立ってる。膨らんでる。威嚇してる威嚇してる。ふ、ふふ――に、ブラックは満足気だ。こちらはとてつもなく大人気ない。

「さあ、余分な仕事をしたので疲れました。ゆっくり湯殿にでも浸かって愉しみましょう」

――……寛ぐんじゃないですか？　愉しむって何を愉しむんですか……。

思わず一歩下がりそうになった私の手首をきゅっと掴んで、ブラックはにっこり。
つかつかと先に歩いて扉を出た。

背後で「二度と帰ってくるなっ！」とか「陰険猫ーっ！」とか叫んでる。あんたも猫だよと心の中だけで突っ込む。やっぱりこの二人は仲良しだよねと思うんだけどな……なんて考えていると……

「なんでお風呂に直行なの？」

そして、どうして、自分ではなく私の服に手を掛けているのですか。旦那様。
一応いろんなところから、消えたり出てきたりはお行儀が宜しくないと私が不機嫌になるので、扉を境目にするのだけど、玄関開けたら家のお風呂場って、ないよね。

「ちゃんと予告はしましたよ？」
「したら良いって問題じゃなくてね」
「どういう問題ですか？」

私が激不機嫌そうな顔をしているというのに、完全に無視してブラックは鼻歌でも出てきそうな雰囲気で私の襟元のリボンを解き、背に腕を回すとワンピースのファスナーを降ろす。

悔しいから、私も目の前に来たブラックのループタイを引っ張りぬき、シャツに手を掛ける。どうせ、ぶつぶついっても無駄に終わることは分かっている。

第五話：愛猫家ですが、何か？

＊＊＊

「ねぇ、私がブラックの髪洗っても良い？」

簡単に身体を流して湯船にたぷん。

正直一人では持て余すだろうと突っ込みたくなる広さのお風呂だ。

黄金とかでは出来てないけど、大理石だ。うちの猫は綺麗好き。猫だけどお風呂好き……なのだろう。

「では私はマシロの身体を洗って良いですか？」

するりと私の腰に腕を回して、自分の膝の上に抱え込みながらそういったブラックに暫らく唸る。唸るけど……。

「良いよ」

そのくらいの価値がある。

仕方ない。

羞恥で頬が染まるのか、お湯の温かさで頬が染まるのか。分からないけど、後者だと思っておくことにする。私が了承すると思っていなかったのか、少しばかりブラックは驚いた顔をしていた。そんな顔をされたら私が物凄い恥ずかしいことを口にしたみたいじゃないか。

口に、した、のかな？

ま、まあ、良い。こほんっ。

そうと決まれば、即実行。
私はブラックの腕の中をすり抜けて、胸元を押さえて身を乗り出す。そして、やっと届く位置に置いておいたバスタオルを引き寄せて上がると、さあさあと、湯船の淵にブラックを座らせた。ブラックは微妙に複雑そうな顔をしたものの、私の機嫌の良さには敵わない。
ふ……と息を吐き観念したようだ。

シャワーまでは遠いから、手桶でお湯を掬ってそっと掛ける。
払ってる払ってる……ぴるるって猫耳がお湯払ってる。耳がひょこっと出ているものだから、ブラックの髪はこの耳の付け根だけ癖が強い。そこがまた、耳と一緒にぺしゃんってなって……なんだか、凄いむずむずする。テンションは直ぐにマックスです。

「はぁ……」

思わずうっとり。可愛い。可愛い可愛い可愛いっ。
アルファに動物フェチだといわれても気にしない。
いや、もう認めても良い。私の負けだ。可愛すぎるのがいけない。

ああ、駄目だ耳ばかり見てたら手が止まっちゃう。

私はシャンプーを手のひらで泡立てて、ふわりとブラックの濡れた髪に載せて、そっと指を差し込んで丁寧に洗う。

「ねえ、ブラック」

ちょっと落ち着こうと深呼吸。

「……ん、はい？」

興奮気味な私を他所にぼんやりしていたのか、ブラックの返事は少し眠そうだった。

疲れているというのは本当なのだろう。ごしごしと目元を擦って振り仰ごうとするから、そのままで良いよと頭を押さえる。

「さっきの話だけどね」

「さっき？」

「うん、流行り病のこと、どんな症状なの？」

私が問い掛ければ「ああ」と頷き、一応答えてくれる。

「別に大した症状はありませんよ。眠り病なのでしょうかね？　目が覚めないのですよ。外傷もないですし、苦悶の表情で逝くものもいたようですが、大抵は本当にただ眠っているだけに見えましたね。小さな村が丸々一つ全滅でした。獣が寄るのでそれまでに処理しないといけなかったため、急ぎといえば急ぎ、ですかねぇ」

まあ、放っておいても別に問題ないのですけど。と締め括った。恐いことをいうなと、口にする代わりに、泡のついた手で耳を擽る。

「ちょ、マシロっ、やめてっ」

本気でくすぐったいらしく、素で嫌がるから止められない。

中に泡が入らないようにするためか、ぺしゃんっと頭に張り付く耳を両手で掴んで左右に引っ張る。軟骨の感触が堪らない。

ぞくぞくする。

ルカは絶対に触らせてくれない。

はぁ……可愛い。

くにくにくにくに……手の中で揉んでしまうと、ブラックが肩を強張らせ尻尾を自分の体にぴったりと寄り添わせる。負け犬――というか猫だけど――体勢だ。こうさーんってしている雰囲気が、苛めている気分になる。

いや、苛めてる？

違う。断じて違う。これは可愛がっているのだ。

「やめ、て」

声が掠れてますよ。

そんな色っぽい声出されたら、止められない、よね？

耳と尻尾は比較的感じやすい場所らしい――私にはついてないから、当然分からない――徐々に前のめりに逃げ出そうとするのがいじらしくて、もっともっと苛めたくなるけどあまりやると反撃が恐い。だから、ブラックが耐えかねて振り返ろうとした瞬間、頭からお湯をかけた。

「マーシーロー……」

「ご、ごめん。あんまりブラックが可愛いから、つい」

冗談が過ぎました。と手を合わせれば、ふっと呆れたように笑い、お湯の滴る前髪をかき上げる。

物凄く色香の漂う図なのだけど……ああぁ、耳がやっぱり払うのね。ぴるぴるぴるぴる……はあ……ふんわりした気分になる。

和む。癒される。

「ひゃっ！」

つい耳に気を取られていて油断した。

ぐいっと腕を引っ張られて、ブラックの前に膝をつく。片方の足を跨ぎ、私の方が頭一個飛び出す。え、えっと……と動揺してブラックの肩に腕を置き顔を覗き込むと、すぅっと瞳を細めて綺麗に微笑まれる。

その妖艶さに、どくりと心臓が高鳴ってしまう。

「それほど、耳が好きなら堪能してください」

私はこちらを堪能するので。するりと、バスタオルの合わせ目から手を滑り込ませる。

「んっ、ちょ……」

「なんですか？」

するすると背中を手が這うと、その動きでタオルがはらりと解けてしまった。ブラックの目の前に裸が晒されて、ふわぁっと身体が熱を持ち恥ずかしさに染まる。なんとか、逃げ出そうと身体を捩ったけど、もう既に固定されてしまっているから無理だ。

ブラックは、こつりと鎖骨の下辺りに額を押し付け、そのままぱくりと私の胸を頬張ってしまう。

「……っぃ、や……」

暖かな口内に敏感な部分を含まれ、ねっとりと舌が絡み着いてくる。

お腹の奥のほうからじわじわと上がってくる熱に、声を殺し、ブラックの頭にしがみ付いて上がる息を堪えた。それを宥めるように

回されていた片手に背を撫でられ、ほんの少しだけ力が緩む。

「声、出して良いですよ」

唇を少しだけ離して、ちろりと胸の一番高いところを舐める姿が厭らしく、ざりざりとした舌が皮膚への圧覚を鋭敏にさせ、じわじわと私の目尻に生理的な涙が浮かんでしまう。

そして、視線だけが私に投げられ、見下ろしているのは私のはずなのに、見下ろされ、完全に囚われる。

心地良い拘束感は私の気持ちを高ぶらせた……——

第五話：愛猫家ですが、何か？（後書き）

※続きにはＲ１８規正部分があるページも存在します。
有りは下記アドレスです「○○○」部分をパスワードに置き換えて、指定ページにてお楽しみください＾＾
ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ１１．ｐｌａ．ｏｒ．ｊｐ／ｓｓｈａｐｐｙ／ｂｅｅｎ／ｍｕｇｅｎ○○○６．ｈｔｍｌ

※パス請求はブログ『ちょこっと広場』の「パス請求案内」を参照ください。
ｈｔｔｐ：／／ｓｙｏｕｓｅｔｕｎａｒｏｕ．ｓｅｅｓａａ．ｎｅｔ／ａｒｔｉｃｌｅ／１８４６１００８７．ｈｔｍｌ

第六話：先に起きた朝は……。

＊＊＊

次に目を開けたときには寝室のベッドの上だった。ゆるゆるとブラックの長い指が私の髪を梳いている。ぼんやりと窓の方へと視線を走らせれば外はまだ暗い。少しの間堕ちていただけだと、思う。

「――　……」

「目、覚めました？」

くすりと微笑まれて、ぱぁっと羞恥に頬が染まる。私は、ううっと唸ると、もぞっと寝返りを打って、ブラックの胸に顔を埋める。

「のぼせただけだよ」

イキ過ぎたわけではなくて、湯当たりしただけ。きっとそう。

「ええ、きっとそうですね？」

可笑しそうにそういって、髪にふわりと口付けられる。

「マシロは本当に可愛いですね。それにとても艶っぽい瞳をする……」

いって、少しだけ私を引き離すとそっと顎に手を添えて上向かせる。

ブラックの方が、余程色っぽいと思う。その瞳に見詰められると、どきどきと鼓動が早くなり胸が熱くなる。

柔らかく悪戯をするようにそこかしこに降ってくるキスに瞼を落とし、甘い吐息を漏らす。

夜着を着せてもらってなかったから、まだ、そのつもりなんだろうなーとは予想出来たけど。

「疲れてるんじゃないの？」

きっとブラックは一時でも早く戻れるように、こちらを出てからは一睡もしていないはずだ。いつもそうだから、今回だけ違うということはないだろう。

「まだ平気です。ここにはマシロが居るから」

「でも」

と、不安をそのまま口にしようとすれば、口付けで塞がれる。軽く吸って離れると、ふっと優しい目で「平気です」と重ね、見詰められ気恥ずかしくなる。そして、少し不機嫌そうな顔をして「それにしても」と続ける。

「以前はここまでしていなかったんですよ。もう、遠方まで出向くのやめても良いですか？　やめましょうか……一日でもマシロを感じられない日があるのが耐え難いのです」

子どもの駄々のように、そう真剣に口にするブラックに暖かな気持ちになる。私は愛されているのだと喜びに満たされる。

「私はどこへも行かないよ。ここに居る、ブラックが帰ってくる場所に居るんだから、ね？」

くすりと微笑んでそう告げた私に、ブラックは複雑そうな顔をし

て思案気だ。ふわふわとベッドの中で私の素足に触れる尻尾がくすぐったい。

「マシロって、厳しいですよね」
「そう？」
「そうですよ……」

ああ、もう、しょんぼりしないで。可愛いから。

「そんなに寂しいなら、今、離れていた分取り戻せば良いでしょ？」

そっとブラックの両頬を包み込み、唇を重ねる。ちょっぴり大胆発言だけど、どのみち同じだろうからたまには良いかと、気まぐれにそう思う。

尻尾の先っぽがぱたぱたと私の足を叩く……この、猫……。駄目だ、可愛すぎるのがいけない。

＊＊＊

翌朝、閉め忘れた窓から陽光が差し込んでくる頃、私は目を覚ました。私の身体を抱き留めたままの、ブラックの腕をそっとずらして——繋いでいた手は離してもらえなかったけど——可愛らしく眠っている綺麗な顔を眺める。

普段なら絶対に有り得ない。

基本的にブラックは私より遅く寝て私より早く起きる。
そう、遠方に出ていて疲労困憊しているときだけ……このときだ

け、私はブラックの寝顔を堪能出来るのだ。

私の小さなお楽しみ。

遠方で離れるのが嫌だという気持ちも分かる。せめて夜くらい一緒にと思ってもらう気持ちも嬉しい。でも実のところ、一日二日居なくて戻ったとき……

「際限なく私を欲しがってくれるのも、ちょっぴり嬉しいんだよ」

そうっと頬を撫で、ちゅっと額に口付けた。

「……あれ？」

と、動けない。降ろしたはずの腕が再び私に掛かっている。

「では、朝から欲しがっても良いですか？」

ぺろりと鎖骨辺りから首筋を舐め上げられて、慌てて肩を竦め腕で突っ張り胸を押す。その程度では離れたり出来なくて、私はわたわたと暴れる。

「ちょっ！　ちょっとっ！」

「おはようございます」

いわれてぐるんっと視界が回転する。

私を簡単に下にして朝から良い笑顔だ。もっとこう気だるげな、婀娜(あだ)っぽいところはないのだろうか？　はぁと私が嘆息したのも無視して、耳朶を甘く食み、つぅっと耳殻を舐める。

くす、くすぐったいっ！！

――　……ばきっ

「大人しく寝てなさいっ！」

全く！　毎回毎回、流されると思うなよっ。

ほぼ八割くらいの確立で流されてるけど……と自己嫌悪に陥りつつ、ブラックをベッドに沈めることに成功した。

今度は私の代わりに枕を抱え込んでごろりと転がって「もう一回くらいしてくれても……」とぶつぶつ零しているブラックにやれやれと呆れる。

するりとベッドから足を下ろし、ふと思い出して振り返った。ブラックの肩口に掛かっているシーツに手を掛けて降ろすと、痛々しい爪痕が残っている。私がお風呂場でつけてしまったものだと思う。

「……ごめん」

肩甲骨の傍に出来た傷跡にそっと触れれば、僅かに肩を強張らせた。そりゃ、痛い、よね？

じりっとにじり寄って、唇を寄せるとくすぐったかったのか、ふふっと笑いをこぼされてしまった。

「平気ですよ、っと、平気ではありませんでした」

むくりと起き上がって、がっつりと抱き締められる。

「痛いです。慰めてください、だから、もういっか……いぃたぃ、痛い、痛いです」

懲りないブラックの傷口をぐりぐりした。私は我ながら鬼だと思

う。反射的に解かれた腕から逃れた私は立ち上がり傍にあった夜着を羽織つつ肩口からブラックを振り返る。
ああ、ぶちぶちといいながらぽすりとベッドに戻ってしまった。
シーツの隙間から覗いている尻尾の先が器用に曲がって、微妙に物悲しげにぱすんぱすんベッドを叩いている。

「……っ……」

負けるな私。
大抵、ここで負けるからずるずるだらだらしてしまうんだ。分かってる、分かってるよ。それにしても小動物というわけでもないのに、なんであんなに無駄に可愛げがあるんだろう。

可愛い、可愛い、可愛い。
飛びついて、ぎゅってして、ぱくりとしたい。したいけど、

「そ、そんなことしたって、駄目なんだからねっ！」

今日はやった。やってやった。よし。
私は心の中でガッツポーズして、我慢した自分を称える。キッパリいい放ったところで、ぴたりとブラックの動きが止まったから計算だったのだろう。落ちなくて良かった。

ほふっと一息吐いて、私はシャワーを浴びるため隣接したシャワー室へと足を運んだ。

それにしても……戻ったらきっと「遅い」とルカに怒られるだろうなー。
朝ごはん作って待ってるかなぁ、いや、待ってないな。

きゅっとコックを捻って暖かなお湯を頭から浴びる。気持ち良い。シャワーは気持ち良いのに、つぅっと足の間から情事のあとが流れ落ちる。

この感触だけはあまり慣れない。

気持ち悪いとまではいわないけど、気持ち良いものではないことだけは確かだ。一応、そのあとには拭うんだけど、多分奥に残ってるんだろうなと思う。

でも、こんなのここ最近だ。

それまで、こんなことなかったのに……ぼんやりと身体を泡々にしながら思案する。

私の知識不足かも知れないがこちらの避妊法はかなり充実していて、多種多様。色々なものがある。別に興味があって知るわけではなく、授業の一環で知るだけだ。

あの日の教室での居た堪れなさはなかった。今思い出しても恥ずかしく身体を小さくした記憶が蘇ってくる。

直ぐに身体から流れ落ちていく泡が排水溝に吸い込まれていくのを眺めつつ、うーんっと唸って、でも、結局答えは落ちてないから『まあ、良いか』で終わってしまう。

第七話：薬師＜デート＞騎士

＊＊＊

「僕は忙しいんですよ。どうして毎回毎回誘いに来るんですか？」

「シゼと行きたいからに決まってるじゃん。行こうよーねえねえねえ」

月一というわけではないけれど、不定期に行っている”陽だまりの園“健康診断に行くことにした。もちろん、私の気まぐれで。

そして、私は医療行為までは公に行えないので、王宮までシルゼハイトことシゼを誘いに来たのだ。

「行きません！　医者なら王都にいくらでも居るでしょう。どうして、僕のところにわざわざ来るんですか？」

はあ、と、大仰に嘆息したシゼに眉を寄せる。

その動きに合わせて、綺麗な菫色の髪がさらさらと肩口から流れ落ちて、憂い顔を際出させる。女の私から見てもシゼは綺麗だと思う。

人形のようだ。

黙って作業に没頭しているときなんて、人間とは思えない。アンドロイドとかそんな感じが漂っている。正直、余程の顔見知りでないと声は掛け辛いと思う。近寄るな。声を掛けるな。オーラがびしばし出ているから。

まあ、私は微塵も気にしないけどね。

「そんなのシゼが好きだから決まってるでしょ。私はシゼと行きた

いの」
「っ！」

もう、我が儘いわないでよっとシゼの腕を掴みぐいぐい引っ張る。どんなに人間離れしたもやしっ子に見えてもシゼは男の子だ。自分で動く意思がなければ梃子でも動かない。顔を真っ赤にして「行きません」と再度断られた。

「それからっ、す、好きとか、簡単に口にしないで下さい。僕は」
「大嫌いなんだよね。分かってる。よーく分かってるよ？」

どういうわけか、私は昔からシゼに嫌われている。気にしないけどねっ！　でもちょっとは傷付いている。自然と眉間が狭まり、唇を尖らせてしまうのは仕方ない。

「むー、いっとくけど、エミルには許可を取ってあるんだよ？　シゼの都合がつけば、いつ連れ出しても構わないっていわれてるんだからね」

シゼは王宮勤めの医師の中でも最上級職。陛下付きのお医者様だ。そんな彼をひょいひょい王宮から引っ張り出していては、怒られてはいけないと思ってエミルに話をしたら二つ返事で「良いよ」と返ってきた。エミルも引き篭もりまくりのシゼを心配しているのだと思う。
面白がっているようにも見えたけどきっと気のせい。

「つきませんっ！　都合悪いです、回れ右して帰ってください」
「……引き篭もりめ」
「なんですか」

睨んだって恐くないよーだ。もうシゼには睨まれるのも嫌われるのも慣れっこだ。

「別にー。折角、レーズン入りのパウンドケーキ用意したんだけどなー、今からなら丁度終わったくらいがお茶の時間だよねぇ」

「べ、別に僕は食べ物に釣られたりしません。アルファさんじゃないんですよ?」

「僕がどうしたの?」

二人できゃんきゃんとやっているところに、突然後ろから腕が伸び絡み付いてきたものだから、二人揃って肩を強張らせた。

「マシロちゃんっ。僕、今日非番なんですよー。デートしましょう、デート! こんな薬品臭いところに篭ってると、シゼみたいに引き篭もりで陰気になりますよー」

「――……」

「ア、アルファ、そ、それはいい過ぎなんじゃないかなー?」

ぎゅうぎゅうと私の首筋に抱きついて頬を摺り寄せてくるアルファに、私も一応は注意する。シゼの青筋が立ってる気が、しないでも、ない。折角、ケーキでつれると思ったのに、これはますます臍を曲げてしまいそうだ。拗ねると面倒なんだけど、なぁ。

「で、マシロちゃんは何してたんですか?」

「えぇと、シゼを誘ってマリル教会、というか、陽だまりの園にいってから、お茶でもと思って誘ってたんだけど」

「えー、シゼとデートですか?」

「違いますっ! 大体僕は行くなんていってません」

「って、いってますけど、それでもシゼを運ばないといけないんですか?」

……ん？

今なんか不穏な台詞が混じっていたような気がする。

私は内心疑問符を浮かべながらも「そうなの」と頷いた。シゼが警戒心を露わに、すっと一歩下がる。けど、相手は紛い形にも王宮騎士。しかも陛下付きのアルファに敵うわけもなく、あっさり担がれる。

「ちょっ！」

「ア、アルファっ？！」

シゼが声を詰めるのと、私が驚きの声を上げるのはほぼ同時だ。それなのにアルファは、にこにことといつもと代わらない笑顔で「さあ、行きましょう」と踵を返した。

年は私やアルファよりも下ではあるけれど、シゼももう立派な青年だ。軽いわけないんだけど、アルファは体格こそ小柄に見えるのに力持ちさんだ。なんかこういう光景ずぅっと前にも見たことあるような気がする。シゼって担がれ易いのかな。

研究棟を出るまでに、シゼは「行きますから」と約束させられて、アルファから解放された。物凄くやつれている。シゼのほうが病気みたいに見えなくもない。

「最初から、素直に付き合えば良いのに。白月の姫が直接お誘いに寄ってくれるのなんて光栄だよー？」

にこにこと、結局自分も着いてくることにしたのだろうアルファがそういって「ね？」と私に微笑むけれど、王宮に出入りさせてもらってはいても、私は民間人だ。苦笑して首を振ったけどアルファ

は見てなかった。
　大丈夫。慣れてますよー、アルファは人の話を基本的に聞かないお天気屋さんだ。

「嫌ですよ……マシロさんが容赦なく来るから、凄く嫌なんです」
「あ、メネルに聞いたよ。有名になってるんだってね？」

　くすくすと笑えば、知ってるなら自重してくださいっ！　と物凄い恐い顔をされた。もともと美人なだけあって、凄むと迫力があると思う。思うけど「嫌だ」とにこり。

　シゼは私を嫌い嫌いで通すけど、私はシゼが好きだ。
　構いたくて仕方ない。

　だってシゼの反応は一々大げさで面白い。多分、私と同じ理由でアルファも絡むんだと思う。

　私の腕に腕を絡めていたアルファは急にその腕を引き、ぴとーっとくっ付いてくるとにこにことたくさん通りに並んでいる露店の一つを指差した。

「ねえ、マシロちゃん、アイス食べませんか？」
「食べ歩きは駄目だよ。お行儀悪い」
「えー、露天の食べ物なんて食べ歩くためにあるんですよー」

　いってふらふらとアイスとクレープを売っている露天にアルファは誘われて行った。
　待とうかと思ったけど、無視してシゼが歩いていくのでぱたぱたとそれを追い掛ける。アルファのことだから追い付くのもきっと直ぐだ。心配はいらない。

「はい、マシロちゃん。あーん」

本当に早く戻ってきたアルファの声につられて口を開けると、スプーンで掬ったアイスが放り込まれる。ひんやりしゃりっとした食感が口内に広がって、いちご味だ。

「美味しい」

「ですよね？　僕この間あそこの話し聞いて絶対マシロちゃんと食べようと思ってたんですよ」

にこにこっとご機嫌な声でそう告げるアルファに、ありがとう、と答え隣りを見れば、アイスは三段重ねだった。

お腹壊さないようにね。

「シゼもいる？」

私の反対隣りを歩いていたシゼに同じようにスプーンを向けると、いりませんっ。と赤い顔してきっぱり断られた。

シゼ甘いもの大好きなのに……。

変なの。

仕方ないので、マリル教会までの道のり——王宮から歩くと一時間以上掛かる——アルファと仲良くアイスを食べながら向った。

第八話：本当のお姫様

そして、白壁に包まれた青空に映える教会。
白月の使者、聖女マリルから与えられるという美しいときを信仰対象とするマリル教会に到着して早々。

「主っ！！」

――　……ガバッ！

「ぐぇっ」

私の目の前は真っ暗になった。

「久しいなっ。文が届いてから首を長くして待っていた！」

姿を見なくても――見る余裕もなかったが――誰かは分かる。
私と、こともあろうか主従契約を結んでしまっているハクアという白銀狼だ。通例ならば寝食を共にする仲であるべきらしいけれどわけあって――大型犬を二匹も飼うスペースはないという、リアルな理由――ハクアはマリル教会で生活している。
基本的には、犬の姿――正確には狼――で居るはずなんだけど、どういうわけか、決まって私を出迎えてくれるときには人型で熱い抱擁をしてくる。

「……しぃ」

うごめけば「なんだ？」といって、大きな体を屈めて私の顔を覗き込んでくる。

少しつりあがった鋭い瞳は、左右違う色をしている金銀妖瞳だが、その明るい色を曇らせて心配そうに私の顔を映している。

「苦しいっていってるの。げほっ」

私は喉元を擦りながらそういって苦笑する。

大きな形（なり）をしてそんな顔されたら怒る気が失せる。

「すまない。しかし、主が華奢なのも問題だ。しっかりと食事は取っているのか？　このようにいつまでも可愛らしい姿では、誰に食べられても」

「誰も食べないから」

ハクアは基本獣なだけに、基準が微妙だ。

直ぐに人のことを食べようとする。主なのに。食用だと思われているのだろうか。

――　……はあ。

「そうか？　いつも美味そうだと思っているが……」

味見をしても良いか？　と鼻先が触れ合う距離に近づいてくる。

私も下がれば良いのだけど……腰を取られ、完全に固定されている。

「死にたいの？」

もちろん。私がいったわけではない。

きらりと陽光が反射すれば私の顔が鋼に映る。綺麗に磨き上げられた片手剣は切れ味も抜群そうだ。反射的に身体を反らしたハクアは「小さな騎士も共にしていたのだな？」と喉の奥で笑う。

「あんたがデカいんだよっ！」

確かにハクアは二メートル超える長身だから、普通に考えてデカイ。

そして、アルファは私と十センチも変わらないくらいだから、騎士にしても男の子にしてもちょっと小柄だ。私からすれば、可愛らしくて長所でもあると思うのに、アルファにとっては劣等感を刺激する部分以外に他ならないらしい。

「大体、マシロさんはご主人のある身なんですよ。雑婚のようなまね」

「――　……」

とても静かにしているように見えたシゼの発言に、私たちは思わず無言でシゼを見た。シゼは集まった視線に、少しばかり萎縮して「なんですか？」と強張っている。

「いや、いうにことかいて雑婚って……」

「一番まともなことといってはいると思うけど、一番恥ずかしいことといってない？」

「心配しなくても良い。白銀狼は、多妻制だ。それに私と主はそのようなものより、もっと深く近しい関係だ」

もう、どこを否定して良いか微妙過ぎる。

再び私との距離をゼロにして頬を摺り寄せてくるハクアにがっくりと肩を落とす。

「申し訳ないけど、私は人間で、しかも多妻制なんてものが通る身分でもないんです」

全く。

エミルのような王族は色々な見地から多妻制だ。けれど、私は民間人であるし、それに何よりそんなものを容認できるほど、心広くない。

きっと嫉妬心で死んでしまうだろう。

「主は遠慮深いのだな」

心底感心したという風に口にしたハクアを見ていると、本当に白銀狼は頭が良いのだろうか……些か疑問に感じる。

「兎に角、離れなよ。今日は僕とデート中なんだからねっ！」

そんなこと了承したつもりはなかったんだけどな。アルファは既にそのつもりだったんですね。

「連絡してあるのでしょう？　僕、先に陽だまりの園の方へ行きますから、荷物貸してください」

心底呆れたように溜息を吐いて、冷静にそういったシゼは、私の腕から診療バッグを抜き取ってさっさと建物の中へと入っていった。

その後姿を見送った面々はようやっと落ち着きを取り戻した……って、私は最初から冷静だよ。違うのは、目の前の狼さんだけです。

「ハクアもそろそろ本当に私の身体を離してもらえると嬉しいんだけど……」

「気にしなくて良い」

私が気にするんだよ。このワンコさんめっ！

因みにふさふさ尻尾と耳は残っている。今激しく振られているのはハクアの尻尾だ。とてもご機嫌らしい。

「私またシラハに射殺されそうな目で見られるのは嫌なんだけど」

シラハは、ハクアの奥さんだ。

同じ白銀狼で人型を得ると、大柄のモデルさん系の美女だ。肉感的な彼女に比べれば確かに私はお子様で、美味しそう程度のものだろう。

「大丈夫だ。あれにはちゃんといい聞かせておこう」

いいつつも一応私の体から力を抜いてくれる。

紛い形にも私はハクアの主様なので、私の命令は基本絶対だ。聞いて貰っていない気がしないでもないが気にしない。

そして、それが出来てなくて大揉めしたのは記憶に新しい。

「レニさん奥に居るの？　挨拶させてもらいたいんだけど」

ようやく解放されてハクアに案内を頼めば、こちらだと、踵を返した。

そのときには既に元の白銀狼の姿に戻っていた。

風になびく銀の毛並みはとても美しい。

本来住処にしているはずの雪山でその姿を見ればさぞかし、雄大で優美なものだろうなと思い浮かぶのだから、わざわざ出迎えに人型を取るのか疑問だけど、ハクアの心は私には計り知れない。

――　……コンコン

木戸を叩けば、中からどうぞ。と聞き慣れた声が掛かる。
ハクアには先にシゼの手伝いを頼み、私とそれに引っ付いてきたアルファがその扉を開いた。

「こんにちは、レニさん。お約束通り……って、メネル」

その先には、大きな平台の上に沢山の資料を山と積んで向かい合っているレニさんと、メネルの姿があった。二人とも私たちの訪問に、腰を上げ、にこりと迎えてくれる。
最近良く会うね、と歩み寄って机の上を見れば星図が所狭しと並んでいた。本当に本格的に星詠みを勉強しているみたいだ。レニさん意外と勤勉。

「卓上だけでじゃなくて、星見会でもすれば良いのに」

特に興味があったわけじゃないけど、何でも本物を目の前にしてやるほうが効率が良いし、頭にも入ると思う。ぺらぺらと本を捲りつつ、何の気なしにそう口にすれば、メネルとレニさんは顔を見合わせて肩を竦めた。

私は何か的外れなことを口にしてしまっただろうか？
まあ。的を外すのは私の十八番だ。

二人が説明してくれるよりも早く、並んだアルファが口を開いてくれる。

「無茶いっちゃ駄目ですよ。メネル様は正真正銘のお姫様ですよ。それがそう簡単に夜の外出を許されるはずないでしょう？　大掛かりになりますよ。今だって、ここまで来るのに僕の顔見知りが三人

は居ましたよ。この調子なら裏にも居るでしょうから……」
「え、ええっ？！」

素直に驚いた私に、アルファは私の背中から抱きつきながら「もう、マシロちゃんてば可愛いっ！」と茶化す。

「同じ“姫”でもマシロちゃんとは違います」
「まあ、私がするっていえば止める人いないよね」

自覚症状あります。
ブラックも良い顔はしないだろうけど駄目だとはいわないと思う。
そういうところは放任主義だ。

「大人数になるという時点では、変わらないと思いますけどね」

とレニさんがくすくすと笑い、その際には是非参加させてくださいね。と付け加えた。
でも、そっか……気軽にふらりと立ち寄ってくれるから、忘れがちだけど、この間だってきっと外には警護の人たちが居ただろうし、メネル。お姫様、なんだよね。

「それは機会があればということにして、今日もシゼを引っ張ってきたの？」
「あ、うん。もう先に診てるからって、陽だまりの園の方へいってくれたよ。だから、私が挨拶に」
「僕はマシロちゃんとデートのために」

いや、もう、それは良いから。がっくりと項垂れるとメネルがお上品にくすくすと笑う。

「アルファは非番なのですね？　お兄様が拗ねるわよ」
「えー、でも、エミルさんのほうがちょくちょく姿消してるから、絶対ずるいと思います」
ねえー。って私に話を振られても困るけど、確かにエミルはちょこちょこ私のところにも顔を出してくれている。多分、近衛兵とかついてない。王陛下は抜け出すのがお上手だ。
「では、ナルシルのことも頼もうかしら。レニ司祭、時間も過ぎておりますし、今日はこのくらいで」
と微笑んだメネルに、レニさんも頷いて進み出ると扉を開いた。

第九話：小さな悪魔たち

「アルファ、手伝う気一切ないね？」

陽だまりの園の園庭に植えられている大きな木の枝に登って、高みの見物をしていたアルファに声をかければ、悪びれる風もなく大きな欠伸を一つ溢して「僕、子ども苦手なんですよ」とぼやく。

ほう、そうですか。それにしても、そんなところによく器用に乗っかってるよね。

「子どもって小さくて弱いでしょ？　力加減が良く分からないから」

ぼんやりと、きゃあきゃあ走り回っているちびっ子たちを眺める。確かに、アルファからしたらそうかも知れない。因みにシゼも小さい子は苦手だろうなと思う。健康診断なんて、みんな元気だから直ぐに終わってしまうのだけど、そのあとの「遊ぼー！」攻撃が半端ない。

そして、断れないシゼが悪い。

今現在も、女の子たちに本を読んであげていたのに、それに退屈した男の子たちに襲われている。文字通り襲われている。男の子の遊びは半端がない。その相手はどう考えてもシゼには不向きだ。気の毒に。

そのお陰で私は見物組みに入っていられるわけだ。

「ナルシル王子……いつの間にか王女になってますけど、馴染んでますね」

よいしょっと木の枝から飛び降りたアルファは、私の隣に立って小さな女の子たちと遊んでいるナルシルを見たあと、レニ司祭とメネルに視線を泳がせる。二人とも子どもが好きなのだろうなと直ぐに分かる穏やかな雰囲気だ。

「かなり身分違いだとは思いますけどー。司祭と姫様結婚すれば良いんですよね」

「は？」

あまりに突飛な提案に私は驚いた。

でも、アルファはそのことに気が付くこともなく、ぽつぽつと続ける。

「エミルさんが、うんとはいわないと思いますけど。そうすれば、マリル教会ももっと磐石なものになるでしょうし……そうすれば、もっと潤ってここも充実させられる」

「政略結婚っぽくない？」

「そうですか？　僕はそんなに鋭くないですけど、嫌いあってるようには思いませんけどね」

いわれてから改めて見ると、絵になる二人だ。

この清廉として高貴な場所に溶け込んでいる。お似合いといわれれば、そうだと思うけど……ちらりと、視線を外したら、アルファがいっていた警護の人たちが目に付いた。

色々とハードル高そうだ。

確かに、マリル教会は王都でも主要施設とはなっているものの、運営状況は未だに篤志家の方たち――主に陽だまりの園の出身者――からの恩恵で成り立っている。そのお陰で、以前のような大きな

事件があったにも拘らず、ここは持ち直した。
その必要性をみんな認めてはいるけれど、不安定さは否めない。

そんなところに、大切な妹君を嫁がせる気に、エミルがなるだろうか？　本人たちの希望が強ければ、押されそうだけどそれがないと多分無理だろうな。

エミルは、彼女の妹の件があってから、以前よりもずっとメネルを可愛がっている。もちろん、甥っ子のナルシルに対してだって伯父馬鹿だ。

あまり、王宮に行っていないハズの私が感じるくらいだから、アルファたち側近はもっと如実に感じているだろう。

あの二人、本人たちはどうなんだろう？　ナルシルはもちろんレニさんにも懐いてるけど、ね。

そんなことを考えていたから、今日の帰りはいつもより遅くなってしまった。

お店まではメネルの馬車で送ってもらい、みんな王宮に帰るので一緒のはずなのに、シゼもアルファもうちで降りてしまった。一緒に遊んで帰ると騒ぐナルシルを宥めるのが大変だった。

「シゼは持って帰るんだよね。今、詰めるから待ってて」
「僕は食べて帰りますー。ルカ、お茶淹れて」

どやどやと家に帰ってきた私たちにルカは本当に苛々としていたけれど、放置しても大丈夫だろう。まだ、剣だけの争いなら、アルファの方が手練だとブラックがいっていた。

揉めても、適当に解決してくれるだろう。

私はさっさとキッチンの奥へと入り、シゼのお持ち帰り用のパウンドケーキと、今食べる分を用意していた。そこへ、ルカがぶつくさいいながら入ってくる。

「私やろうか？」

「んー、ああ。いや、これは良い」

ほりほりと頭を掻きながらそういってティーセットの準備を整える。

ルカはポットに茶葉をいれたところで、ふと切り出した。

「おれ、暫らくここ空けて良いか？」

「ん？　もしかして、教団に帰るの？　でもこの間報告に戻ったばかりでしょう？」

ルカの台詞に問い返す。

もともとルカは蒼月教団というところに属していて、そこで次代の種屋になるべく教育を受けていた。閉鎖的な環境では駄目だと――何よりブラックが早々代替わりをさせるなんて、あってはならない――ということで、定期的な報告と、ブラックの監視下という約束でルカは外に出ている身だった。

かちゃりとルカがお茶を準備していたワゴンに、ケーキ皿を載せながらルカの顔を覗き込めば、そうじゃなくて、と少しだけ頬を染めて私から視線を逸らすといい渋る。

ルカにしては珍しい反応だ。

良し悪し関係なく何でも口にしてしまうのがルカなのにどうしたんだろう？

「少し、調べたいことがあるんだ。図書館に篭りたい」

「夜は帰って来るんでしょ？」
「ん、あー、でも飯は食べといて」
「う、うん」

私が曖昧に頷いたのを了承と取って、ルカは「じゃ、そういうことで」とワゴンをガラガラと押してリビングへと出て行った。

＊＊＊

「なるほど、ではルカは戻らないのですね？」
「戻るとはいってたよ。遅くなるみたいだったけど……でも、大丈夫かな。迎えに行ったほうが……」

変な時間にケーキとか食べちゃったものだから、夕飯は簡単に済ませてブラックに今日の話をしていた。本当なら、ここから一人で出るようなことは許されていないとレムミラスさん――現在の蒼月財団の財団長――に怒られそうなところだけれど、そんなことより、子ども一人で行かせてしまったことが気になる。

「ふふ。子どもといってもルカでしょう？　心配いりませんよ。ああ、でも、何かあったときには相手の方が心配ですね。まあ……そのくらいの頭は働くでしょう？　何かあっても揉消せば問題ありませんよ」

物騒なこと口にしないでください。
ブラックはのんびりとティーカップに唇を寄せながらそういって肩を揺らす。笑い事じゃないのに。

「それで、マシロは何をしているんですか？」
「サンドイッチを作ってるの。ルカの夜食。置いていけば気が付くだろうし、頭使ったならお腹もすくだろうから」
「放っておけば良いのに」

カウンターで黙々と作業していた私にブラックはそういったけれど、いっただけで実際に止めようとはしない。私のやることに、興味は示しても、余程のことがない限りブラックは止めない。

第十話：面倒なお願い

＊＊＊

翌朝、戻ってくるとキッチンカウンターに置いておいたサンドイッチはなくなっていた。多分、一度戻ったんだろうなと思うけど、姿はなかったから確認しようがない。

私をここまで送り届けたあと、ブラックは来客があるからと種屋のある辺境に戻った。

私はそのあと日課である店内清掃と、温室の管理をしたあと店の扉に掛かっているプレートをオープンにする。店番が居ないから、暫らくはのんびりとした時間をここで潰すしかないだろう。

本を読んだり、ぼっさりお茶したり、もしかして、これを自宅警備員というのだろうか？　午前中の来客はゼロだった。暇すぎる。

午後は……　――

「こんにちはー」

忍んでいるようで全く忍んでいない、王陛下が顔を出した。

これもいつものこと、私の日常の一部だ。いらっしゃいと迎え入れれば、目深に被っていたフードを取る。綺麗な空色の髪が室内灯に煌いて相変わらず見目にも美しい王様だ。

「抜け出して良かったの？」

「ん？　今日の仕事は終わったから」

僕の中では……と聞こえた気がする。

大体、こんなお茶の時間に仕事終わったーといえるわけもなく。十中八九、こそりと抜けてきたのだろう。三人も実権を握っている人が居るというのに、どういうわけか、宰相閣下に愛されまくっているエミルが常に一番忙しい（らしい）私も、その宰相閣下の深いエミルへの愛情は常に感じているので、納得。あまりにも可哀想なので、お迎えが来るくらいまでは休憩させてあげることにしている。

「ここで良い？　お茶でも淹れるよ」

私は立ち上がり店の隅にある席を勧めてお茶の準備を始めた。

「何か手伝おうか？」
「うわっ」

てっきり席についているものだと思ったエミルが直ぐ隣りに居て、突然声を掛けるから持っていたティーカップを破壊してしまった。シンクの中で良かったけど、お気に入りだったのに。ちょっぴり残念。

「ご、ごめん。火傷しなかった？　指とか切ってない？」
「うん、平気」
「驚かせるつもりはなかったんだけど。ああ、危ないから、僕がやるよ」

いって欠片に伸ばしかけた手を掴れる。
このくらいのことといつものことだから平気なのは本当なのに、私の周りはいつも私に対してとても過保護だ。大丈夫と重ねたところで、エミルは聞きはしないだろうから、そこはお願いして私は新しいティーカップを引っ張り出す。

「これ直す？」
「ううん、鉢の底にでも敷くから良いよ」
物は壊れるものだ。どれだけ木っ端微塵になっていたとしても、ブラックに頼めば直すことは出来るだろうけど、そこまでする必要はない。
「でも、気に入ってたんじゃない？」
私の返答に申し訳なさそうな顔をしたエミルは、そういって「本当に構わないの？」と重ねる。私はその台詞に小首を傾げた。
「まあ、そうだけど、良く分かったね？」
「え、だって、マシロこのカップで良く飲んでるよね」
にっこりと微笑んでシンクの隅っこに大きな欠片を集め、細かいものは濡らした新聞紙でざっと集めながらそういったエミルに苦笑する。
相変わらず良く見ていてくれる。そして、作業も手馴れている…王様なのに庶民派だ。
でも、気に入っているとはいえ、最初は八客セットだったんだけど、私の不注意で既にいくつか割れてしまっているので今更一つ直したところでというのもある。
重ねるけれど、物は壊れるもの。うちの人間はこれに関してとても疎いから、私は極力そのままで良いと思っている。新しくするにも良い機会になるしね。
「それにしても、相変わらず疲れてるね？」

淹れなおしたお茶を出したところでそう告げれば、エミルはなぜか謝った。私が首を傾げれば微笑んで続けてくれる。

「見抜かれるようじゃ駄目だよね。もう割りと色々慣れたんだけど、最近ちょっと、ね」

「そういえば、ここ最近あまり来てないよね」

私も頻繁とまではいわないがそこそこ王宮には出入りするので、全く顔を見ないというわけではないけれど、以前はほぼ毎日顔を出していたのに――それもどうかと思うけど――最近は週に二度三度といったところだ。

ということは甘いものが良いかなと、お茶請けにはチョコレートを添えてみた。

一国を纏めるのだから憂うことも多いのだろう。

私には理解出来ないことの方が多いからあまり詳しくは掘り下げない。そんな私の気持ちを察したのか、エミルは優しげな笑みを浮かべて、ふわりと私の頭を撫でてくれる。もう私は子どもではないから、それを求めるわけではないけれど、エミルにそうされるのは心地良い。

そして、エミルは話題を変えた。

「ルカは居ないの？」

「あーうん。ちょっと出掛けてる。夜には戻るけど、ルカに用事？」

そんなわけないと思いつつ、一応聞いてみると、エミルはまさかと首を振った。そして、ただ珍しいなと思っただけだと続けてくれる。確かに珍しい。それに……

「ふふ、眠いなら上使って良いよ？　今朝も早くから起こされたくち？」

話しながらも、ごしごしと目を擦り紅茶をごくんと流し込んでも駄目なような、エミルの様子に思わず笑いが零れる。

「でも、やっと抜け出してきたのに」

やっぱり抜け出したんだね。

「ちゃんと起こしてあげるから」

結局、私はエミルを二階へと連れて行き書斎のカウチソファーに寝かせてあげた。寝室でも構いはしないけれど、まあ、妥当かと……いや、王陛下を寝かせるには不躾すぎるけど。

「あ、そうだ」

カウチの肘掛に背中を預け足をソファに投げ出したところで、エミルは何かを思い出したようで声をあげ私を見た。私は寝室からブランケットを持ち出してきて、それをエミルに掛けながら続きを促す。

「マシロにお願いがあったんだ」

そう切り出したのに、続きが告げられるまでの間が長い。私は「何？」と首を傾げ、エミルの腰辺りにちょこんと腰掛けた。

「その、えーっと、物凄く面倒だと思うんだけど」

「うん？」

「そのー……マシロに会いたいって人が居るんだ」

ちらりと私の顔を見て直ぐに逡巡する。会いたい人……多分、女性なのだろう。でも、エミルつながりってことは上流階級の姫だろうから、私に、だろうか？　その疑問をそのまま投げれば、エミルは、ちょっとだけ唸って。ごにょごにょと答えてくれた。

「マシロは、マシロなんだけど、ご指名は“白月の姫”だよ」

「……えーっと、どこかで会ったことあるんじゃないの？　社交界とか社交界とか社交界……私あんまり顔出さないけど、時々は出るよ？」

「うん、普通なら会っててもおかしくないんだけど、深窓の姫らしく屋敷から出ることもなく、外界と遮断されたところで生活していたらしいんだ」

それは簡単に引き篭もり生活の長いお姫様と取って良いのだろうか？　まあ、大事に大事にされてきたお姫様なら、そういうのもあるのかもしれない、しれないけど……。

「なんで？」

「う……巻き込みたくはないんだけど、ずーっとはぐらかしてきてるんだけど……うん。その、お断りをさせてもらったときにね、白月の姫の話に触れないわけに行かなくて、それで、そのぉ……」

「恋敵に是非会いたいと？」

「う、ん……ごめん」

本当にとばっちりだ。すっぱりきっぱり断って良い勢いで私に関係ない。

「私、関係ないよね？」

「――　……うん、ごめん」

俯くと長い睫毛がふるりと震える。大きな身体してそんなに小さくならなくても……そんなしょんぼりされてしまうと。

「良いよ」

と、いうしかないと思う。仕方ないな、そう思って了承すれば「本当っ！」と勢い良く私の手を握り、この世の春というような表情を見せてもらった。そんなに喜ばしいことではないと思うけど……ま、まぁ、良いんだけどね。

勢いに押されて苦笑すれば、エミルは握った手を額に押し付けて「ありがとう」と感謝する。別に私は、大した人間ではないのだからそこまで恐縮する必要ないと思うのだけど。大体エミルは王様なんだよ？

「絶対、迷惑が掛からないように配慮するから」

「うん、宜しくね」

「あ、出来ればブラックには」

「……嘘は吐きたくないから、聞かれたらいうけど、聞かれない限りはいわないよ」

苦笑して告げれば、エミルはそれで十分だよ。と微笑んだ。まあ、ブラックは私からいわない限り、そう突っ込んでこない。ほぼ、確実に伏せられるだろう。

「ドレスコード的な正装したほうが良いの？」

「え？　ああ、良いよ。うちで用意するから。マシロは来てくれただけで」

結局、普段着というわけにはいかないんだね？　ブラックに伏せるってことはきっと既婚者的な部分も出来れば伏せるってことだろ

うし、息苦しい時間になりそうだと思いつつも、安堵した様子を隠そうともしないエミルに微笑ましくなる。

まあ、良いか。

第十一話：宰相閣下はご機嫌斜め

起きてるとかぶつぶついってたけど、やっぱり疲れていたのか、それとも安心したのか、横になったら早いうちに眠りに落ちてしまった。

静かに眠るエミルの髪をそっと撫でてから、私は店へと戻る。ベルも鳴らないし、お客さんが来た気配もない。

今日は一人も来ないのかなーっと。

夕日がやんわりと差し込んでくるくらいになったら、そろそろ店仕舞い。

結局今日は一人だけだった。常連のおばあさんが眠りが浅いからとハーブティーを買いに寄ってくれただけ。まあ、薬屋なんて繁盛しないに越したことはないだろう。

私は自分をそう納得させて深く頷く。

私が扉のプレートを朝返したのと反対に返したところで「こんにちは」と聞き慣れた声が掛かった。

「――　……珍しいですね？　直々にお迎えですか？」

顔を上げればラウ＝ウィルこと噂の宰相閣下の登場だった。

今日も今日とて一糸乱れることのない優しげな萌黄色の髪をゆるりと束ね、整って美しい顔――若干表情に乏しい――にはモノクルを宛がっている。

「これでもゆっくり来たんですよ？　随分愚痴っぽくなっていらっしゃったので」

くすくすと優麗な笑いを溢しているけれど確実にこの人のせいなのは分かる。

「二階で寝ているんで、起こしてきますね。ここで待っていてください」

店の中に通して、私はぱたぱたと二階へと駆け上がった。

エミルは寝返りを打っていただけでまだ静かに眠っている。起こしてしまうのは少しばかり申し訳ないような気がするけど、仕方ない。

「エミル、エミル……。起きて」

端っこに腰掛けて、そっと肩に手を掛けるとゆっくりと揺する。何度目かの声掛けでようやく「ん」と目を覚ましてくれた。

「おはよう……」

「うん、おはよう」

ぼんやりと片方の手をついて、身体を起こすエミルにやっぱり可哀想な気になってしまう。と、思ったのも束の間　……――

「ああ、起きて一番に聞く声がマシロの声で、見える姿がマシロなんて凄く幸せ」

そういってふわりとエミルに抱き締められた。

「マシロー、やっぱりさ、王宮に入る気ない？」

「ごめんね、私はここが気に入ってるの」

まだ、半分くらいは夢の中なのか少しだけ夢見心地といった雰囲気の声色だ。

そして、もう数え切れないくらいの王宮へのお誘い。確かに、お客さんの殆ど居ない薬屋なんてさっさと畳んでも問題ないかもしれない。かもしれないけど、それでも贔屓筋がいてここしか頼れない人もいるわけだから、私はここを離れられない。

分かってくれているけれど、エミルは時々こうやって我が儘を溢す。

「え、えーっと何、かな？」

痛いくらいのエミルの視線を受けて、びくびくと問い掛けると、エミルは可愛らしく首を傾げて「うーん」と唸る。目は覚めたのだろうか？

「マシロ何か変わったことあった？」
「ううん、特にないと思うけど」
「そう、かな？　なんだろう」

何か思うところがあるのか、エミルは私と向かい合ったまま、私の手を取ってそこへ頬を寄せながらマジマジと私の顔を観察する。

物凄い恥ずかしいので程ほどにして下さい。

ふわふわと頬に熱が上がってきたところで、気のせいかな？　と微笑んで手にしていた私の手にそっと口付けて立ち上がる。

「マシロが可愛いのはいつものことだよね」

えーっとありがとう、で多分良いんだよね？　思いつつそれを口にするまでに待ちきれなかったラウ先生が書斎の扉を開いた。

「そんなにお気に入りなら無理にでも連れ帰れば宜しいじゃないですか。陛下」

民は逆らいませんよ。と不穏なことをいって肩を竦める。

「気持ちが欲しいなら、その御身が欲しいなら、薬でも使えば宜しい。方法などいくらでもあるでしょう。そうすれば、私がわざわざここまで迎えに来る手間もなくなるというものです」

本人を目の前に恐いことといわないでください。

それに迎えっていっても、別に毎回ラウ先生が来るわけじゃないのに。ラウ先生のあんまりな台詞にエミルは不機嫌そうに答えた。

「あんまり変なことといわないでよ。マシロが怖がる。それにそれが無理なの分かってるよね。まあ、マシロの思い人が彼でなければ考えなくもないけど、ね」

考えなくもないんだー……って、だから、本人を前にしていうことじゃないよね。

「私は貴方の憂いを一つでも減らして差し上げようと提案したまでです」

それにしても、ラウ先生は若干苛々としているような気がする。普段から物騒なことを口にするタイプの人だけど、いつもはもっと遠回し、オブラートに包みまくったいい方をする人だ。こちらが深読みしないと基本的に良く分からない。だから、彼に関しては深読みすることが基本となっているのに、こんな風にストレートに打ってくることは珍しいな。そう思った私に答えはなくて、エミルは

「ごめんね、邪魔をして」ともう一度私を抱き締めて頬に口づけると「例の話し宜しくね」と念を押して帰路についてしまった。見送ってしまえば店はがらんとして、とても静かだ。

ここで生活を始めたころは常にこうだったのに、ルカがいるのが当たり前になってしまったから、凄く寂しい。

今夜も戻ってこないのかな？　ブラックも遅い気がするし、待ってたら夜が明けるかもしれない。うーん……夕飯の支度でもしようかな。

帰るかもしれないし、ね。

＊＊＊

そのあと、エミルからの連絡は予想よりも早かった。

私は王宮から届いた手紙を閉じて、一息。仕方ないなーと苦笑して立ち上がる。一昨日前にも連絡はあって、今日はその確認。

余程確実に、私を王宮へと招きたいらしい。というか、心配しておろおろのエミルの姿が想像出来てしまう。

残念ながらルカも居ないから、私は一人出掛ける準備を整えて、店のプレートをクローズに返した。時間に余裕はあるけれど、馬車を使ったほうが良いかな？

「良かった、マシロ。面倒掛けてごめんね」

……王陛下直々のお出迎えだ。

私は曖昧に微笑んで「暇だから良いよ」と答える。私はエミルに案内されるまま着替えも済ませて王城の一室へと招かれた。

最近、夜会にも殆ど出ないから相当久しぶりにお姫様っぽい格好をした。柔らかなオレンジ色は私の肌に良く馴染むと自分でも思う。

黄色人種だからね。

それに若干フリル過多な気がするけど、全体的に品が良く私でも清楚に見えると思う。黙っていれば。

扉口で、エミルが出す腕に手を掛ければ、両サイドにはアルファとカナイだ。

遊び以外で二人が揃っているなんて、ちょっと重々しいなと思ったけど、アルファは「マシロちゃん可愛いー」と手を振り、カナイは「馬子にも衣装」とぼそりと呟く。いつも通りだった。

気にしすぎかな？

でも、二人は室内までは付き合わなかった。後ろで扉が閉まってしまうとちょっと寂しい。

第十二話：死人に二度はない（1）

「待たせてすみません」

と穏やかにエミルが告げれば、暖かな日差しが差し込んでくる窓辺に佇んでいた女性がゆっくりと振り返った。逆光で表情はあまり見えないけれど穏やかな物腰で頷き口を開いてくれる。

「わたくしのほうが我が儘を申してすみませんでした。お噂に違いない美姫でいらっしゃいますね」

……どこの噂だ。

そんな大法螺吹くのは誰だ。というか、この世界の美的感覚は全体的にやっぱりずれている。今更再確認。

こつこつと歩み寄ってくる彼女に、私は反射的に一歩引いてしまった。恐いとかそういう感じじゃないんだけど、なんだろう、失礼は承知だけど、あまり近寄らないほうが良い感じがした。

「わたくし以上に、緊張なさらずとも……」

優雅な笑みには棘が見え隠れしている。好かれているわけはないけど、なんだろうこの感じ。

それを察してくれたのかどうかは分からないけれど、エミルは椅子を勧め私たちは腰を降ろすことが出来た。服が窮屈というわけでもないのに、なんだか、胸が苦しい。

「マシロ、大丈夫？」

見たことのないメイドさんが、お茶の準備をしてくれているのを

確認してから、エミルはそっと耳打ちしてくれた。私はそれに頷くけど……なんか、変、だよね？

「お噂どおり、仲がお宜しいのですね？」

「それを今とやかくいうために、姫に同席していただいたわけではないでしょう？」

彼女は私しか見ていない。

見ていないけれど、エミルが口を挟むと、一瞬だけ私から視線が逸らされ、その瞳はエミルを切なげに捉える。夢見ている、そんな感じで見ている瞳は恋なのだろうか？

そんなことを考えていると、私たちの前にティーカップが出された。

美味しそうなお菓子も沢山。

廊下に居るだろうアルファがみたら喜びそうだなとふと思ったら、やっと少しだけ緊張が解けた。

姫と、エミルが話をしていたから、私はそのカップを取ろうかと思ったら私の膝にエミルの手が乗っかる。え？　と思って手を止めたら、その指が動いた。何？　と思ったけどどうやら文字が刻まれてるみたいだ。

――……飲まないで。

多分、そう綴られた。

「そういえば、折角遠方よりいらした姫に贈り物があるのですよ」

続きを綴らないまま、エミルがそう切り出せば控えていたメイドさんがどこから出したのか、両手に一杯の花束を持ち出してお姫様

に手渡した。受け取ると、一瞬顔も見えなくなる。

「エミル？」

その隙に、エミルは、すっと私のカップと自分のものをすり替えた。そして、しっと人差し指を口元に添えて小声で「それを飲んで」と告げる。

姫は嬉しそうに花束を堪能したあと、再びメイドさんにそれを戻して丁寧にお礼を告げた。

淡々と社交辞令を述べつつ、エミルが今度は『飲んで』と綴る。少し迷ったけど、そうしたほうが良いのだろう。私はそっとカップを持ち上げて、こくんっと喉を潤した。少しだけ冷めてしまっていたけれど、薫り高い紅茶は口の中でふわりとひろがり清々しい気分にしてくれた。

「――　……れで、……姫？　顔色が良くありませんね？」

エミルの言葉に私も顔を上げれば、確かに良くない。緊張のあまり気分でも悪くなったのだろうか？　私もきっとそうだ。

「え？　いえ」

でも、姫は慌ててそれを否定したけれど、次の言葉が続かなかった。

「――　……懲りない人ですね」

ぎくりっ。

私は聞き慣れたその声に肩を強張らせた。それとほぼ同時にそっと、肩に手が置かれる。見上げれば、にっこりと微笑んでもらうけ

れど、少し体感温度が下がった気がした。

「今日のマシロも可愛いですね」

「ブラック、どうして？」

当然の私の問いに、ブラックは「どうしてと聞かれましても」と苦笑する。私の問いは間違ってないと思うけど？

首を傾げたのと同時に、がたんっ！　と派手な音がして前を向いたら、姫が蒼白な顔をして立ち上がり震える声で「闇猫」と呟いていた。深窓の姫が、どうしてブラックの顔を知っているんだろう？

私のことも知らなかったのに？

不思議に思った私とは対照的にブラックは、ふっと口角を引き上げて冷たい目で姫を見た。エミルではなく、姫を、だ……。

「一度は見逃したというのに、懲りない人ですね」

「どう、し、て」

姫が掠れる声で紡ぐ。震えてカチカチとここまで歯がかみ合わない音が聞こえる。

「どうして？　愚問です。深窓の姫はご存じないかも知れませんが、白月の姫と私は懇意の仲なのですよ」

顔の造形が変わるのではないかというほど、驚きの表情を見せた姫に対し、エミルはとても落ち着いていて、特にそのことが露見しても問題ないようだった。

「貴女からの依頼をお断りしたとき、私の中で貴女は一度死んでいます」

淡々と告げたブラックに、一体何を？　と口を開くと、音を発する前に喉に詰まった。

部屋の中の空気の密度がずんっと重くなり、指一本動かすこと、呼吸することすら困難に感じるほどのプレッシャー。誰一人動けない。この室内全ての動きを捕えてしまうしまうだけの力。私に直接向けられているわけじゃないのに、その重さは計り知れなくて私は無意識に身体が震えた。胃の裏側辺りが焼け付くように冷える。皮膚の表面がぴりぴりと痺れる感じがする。

ただ静かに冷静に、立っているだけに見えるブラックからの威圧感。殺気。『種屋』であること、その意味をこれほど強く感じたことはない。

それは普段ルカに向けるものは、戯れでしかないことを明らかにするほど強いものだ。

私が声も出せず、身動ぎ一つ出来ないでいるというのに、エミルはその重圧に耐えながらも、腕を伸ばし私の肩をぐいっと引き、

「何も見ないで、聞かないで」

と無茶をいって強引に、その腕に私を抱き締め、頭を胸に抱きこんだ。

そして零れてきた声に身体を硬くする。

「――　……死人に二度はありません」

そのあと直ぐ横のはずなのに、どこか遠くで

――　……ガウンッ

一発の銃声が響いた。

第十三話：死人に二度はない（2）

びくりと私の肩が震えると、痛いくらいに強くエミルが抱き締める。

絨毯の上を靴が踏む音がして、気配が離れていく。

恐くないといえば嘘になる。

嘘になるけど、私は本当に最後まで見ないというわけにはいかなかった。もぞりっと暴れてエミルの腕から顔を上げると、ブラックは丁度、姫が座っていたところにいて何かを拾い上げた。もちろん、それは……

――……人差し指と親指で摘める程度の小さな種。

それを部屋に居たメイドさんに突きつけて

「今後一切、白月に関わることの無いよう、お伝えください」

にっこりと微笑んで、彼女の目の前でぱきんっと種を潰してしまった。はらはらと塵と消えた種は無風にも感じられる室内に散ってしまった。

その全てが指先から零れ落ちると同時に、ふっとあたりの空気が僅かに緩む。その隙にばたばたと足音を消すことも忘れて、メイドさんは脱兎の如く逃げ出した。

彼女は姫に付き従って来た他所の人だったのだろう。

その後姿を見送って扉が閉まってしまうと、ブラックは、ふっと一瞬前までの雰囲気を完全に捨て去り「大丈夫ですか？　すみません」と私に歩み寄る。

私はエミルの腕の中から起き上がりつつ「どうしてっ！」と声を

上げそうになったのに、エミルに遮られた。

「ブラックは、正しいよ」

「え」

ブラックの手を取りよろりと立ち上がった私を受け止めながら、ブラックの瞳に刹那安堵の色が見える。そんな頼りなさげな不安な色に苦笑しそうになったけど、今はそんなことよりも、理由が知りたい。

だから、ふらつく身体をブラックに預けてエミルを振り返る。エミルは、深い溜息をひとつ零して「間違ってない」と重ねた。

「別に私は貴方に弁護していただくようなことはしていませんけどね」

「――……別に、僕だってそんなつもりはないよ。つもりはないけど、事実だ。彼女は危険過ぎたから、今日の出方によっては、僕も同じことをするつもりだった」

エミルは、苦々しく告げて、ちらと扉の外へも視線を走らせる。だから、二人が待機していたのかと思うと恐い。ふぅと、嘆息したあと、テーブルに残った紅茶を睨みつけた。

「陛下っ！　ご無事ですか！」

丁度そのとき、慌てた様子で数人の衛兵さんが流れ込んできた。

「扉の前でお二人が倒れていて」

と、口にしたところで私がブラックを見上げると、ふぃっと視線を逸らされた。十中八九この人のせいだろう。エミルもそう思った

のだろう「大丈夫だよ」と告げたあとはそれ以上そのことを深追いはしない。代わりに、テーブルの上にあるカップを持ち上げて一人に手渡した。

「これ、シゼのところに運んで毒の特定をするように伝えて。あちらの出方によっては使わせてもらうから」

にっこり。

口にした内容とは全くそぐわない笑顔だ。ブラックは人のことをいえないけど、エミルも十分薄ら寒い感じを持っている。そして「残りは悪いけど出て行って」と重ねた。

私はすごすごと退室していく衛兵さんの後姿を見送りつつ、毒、か……と復唱し噛み締める。

私が死ねば良いと直接思った人が居てそれを実行しようとした人が居たのだということは少なからずショックだ。

彼女と、エミルはそれほど面識があるとは聞いていない。

大体彼女は深窓の姫なのだから、会ったことがないと思ったほうが間違いない。会ったこともない人に恋焦がれて思いだけが満ちて溢れた。

その思いはとても深くて濃くて……もう、どうしようもなかったのかもしれない。そして、その恨みの情念はまだ見ぬ白月の姫へと向けられた。お姫様は無謀にも、私の暗殺を種屋に依頼にいっていたのだろう。それでも助かっていた命だったのに、私が生きていることがきっと、許せなかったんだ。

「でも、だからって……」

くらくらする。

元を断たなければ、私は何度でも狙われることになったんだと思う。きっと、自分が狙われたり自分を通した形で私が狙われたりするより、直接私が怨まれて狙われることの方が問題だったんだと思う。それは分かるけど、だからって、そこまで極端にする必要があったのか……私には分からない、私には、到底……。

「嫌なものをお見せしてすみません。ですが、今回はその必要があった」

ぽつぽつと口にするブラックを「え？」と見詰めると困ったように微笑んで続けてくれる。

「マシロの前でなら私が引き金を引くことを躊躇すると思われてはいけなかったのです。そう、思われてしまったら、又マシロは無駄に狙われる。今度は愚かな方たちの私利私欲のために……」

きゅっと私に触れている腕の力が篭る。

そう、だよね。

ブラックが私のためにならないようなこと、考えるわけない。私がショックを受けるかもしれないということを予想しないわけない。それでも尚実行しなくてはいけなかったんだ。

私はもう一度だけ大きく深呼吸した。

「マシロ、真っ青です。戻りましょう？」

それにしても、本当に別人のような変わりようだ。

私にはこんなに優しいのにと、嘆息すると、まだくらくらした、くらくらして……真っ暗になった……　――

手放す意識の端っこで、ブラックの腕の中の温かさを感じながら私は

「全く、勝手は止してください……汚れるのは私の役目でしょう」
「――　……ごめん」

そんな会話を耳にして、それ以上このことに触れてはいけないことを悟った。
みんなは“白月の姫”を守った。
美しいときを守ることはこの世界ではきっと必要悪。

その証拠のようにその後そのことで私が誰かに何かを問われることもなかったし、全てが無しになっていた。
それにみんな認めないと思うけど、お互いを守ろうとした結果だと私は思う。姫には申し訳ないけれどそのことに関してだけは、私は少しだけ嬉しい気持ちが湧いていた。

第十四話：堪忍袋の緒が切れた

＊＊＊

それから、私はちょくちょく貧血を起こすようになったのだけど、自分でもおかしいなーとは思ったものの、それ以外に特に辛いこともなかったから、あまり気にしていなかった。

そして、そんな生活が定着し始めた頃、それはブラックと結婚して、いや、シル・メシアに来て初めてといっても良い事件が起こった。

事件、うん。

私にとっては大事件。

久しぶりに、早めに戻ってきたルカと機嫌良く今日の夕食――ちょっぴり豪華――を用意していたときに封切られた。

「え……ちょっと、私聞いてない……」

「いってねぇもん」

わなわなと私が怒りにふるえていることにも気がつかず、ルカは手元の作業を平然と続けている。私にとっての大事件を、淡々と語りにわか雨程度にしか感じていないルカの様子に怒髪天を衝かれる。

かたんっと手にしていたナイフを置いて、大きく深呼吸。

そこでようやく「どうした？」と重ねたルカに、大きく息を吸い込んで叫び倒した。

「ルカもブラックも最低っ！！　大嫌いっ！！　こんな家出て行ってやるっ！！」

玄関の明り取り用の窓が割れるのではないかと思う勢いで、ウェルカムベルが吹っ飛ぶんじゃないかという勢いで、バンッ！　と扉を閉めた。

許せない。
許せない。
許せないっ。

苛々が絶頂に達してしまっていた。
ブラックにしてもルカにしても、微妙にずれているところがあるのはいつものことだ。大抵のことにたいして私は鈍くなっていた。けれど、どうしても許せない。
今回ばかりは、緒が切れた。

凄い剣幕で店を飛び出したせいか、ルカは私の後ろを追い掛けてこない。
どうせ、直ぐに私を見付けることが出来るからと、本気で心配なんてしていないのだろう。それに私の帰る場所はここしかないと分かっているから。

悔しいっ！

私だって本気になれば、いつだって行方不明にくらいになれるっ！　苛々苛々、沸々と煮えたぎった脳内は、暴言ばかりが吐いて出る。

私はいつもなら、徒歩で向かうのに、大通りに出たところで馬車を掴まえた。そのまま王宮へと走ってもらう。王宮の外門を潜って王城まで運んでもらったところで、私は降りた。にこり顔パスなの

を良いことにがつがつと王城内を闊歩する。

「姫様？」

そう声を掛けられて、やっと私は足を止める。

私に声を掛けてきたのは、ここ最近見るようになったカナイの部下の人――確か名前をマリオさんといったと思う――だ。この世界通例で綺麗な人なのだけど、私はこの人が少しだけ苦手だった。別につっけんどんというわけではないし、意地の悪いことをいわれるとかそういうわけではないのだけど、他の姫とか王城での知り合いの中で唯一感情に乏しい人なのだ。

「そのようにお急ぎになって、お怪我をされたら皆が気に病みますよ」

こんな感じなのだ。

心配しているように見せて、しっかりと壁を作る。なんとなくとっつき難い。

「カナイに会いたいんだけど、部屋、かな？」

「はい、カナイ様でしたら先ほどお部屋にお戻りになったところです。お供しましょう」

一人でもいけるのだけど、断り辛い。

仕方なく「お願いします」と告げて、走るような勢いを堪えて彼女に足並みを揃える。早く早く早くカナイに会いたいのにっ。無駄に広い王城にすら苛々する。

――……コンコン

「カナイ様。失礼いたし……　――」

マリオさんが最後までいうのを聞かずに、開かれた扉の隙間から私は部屋へ入り込んだ。マリオさんの呆れたような溜め息が聞こえたけど気にしない。今はそれほどそれは重要ではない。

「ん？　マシロか……久しぶり、って、なんでそんな形相してるんだよ」

「そんなって」

「鬼みたいな顔をしてるぞ」

「……女の子掴まえてそれはない」

「いや、俺は掴まえてないけどな。で、何？　その様子なら用があってきたってことだろ」

のんびり、手ずからお茶を淹れていたところだった。

そんなカナイが自分のために淹れたお茶を私は横から奪って一口。ふぅと深呼吸。疲れた。ここまでは割りと……いや、本当に遠い。

そして、キッパリ、ハッキリ、用件を告げる。

「私、家出することにしたの」

「は？」

「だから、家出をしたいの」

とりあえず、重ねてみた。

そこでやっとカナイは戻ってきたのか、ぴくりと肩を震わせて「あ、あぁ、聞こえてる」と頷いた。

絵に描いたようにぽかんと口を開いた。間抜けだ。男前が台無し。

「え、えーっと、王宮に身を寄せるんなら、俺じゃなくてエミルに直接いえば良いだろう？　大歓迎されるぞ？」
「そうじゃなくて、こんなところに居たら直ぐに見付かっちゃうじゃん。ルカもそうだけど、ブラックを煙に巻くことが出来ると思う？」

出来るといえる人間はシル・メシアのどこを探しても居ないだろう。そのくらい私の環境は特殊だ。

「だから、暫らくで良いの。気配を消すこと出来ないかな？」
「んー……出来なくはないけど、喧嘩でもしたのか？　珍しいな」

いいながら、カナイは戸口で驚きを隠せない様子で立ち尽くしていたマリオさんを手招きした。

「あれ、えーっと余ってた魔法石ちょっと頼む」
「で、ですが、あれは……」
「いーよ、足りなくなったらまた俺が作るから気にするな。ほら、取ってきて」

片手ふりふりそう告げられて、刹那複雑そうな顔をしたあと、マリオさんは「分かりました」と腰を折って部屋を出て行った。
そして、出て行ったマリオさんは、三つも数えないうちに「お待たせしました」と戻ってきた。
全く待っていないと思う。

「ご苦労さん。もう出て行って構わない」
「いえ、その、姫のお帰りも」
「んー、帰らないんだってさ。俺が馬車にでも放り込むから今日は休め」

マリオさんが持ってきた魔法石は直径一センチ満たないくらいの小さなものだった。それがいくつか入ったトレイだ。カナイはそれを受け取ってソファに腰を下ろすと、膝の上で適当によりながら、伸縮性のある糸に通していく。マリオさんは私とカナイを交互に見たあと、再びすっと折り目正しく腰を折って退室した。

なんか申し訳ないことをした感が否めない。

「良かったの？」

「何で？　仕事終わったんだし、問題ないだろう？」

就業時間超過して働くほど、今、忙しくないし。と色気の全くないことをあっさり告げてしまう。カナイ……モテるんだからもっと他人の機微に敏感で良いと思う。

まあ、仕方ないか。カナイだし。

ふぅと嘆息してカナイを見下ろす。魔力が絡んでなければ、きっと相当もたつくだろうけど、手馴れた指先は楽しげに動いている。

「マリオさんって、やっぱり優秀なの？」

作業を黙々と続けるカナイの手元を見ながら問い掛けると、カナイは、ん？　と不思議そうに口にしてから「学長のお墨付きだからな」と苦笑する。

「ヴァジルさんの？」

「ああ、そう。……ってお前、もしかしてあいつ苦手なのか？」

ちらと私を見てそう図星を突かれ、私は少し怯む。

「苦手というか、私、マリオさんには好かれている気がしないから、

なんとなく……」

そう、なんとなく、そんな感じがいつもする。嫌なことをされるわけでもなく、さっきみたいに顔を合わせば親切にしてくれるのに、なんとなく……って私の方がこれじゃ、嫌な子っぽいな。自己嫌悪。

「別に嫌いとか、好きとか。そんなもん感じてないと思うぞ？」

「なんで分かるの？」

私の当然の質問にカナイは、時折、紡ぎ合わせた魔法石の長さを見ながら答えてくれる。

「もし、マシロがあいつの無感情、無表情さを見てそう考えてるなら、の話だよ」

「？」

「あいつは魔術系の中でも呪術に長けているんだ。そういう奴はフツーにあんな感じで、極力感情を表に出さない。魔術系、特に呪術とか、各種攻撃系の素養を主に持ってる奴はとっつき難い感じのやつが、普通に考えて距離を感じるようなやつが多いよ」

「え、でも、カナイやクルニアさんヴァジルさんそんなことないじゃん」

「フツーじゃないヤツばっかり持ち出しても無駄。フツーはあんなもんだ」

自分のことまで、あっさり『フツー』じゃないといってしまうカナイには少しだけ切なくなる。

フツーだと、私は思ってるよ。

私は……。

第十五話：家出くらい出来るもん！

私は曖昧な気持ちを持て余したが、その間に、カナイは仕舞いをつけたのか「ほい」と出来上がった数珠状の魔法石を私の手首にそっと通す。

魔法石といえば赤いものが直ぐに思い浮かぶのだけど、これはもっと深くて黒に近い。でも、綺麗だ。私も一応女の子なので、綺麗なものは好き。

だから、自然と顔が綻ぶ。

そんな私の頭に大きな手がぼすりと無遠慮に載せられる。ずんっと頭が沈むが気にしてくれる素振りはゼロだ。

「ちょっ」

「そうやって笑ってろよ。小難しい顔してるのは似合わないだろ？」

ぐしゃぐしゃっ！　と私の頭かき回す。

乱暴だ乱暴過ぎる！　でも、私がしょんぼりしたのに気が付いてくれたことは素直に嬉しい。嬉しいけど、ぱちんっとカナイの手を払い除けて「髪が乱れるっ！」と不貞腐れてしまう。

なんか私可愛くない。

カナイはそんな私を一切気にすることなく、くつくつと意地悪く笑ってから説明を続けてくれる。

「まあ、これで少しくらいは気配を消していられると思う。なんで喧嘩したのか知らねーけど、面倒くさいことにならないうちに戻れよ？」

どうしてもどこか説教臭いカナイは、やっぱり私にとってここでのお父さんみたいだ。ありがとうっ！　とカナイの両手をとってお

礼を告げれば「お、おう」と僅かに動揺を見せて頷く。そして、そのまま踵を返しかけたら掴った。

「待て、待て待て、どこまで行く気だ」

「え、それいったら駄目じゃん」

「――　……目星くらいいっていけ。王都から出るのか？　それなら馬車を使え」

「そんなに遠くには行かないよ。少しだけ出るけど……」

ごにょりと続けた私にカナイは納得したように頷いて、手を離してくれた。

「夫婦喧嘩は犬も食わないんだろ？　あんまり迷惑かけるなよ」

……くっ。このお父さん気質めっ！

「大きなお世話ですっ！」

カナイの言葉に、苦い思いがこみ上げつつも私はばたばたと出て行った。

＊＊＊

馬車に揺られて辿り着いた先。

アーチ型の看板に迎え入れられる。畑がずっと続いている奥に、可愛らしい木造の家が数件寄り添うように建っている。私はその中で一番大きな建物の玄関先で、リーンリーンと呼び鈴を押す。夕時のためか、中からは賑やかな声が漏れていた。

「はーいはいはい。ちょっと待ってくださいねー」

という元気な声に迎えられ、扉が開くとふわりと赤い髪を揺らして、お腹の大きなアリシアに迎えられる。

「マシロ」

驚きに目を丸めるアリシアを見た途端、ずっと我慢していた涙が溢れた。

――……っく、ひっく

あのおねーちゃん大丈夫？　おねーちゃん、何で泣いてるのー？　ぼそぼそと遠巻きに子どもたちの声が聞こえる。それを、しっしと追い払って、アリシアは私の前に暖かな湯気を燻らせるマグカップを置いて、重そうなお腹を片手で押さえながら、隣りに腰を降ろした。

「どうしたの？」

「ごめんね、ごめん」

「良いけど……うん。良いのよ……」

そっと背中を撫でてくれるアリシアの暖かな手に余計涙が出る。

「……今日、泊めてくれない？」

止まることのない涙を拭いながら無茶をいった私に、アリシアは視線を泳がせる。その先に居たのは、彼女のご主人だ。彼は、アリ

シアの視線にやんわりと微笑んで頷いてくれた。
理由も告げずに散々泣いたあと泊めてくれなんて、無茶振りにも悪い顔一つしない彼はとても良い人だと思う。
二人の了承を得た私は、その準備を整えてくれるアリシアや、子どもたちが落ち付く――ぐっすり眠りにつく――のを待ちながら、ぼんやり、そして時々泣いていた。そんな間に、私はうとうととしてしまった。

こくんっ！　と自分が漕いだ舟にびくんっと肩を跳ね上げる。
寝てる場合じゃないやと、目を擦り、ふぅと深呼吸。

アリシアには既に三人の子どもがいる。
そして、お兄ちゃんたちにもあまり年の変わらない子どもたちがいて、とても賑やかだ。だから私に付きっ切りになるわけにもいかなくて、時折覗きに来てくれながらも、忙しそうにしていた。
迷惑なのは分かってたけど、ここでの生活が長いとはいえ、私にはこうやって我が儘をいえるような女友達なんて他にいなくて、一人になると変なこと、余計なことばかり考えそうでそれはとても我慢出来そうにないから甘えてしまった。

でも個人的には、来て正解。
賑やかな生活音を聞いていると、少しだけ落ち着く。でも、それによって余計に怒りは増幅される。

話なんて、聞きたくない。
話なんてしたくない。
私がいうことなんて何一つない。
勘違いばかりっ。勝手に決めて……勝手に判断して……二人とも私を、なんだと思っているの！

はらはらとまた涙が止まらなくなった。

大嫌いだ。

もう、知らない。

いつまで経っても本当の意味で分かってくれない！　嫌い、嫌い。

もう声なんて聞きたくない。話なんてしない。

――　……大嫌い。

大、嫌……い……　――

＊＊＊

ん。

本格的に眠ってしまっていたらしい。

肩にはブラケットが掛かっていた。私はそれを手繰り寄せて、耳を済ませる。あれだけ賑やかだった生活音が何一つ聞こえない。

痛いくらいの静寂。

まるで、誰も居ないようだ……でも、人の気配はするから、居るはずなんだけど。

「何があったのか知りませんけど、今夜は帰らないといっているんです。一晩くらいうちに預けてください」

予感的なものがして、私はふらりと戸口に立ち、そっと扉を開いた。

少しだけ開いた先には、アリシアのご主人が立っていて、私に気が付くと顎で室内へと促す。その所作に私が部屋の中を見ると直ぐに目に付いた。

……ブラック。

気配は消えたというのに、一日も持たないなんて……。まあ、私の行き先なんて限られてる。しらみつぶしに当たったとしても一晩掛からないだろう。

「兎に角、事情はマシロ本人から聞きます。連れて戻ります」

――……あれ？

「マシロ、凄く泣いてたんですよっ。疚しいことがあるんじゃないですか！」

「疚しい？」

「例えば、愛妾がいたとか、手を上げたとか」

――……あれ？　変だ。二人の会話が良く聞き取れない。

でも、凄い剣幕でまくし立てるアリシアに、ブラックがぎりっと唇を噛んだ。危ない！　良くは理解出来なかったけれど、アリシアに何かされては堪らない。

その様子に慌てて私は二人の間に割って入った。

『やめてっ！』

――……あれ？？

私は慌てて喉を押さえる。

声が、出なかった。

気のせい？　そう、だよね？　正面に立つブラックを見上げて、もう一度……

『やめ……』

……音が、出ない。

けふっと力なく出た息の音に少し咳き込む。異常を察したアリシアが私の肩を掴み、ブラックの手が心配そうに頬を撫でる。

アリシアが何かいってる。唇が動いている。でも、聞こえない。音が、私に届かない。

何で？　どうして……。

きょろきょろと逡巡すれば、小さな子たちも決して静かにしているという風ではない。こちらの様子は見守っているけれど、椅子をがたがたと揺らしていたり、隣りに居る子とお喋りしたり……けれど、その全て届かない。

恐る恐る耳に触れる。

……ちゃんと在るべき場所に、耳はある。けれど、音を拾わない。

ふと、私の手首に掛かっている魔法石に気が付いたブラックが、それに触れ何か問い掛けてくれるけれど、聞こえない。私は力なく首を振った。

そんな様子を見て、良いこと思いついた！　とばかりに一人の女の子が立ち上がり、おもちゃ箱を漁り始める。そして、恐らく靴音高く駆け寄ってきて、満面の笑みで私に小さな黒板を手渡した。

私は、アリシアとブラックを順番に見てから、カツカツと黒板に文字を綴る。

『耳が聞こえない。声が出ない』

「どうしてっ！」

ニュアンス的に、理由を問われている気がして、私は首を振った。

分からない。

理由があるなら教えて欲しい。

不安になってブラックを見れば、いつものように静かに微笑んで唇が紡ぐ。

――……大丈夫。

だと……。

そして、泣きすぎて腫れてしまっているだろう瞼をやんわりと撫でた。

第十六話：石が叶えた願い

＊＊＊

結局、あのままアリシアの家に居たのではどうしようもないので、みんなに騒がせてしまったことを詫びて、私はアリシアのハーブ園をあとにした。

しょんぼりと店に戻っても、扉を開く音も床を弾く足音も何も届かない。

どうして良いのか全く見当がつかずに、促されるまま書斎のカウチソファに腰を降ろした。ブラックはそんな私の目の前に膝をついて腰を落とすと、そっと手を取り顔を覗き込んでくる。

唇が何事か紡ぐけれど聞き取れない。

分からなくて、私はふるふると首を振る。

ブラックは、すっと立ち上がると、一度その場を離れてずるずるとルカの首根っこを掴まえて戻ってきた。ルカは何か渋っていたようだけど、さっきのブラックと同じように私の前に膝をつき私の手を取る。

何事か口にしてくれているようにも思うけれど分からない。

その様子を見て、ふぅ……と嘆息すると、ルカは立ち上がりブラックを振り返って首を振る。

もともとこの家は静かだった。でも、ブラックもルカも今は居る。これだけ人の気配がするっていうのに何も聞こえないのは凄く変だ。

静寂が耳に痛い。
ブラックは私の手首から数珠を抜き取って、ひょいと取り出したノートに几帳面で綺麗な文字を書き綴る。

『これはカナイですか？』

私はこくこくと頷いた。
そして、ブラックからノートを取り上げると続ける。

『私が作ってと頼んだの。ブラックやルカに居場所を知られたくなかったから』

ぺらりとページを捲り新たに書き綴る。

『カナイを怒らないで』

と締め括れば、ブラックが切なげに目を伏せて、長嘆息したのが分かる。
それに胸が痛む暇もなく、すっと立ち上がったブラックは徐(おもむろ)に窓際まで歩み寄って、ひょいと杖を出現させると壁をこつこつと、縦に二箇所叩いた。
叩かれた場所は、ぱちんぱちんっと光が弾けて、直線で繋がる。
そこへブラックは、ずぼっと遠慮なく手を突っ込んだ。そして、思い切り、ぐいっと引っ張ると……。

「！！」

カナイが雪崩れ込んできた。
何かブラックに文句いっている。まあ、分からなくもない。いきなり引っ張り込まれたら普通怒る。

そして、当然のようにブラックはブラックで悪びれる風は微塵もない。つんっと顎を上げ、私の手首に掛かっていた数珠をカナイの前に突き出して文句をいってるみたいだ。

怒るなっていったのはスルーされたらしい。

ひと悶着終えたあと、私をちらと見てからカナイが近づいてくる。ぽんっと私の肩に手を置くから、カナイを見上げてとりあえず「ごめんね」と謝罪した。

「いーよ。別に。文句いわれるだろうなーってのは、最初から覚悟してたからな」

いって、にやりと口角を引き上げた。

……え？　いって？

「カナイっ！」

「なんだよ……」

「私の声聞こえるのっ？！」

「聞こえるよ？　音にはなってないけどな。なんていえば分かる？頭ん中で喋ってるのがまんま伝わってる感じ」

「で、でも……ブラックともルカとも……」

おろおろと、逡巡しそう問い掛ければカナイは珍しく意地の悪そうな笑みを浮かべる。

「話したくないからだろ？」

――　……え？

「お前が、あいつらの声を聞きたくないと、話したくはないと願い、そして、拒んだから、だろ？」

くつくつとカナイは楽しそうに笑うけれど、微塵も楽しい話ではない。

「こんなことになると思わなかったけど、あの魔法石の魔力がお前の願いを叶えたみたいだな。まあ、そんなに大した魔力は入ってなかったから、そのうち使い切ったら治るだろ」

カナイはそういって別に病気でも何でもないと続けるけど……ブラックは私とカナイの会話が成立している様子に物凄く落ち込んだようだ。

そっと、傍まで歩み寄って私の隣に腰掛けるとまたノートを取った。

このくらいしか意思疎通の方法が今はない。

『他に痛いところとか、辛いところはありませんか？』

――……どうして私は責められないんだろう……。

「そりゃ、自業自得だからじゃないのか？」

「勝手に人の頭の中読まないでよっ！」

慌てて、ぱんっとカナイの手を払い除ける。その様子をちらと見てブラックは溜息を重ねた。

『マシロの願ったことなら、私にはどうすることも出来ません。ただ、時間が経つのを待つだけです。何が貴方の心を縛ったのか、分

かりませんが……』

そこまで綴って、ノートの端っこをとんとんと弾く。次の言葉が続かないようだ。

そっと、私はその手を掴まえて文字を綴る。

『ごめんなさい』

私が癇癪を起こしてしまったせいで、こんなことになってしまった。ブラックと同じようにしょんぼりと肩を落としてしまう。

「で、俺もう帰って良い？」

――……ぽすっ

感傷的になっていたところで、カナイに頭を抑えられる。多分、身体の一部に触れていないと会話が成り立たないのだろう。

「明日も来たほうが良いのか？　それ、まどろっこしいだろ？」

ちらとノートに目配せしてそういったカナイに苦笑する。

「良いよ。どうせ、お客さんもいないだろうし、書くから……うん。暇なときにでも寄って……」

「ふーん、分かった。で、ブラックは引っ張り込んだくせに帰すつもりはないよな？　ああ、良いよ。別に、じゃあな」

そこでカナイは私から手を離してしまったから、何をいったか分からないけど、手を振って出て行ったので「さよなら」の挨拶でもしたのだろう。

それに続くようにルカまで部屋を出て行ってしまった。

う、気まずい。

『ルカに何か聞いた？』

恐る恐る書き綴れば、ブラックはゆっくりと首を振った。

『マシロを探すのが先でしたから……』

『ごめんなさい』

もう何度書き綴っただろう。

同じ台詞を綴る私をブラックはふわりと抱き締めてくれた。いつもなら心地良く聞こえる心音も全く聞こえない。

目を閉じると暗闇。

堕ちていくような感覚が恐くて身体が震える。

唯一感じることの出来る暖かさが私を救ってくれるけれど、もし、ブラックが迎えに来てくれなかったら私はもっとパニックを起こしていたかもしれない。

大丈夫は大丈夫ではなかったけれど、それでも、ここが落ち着く……。現金な話だけど、ブラックが居て良かった。

＊＊＊

翌日も、もちろん私の耳と声は失ったままだった。

私はこれまでそんな経験はしたことがなかったから――風邪で声

が出なくなるのとはわけが違う――気が付かなかったけれど、いきなり取り上げられてしまうととても不便だった。

音のない世界は想像するよりずっと恐ろしい。

普段静かだと思っていても、何かしらの音はしているものだ。

時計の秒針の音。

風が窓を揺らす音、プランターや温室の植物たちの葉が擦れ合う音。

とても微かなものでも確かにあったものだ。

それらが全て“無”になる。

日常生活は王都の方が慣れているとはいっても、ルカは店に居ないことが増えてしまった。ブラックは、どこか遠慮がちに出来る限り傍に居て欲しいと書き綴り、私はもちろん了承し、いつも通り種屋に戻る。

こうなってしまったきっかけが、きっかけで、その上意思疎通方法が筆談以外にないということで、私たちはどこかぎくしゃくしていた。

ちゃんとした説明も筆談ではもどかしい。

それに余計な誤解を招くとも限らない。

ブラックも直接聞いてこないから、私もそのことに触れることはしなかった。

夜はブラックのぬくもりを抱いて眠ろうとしても、いつもなら心地良く響く心音も聞こえない。規則正しい寝息も届いてこない。

目を閉じてしまえば、真空の中に閉じ込められたような息苦しさ。うとうとと意識がまどろめば直ぐに無音の恐怖に引き戻される。

殆ど眠ることは出来なかった。

ブラックも同じように付き合ってくれていたのか、ずっと私の背を撫でてくれていたけど、朝方には流石にうとうとしたようで、私はこっそりとベッドを抜け出して朝食の準備に掛かることにした。

第十七話：変わらないはずの日常

種屋のダイニングもキッチンも一階。
どちらも広さだけはかなりある。

ブラック一人のときは殆ど使われていなかったのか、何もかも新品同様だった。そこへ、一つ二つと私が色々持ち込んで、なんだかちょっと雑然としている部分がある。
でも、私は今の方が好きだ。人が居るという気配は心が穏やかになる。

とりあえず、お湯を沸かして……卵とサラダと……。
冷蔵庫――一番上部に魔法石（氷系）を入れて庫内を冷やし、食べ物を保存している箱――を覗きながら、必要なものを決めて取り出す。
かちりっと火をつけてもじゅわっとポットに付いた水滴が蒸発する音も、もちろん聞こえない。

「――　……」

少し寂しく思いながらも仕方ない。
もう暫らくの我慢だろう。

そう思って、野菜を洗って切る作業に取り掛かる。水がシンクを弾く音。ナイフがまな板に当たる音。昨夜から閉ざされただけだったというのに、凄く遠い昔のことのようだ。
自分の周りは本当に音で溢れていたのだと痛感。

はぁ、とシンクの隅っこに手をついて溜息。

胸がきりきりと痛む。

音が、ブラックの声が凄く恋しい。自分で拒絶しておきながら、言葉を声を交わしたくて堪らない。

寂しくて哀しい。音が、声が、恋しい……恋しい……。

じわりと浮かぶ涙を拭った。

ふと、視界の隅っこに湯気が見えて顔を上げると

「っ?!」

ポットが悲鳴を上げていた。

蓋がカタカタ揺れて弾けて飛んでしまいそうだ。慌てて、手を掛けたら予想以上に熱くて、反射的に弾いたら引っくり返ってしまった。

「っ!!」

ぱんっとお湯が弾けて腕や身体に掛かる。

――っ！　熱いっ！

悲鳴を上げたいのに私から音は出ない。

その場に座り込みそうになって、ぐいっと強い力に引き上げられた。そのまま、支えられ、袖が濡れるのも無視して流水にさらされる。

「っく……っ……」

気がついたときには私は泣いていた。

痛くて情けなくて、涙が止まらなかった。
助けてくれたのはもちろんブラックだ。

ある程度冷やしたらブラックは私を抱き抱えて、ダイニングの椅子に下ろした。
袖を上げるとお湯が掛かったところは赤くなり、じくじくと鈍く痛む。ブラックがそっと触れるにも、最初の痛みに肩を強張らせ顔を逸らした。

軽度の火傷に見えるけれど、薄く皮が剥がれ、ひりひりと痛む傷は自分のものなのに、見ていられなかった。ふぃっと顔を逸らせば、ブラックが丁寧に一箇所ずつ傷を癒してくれる。
その作業の片手間に、私が涙を堪えるように睨みつけていた机上に、ふっと出てきた紙にペンが勝手に走る。

『もう大丈夫ですよ、泣かないで……』

読み終えるのと同時に、視線が絡む。
視界は涙で濡れてしまっていて、ブラックの表情が上手く読み取れない。
多分、とても困ったような顔をしていると思う。

私はまた困らせている。
私は空いたほうの手でペンを走らせる。

『ごめんなさい』

昨日から本当に何度この文字を書き綴っただろう。

『謝らなくて良いですよ。直ぐに機能も戻ってくると思います。どうかそれまでは……』

書きかけて止まってしまった。私にいい辛いのだろうなと思い、変わりに私が書き綴る。

『何もしないよ……』

『――　……お願いします』

力なく頷く。本当、情けないな。

料理の続きはブラックがやってくれて、本当に私は何もしなかった。

普段なら、朝食を取って一息吐いたあとは屋敷の中のことを、適当にやるんだけど、こんな状態ではブラックが心配するし、離れたがらない。だから流れで、私も書斎で過ごした。

とりあえず、昨日の状況説明のためにアリシアには手紙を書き。回復次第遊びに寄らせて欲しいことも伝えた。

謝罪は直ぐにでも行ったほうが良いだろうけれど、この状態では、余計に心配を掛けるだけだ。

普段からのんびり過ごしているときは、常に何か話をしているわけじゃない。無言で居るときの方が長いくらいだ。

それでも私は満たされていたし、穏やかな気分で居られたのに、今日は無理。落ち着かなくて、椅子から立ったり座ったり、本を出したり引っ込めたり。

そんな様子を見かねたブラックが、時折作業を中断して、私を抱き締めてくれる。

何度も「大丈夫」「直ぐに戻るから」と書き記される。

その度に私は頷くけれど、胸の閊えは一向に取れることはない。

今日は既に何人か訪問客があったけれど、そのどれも種を持ち込んだものだった。

みんな意気消沈した様子でやってきて、種をお金へと変えていく。お金を持って帰るのを忘れそうになるお客さんは居たけれど、白化した球体を忘れる人は居なかった。

そのことが少しだけ私の気分を上向かせる。

種屋の仕事場に私が居ることを不思議そうな目で見る人が殆ど。まあ、場違いなのは私にも分かる。でも、対峙した店主が全く気にしないので、誰もそのことには触れない。

お昼に近くなった頃、窓辺でのんびりと外を眺めていたら、辺境の地には不似合いな豪奢な馬車が屋敷の前に止まった。中から出てきた人も使用人を従えて、多分、一般人ではないだろう。その様子を隣りで見ていたブラックは、難しい顔をして溜息を吐いた。

そして、ブラックは私を見詰めて少し思案したあと、ちゅっと頬に口付けてから、書斎机の椅子を引き私を座らせると、くるりと扉に背を向けさせた。

不思議そうにしただろう私に、にこりと微笑んで、今度は額にキスをくれる。

『どうか、このままで……』

というメモが出された。

私に頷く以外の選択肢はない。こくんっと頷くと、ブラックは折った腰を上げ、苦々しく扉に声を掛ける。そして、ふわりと私の頬を撫でたあと席を外した。

種を持たないお客さん、なのだろうな、と思う。
多分見ないほうが良い商談ごと。目の前で人が種に還るのも何度か目にしてしまっているのだから今更だけど、好んで向き合う必要もない。
何よりブラックも私もそれを望んでいないのだから。
ふぅと長嘆息して椅子に深く腰掛けなおせば誰かの気配がした。
けれど私は振り返らない。

ぼんやりと、憎らしいくらいの晴天を仰ぐ。
白い雲が薄っすらと掛かって心地良さそうに流れていく。

空、綺麗だな。

何気なくそんなことを考えていたら、昨夜眠っていなかったせいで眠気が今頃襲ってきて、私はうとうととする。少しだけ開いていた窓から吹き込んでくる、ひんやり心地良い風が頬を、肌を撫でていく。

凄く、すごく……心地良い。

瞼を閉じても陽光のお陰で薄っすらと明るい。これなら、少し眠れそうだ。じわじわと身体が重くなっていくのを感じた。

どのくらいそうしていたのか分からない。
私は、柔らかなキスで目を覚ました。唇の上を、つっと舌が這い優しく唇を吸う。

「――　……」

唇から音を紡ぐことは出来ない。
紡がれる音を聞き取ることは出来ない。
けれど、伝わってくるものもある。
私は、とても愛されている。
沢山の好きを丁寧に注がれている。
薄っすらと瞼を持ち上げれば、口付けは終わりを告げた。名残惜しい。そう感じるほどに心地良かったのに。
「……　――」
出せない音がもどかしい。
ブラックは見惚れるほど静かに微笑んでくれているけど、その瞳には、薄っすらと涙が掛かっているような気がした。
私が、ブラックを苦しめている。
堪らなくて、ブラックの頬に手を伸ばせば、ブラックはそっと目を閉じて、静かに手を重ねると私の手のひらに頬を摺り寄せてくれる。
閉じた瞳に僅かに滲んだ涙を、私は空いている手で拭うとブラックは苦笑して『少し眠くて』といい訳染みたメモを寄越した。
――　……ブラック……。
出せない音に自業自得とはいえ、胸を痛め私はそっとペンを走らせる。
『今夜はゆっくり休もうね』

そして、苦し紛れに笑いあった。

第十八話：失くしたから伝わるもの

午後は、王都に戻った。
ブラックが”仕事“で出なくてはいけないから、王宮か、店の選択肢を与えられ私は店を選んだ。

店の中を一通り探したけれど、ルカは同じように図書館にいっているようだ。
一体何を調べているんだろう？　まあ、聞いても大抵私の理解の上を行くようなことだから、構わないけど、面倒な問題に巻き込まれてないと良いな。って、私がいつも一番面倒だよね。情けない笑いが零れる。

そして、みんなに迷惑は掛けたくないという気持ちもあって店を選んだのに、エミルたちはわざわざ様子を見に来てくれた。

「筆談だけでは大変だし、不安だよね？　せめて回復するまで、王宮に身を寄せてはどうかな？　って、伝えてカナイ」
「は？　あ、ああ……　――だってさ」

カナイを通して伝えられる好意に私は静かに首を振った。

「大丈夫だよ。そんなに長くはないよね？」
「え、ああ。まあ、そうだな。うん……数日、だと思うけど」
「我慢するよ。私のせいだし」
「いや、そんな殊勝な態度取られたら、渡した俺が悪いみたいだろ？　いっそ、お前の口から俺が悪いっていってくれよ」
「……カナイ、エム？」
「もう、何もいうな」

くすくすと笑う。
笑えるのはこうしてみんなが居てくれるときだけだ。こうして、カナイが話しかけてくれるときだけだ。
僕もやってみようっ！　と私の手をぎゅぎゅ―っと握って（多分）念を送ってくるアルファをカナイが「魔力ゼロが出来るわけないだろっ！」と小突きまた笑った。みんなが居れば気を使うこともない。そんな様子を、壁に寄りかかり見ていたブラックが視界の隅に入ったけれど、今の私にはそれをどうすることも出来ない。ちりちりと痛む胸の痛みを堪えるだけだ。

ふっと姿を消す、ブラックにいってらっしゃいすら伝えることが出来なかった。

暫らくだらだらとみんな一緒に居てくれたけれど、王宮からの使いが来てしまい、まだ残っていると騒いだアルファを引っぺがして、エミルとアルファは王宮へと戻った。

カナイも帰って良いといったんだけど、王様の勅命により居残りだ。私もお店のほうを開けるような暴挙はしなかったから、私たちは二階でぼんやりと過ごす。
書斎のソファに腰掛けて、どこにいても本を読んでいるカナイの隣りに座り、足をソファのほうへと投げ出して、背中を預ける。どこかが触れていないと会話が成り立たないので、私が今一番楽な体勢を維持してみた。

「重い」
「大丈夫、私気にしてないから」
「……お前な」

私の悪態にカナイは嘆息したけれど、それ以上は食って掛からなかった。実のところカナイも僅かに責任を感じているらしい。

「カナイの責任じゃないよ」

と告げれば「当たり前だろ」と返してくるけど、気にしているのは分かる。カナイは口でいうほど無責任じゃない。

「んで、喧嘩解決したのか？」

「……うぅん……」

私はカナイの腕に背中を預けたまま首を振った。

「俺、お前らの間に立つのだけは嫌なんだけど……面倒臭そうだから……」

「良いよ、立たなくて。黙ってるとさ、色んなこと考えちゃって憤慨してたときの気持ち、すっかり萎えちゃった。だから、声が戻ったらちゃんと話するよ……ブラックも待ってくれてるみたいだし」

「――　……それなら良いけど」

そういったあとはただ静かに本の頁を捲った。

「そういえば、ルカと図書館で会った。そのあとはシゼの研究室で会った」

え？　と見上げてもカナイは本に視線を落としたままだ。落としたまま口にする。

「図書館ではやけに古臭い本を漁ってた。シゼのところには、即成長薬を取りにいったみたいだ」

「即成長薬って、何に使ってるんだろう？　ここにもそのくらい調剤する材料揃ってるのに」
「なんか用意している時間が惜しいとかいってたけどさ……あいつ、何やってんの？」
「私の理解範囲外」
ぼそっと告げれば「なるほど」と即答された。
感じ悪いな。
でも、ルカとシゼってあんまり仲良しなイメージなかったけど、実は仲が良かったのかな？　歳も一番近いしね。
「違うだろ。単に目的達成への一番の近道だと思ったんだろ？　あいつ種屋候補生だけあって、そういうところ抜け目ないし」
「――　……話し掛けてないことまで読まないでよ。プライバシーの侵害」
「ああ、はいはい」
結局私たちではルカが何を考えて動いているのかさっぱりなので、それ以上その会話に広がりはなかった。おやつの時間にはカナイがお茶を淹れてくれたけど、正直、黙っていたがカナイのお茶はいまいちだ。自分で淹れるのが大抵みんな面倒臭いので、何もいわない。飲めなくない程度の中途半端な不味さだ。
「……悪かったな」
「心読まないで」
ブラックが戻ってきたのは日がとっぷりと暮れた頃だった。
カナイもブラックが戻ってくるまで居てくれたのだから、ご飯くらい食べて帰れば良いのにと誘えば、凄く良い笑顔で「嫌だ」と返してもらう。

私が作るわけじゃないから味は確かだというのに、失礼だ。

「居た堪れないんだよ、お前らのビミョーな空気。俺に呼吸困難になれっていうのか」

ぼそそっと耳元で告げてこめかみ辺りをこつんっと弾かれた。

う、どうもすみません。

そんな私たちのやり取りを見てブラックは溜息を重ねた。そして何かカナイに告げるとカナイは「俺、帰るから」と答えて、私の肩をぽんぽんっと叩くと「じゃあな」と本当に帰ってしまった。その後姿を見送って、溜息を揃える。調子、狂うよね……。

『ルカも戻らないようですし、食事は家で取りましょうか？』

その誘いに乗って私はまた種屋に戻った。

食事は美味しい。

ブラックが作るものだから外れるわけない。外れるわけないけど、なんだか苦いような気がした。

明日には、声も音も戻っていると良いな。

そんなことを考えつつ、種屋の書斎にある大きな窓からぼんやりと、夜空を仰ぐ。今日も変わらず二つ月はそこにあって柔らかな光を世界に注いでいる。私の背後ではブラックが白化を終えた球体がふわりふわりと飛んでいた。

今夜はゆっくり休もうと約束したのに、私は目を閉じると堕ちていく感覚が拭えなくて、ブラックの腕の中で目を閉じたり開いたり

を繰り返していた。

『眠れませんか？』

そっとブラックの指先が胸元で文字を綴る。同じように私もブラックの胸元に文字を綴る。

『先に休んで良いよ』

ほんの少しブラックはくすぐったそうにするので、書き辛い。私が書き綴った文字にブラックは首を振ると続ける。

『音がないのが恐いですか？』

『うん、恐い。凄く……一人きりになってしまうような気がする』

しょぼしょぼと素直に書き綴れば、ぎゅっとブラックに抱き締められた。そしてそのまま背に文字を綴られる。流石に背中はくすぐったい。

『触れても構いませんか？』

正確に綴られる文字に心臓がとくんっと跳ねた。

私がブラックを傷つけたのに、そう願うのは間違っているような気がしていた。だから、自分からは伝えられなかった。あのときだって落ち着けば良かったのにそれすら出来なくて。

つんっと鼻の奥が熱くなりじんわりと瞳にヴェールが掛かる。

私はそれが零れてしまわないように注意を払いつつ、ブラックの胸に額を押し付けてこくんっと頷き、顔を上げた。

ふっと降りてくる影に瞼を落とす。

柔らかに重ねられた唇から伝わる暖かさが心地良い。失くした感覚がある分、残っている感覚が鋭敏になっていて、ブラックの唇が触れる感覚や、皇かな手のひらが私の身体を伝う感覚。その一つ一つに、身体が熱くなり、鼓動が早くなる。

「――　……っ、は、っ」

洩れる息は音を成さず、詰まるように苦しい。
喘ぐように口を開けば、頬に触れるブラックの唇が『大丈夫？』と綴る。私は、こくこくと頷きブラックの首に腕を、肌蹴た足はブラックの腰に絡めて引き寄せた。

触れられて落ちる闇なら、それほど恐くない。
分け合う熱が心地良くて、肌に降ってくるブラックの吐息が堪らなく艶っぽい。いつもよりももっとずっと傍で、吐息が触れる距離で、抱いてくれる腕に狂おしいくらい縋りつく。

恋愛相談所（前書き）

※王宮サイド※

＊＊＊

「それで、何しに来たの？」
「仕事の帰りです。例の件調査は進んでいるのかと問いに寄っただけです」
「暇なんだねぇ」

王城の執務室。
エミルは山と積まれた書類を一枚取り上げて、緻密に綴られた文字に目を走らせながら、ふらりと立ち寄ったブラックに溜息を溢す。

「――　……あまり進んでいないはずだよ。一応先遣隊の調査は終わったけれど、特に原因らしい原因も……ただ、気になるものはあったみたいだから、何人かは残って調査中。そのうち分かるだろうけど……」

どうだろう。と溢して、ぱんっと大きな印を押し別の書類を新たに手にする。

「この書類の山。このところラウが苛々しっぱなしで、八つ当たりが酷いんだよね。何か知らない？」

人払いをする前に侍女に淹れてもらったお茶を、手持ち無沙汰に揺らしながらブラックは答える。

「ラウの方がとばっちりだと臍を曲げているのですよ。そのうち勝

手に空いた後宮が埋まるんじゃないですか？」
「――　……ああ、やっぱりそのことか……」
「ええ、一番近いものが身も固めずといわれているようですよ」

くつくつと喉を鳴らしたブラックに、エミルは眉間の皺を濃して「面倒臭い」と唸る。そして、暫らく、何か思案するように黙したあと、再び口を開いた。

「まだ、マシロのほう戻っていないんだよね。マシロには断られたけど、ここに移ってもらって問題ないよ。寧ろ歓迎。大丈夫、僕は心が広いから、全て受け入れられるよ」
「お断りします」

キッパリとしたブラックの返答に、エミルは当然というように「ああ、そう」とそっけなく答えて続ける。

「ふーん……まあ、それならそれで良いけど」

これ添付書類が足りないじゃない。ぶつぶつと問題ありの書類を脇に寄せながら、応接セットに腰掛けているブラックをちらと見た。その視線に気がついたのかどうか定かではないが、ブラックがぽつっと訪ねる。

「――　……マシロから聞いたんですか？」
「ううん。聞いてないよ」
「そう」

掠れたような声で溢したあと、長嘆息する。
その様子に、同じく嘆息したエミルはペンを置いて空いた指先でコツコツと机を弾きながら不機嫌そうに続けた。

「まあ、そういうわけだから、さっさと帰りなよ。マシロに拒絶されてショックなのは分かるけど、今はマシロだってショックを受けてるんだ」
「――　……」
「マシロにとって予想外のことが起きているんだから、一人にするのは可哀想過ぎる。なんというか、説明するの凄く面倒くさいし、癪なんだけど……先代からこんな感じみたいだし、王宮に恋愛相談持ち込んでくるのなんてブラックくらいだよ」
「王宮なんて、常に愛憎劇のネタに困らないくらいはどろどろじゃないですか。得意分野なのでしょう？」
「――　……得意分野って……」

はぁ、とエミルは溜息を重ねたあと「これもマシロのためだよね」と溢して、椅子から立ち上がると机の前まで、ゆっくりと出てきて、ふぅと一息。

「まぁ、その得意分野だから見えることもあるわけだよ。だからさ、自分ひとりが傷付いている顔するのやめたら？　マシロ、きっと気がついてるよ。そして、自分が君を傷つけてると余計に傷付いてる。魔力の効果が予想よりも持続しているのはそのせいじゃないの？　カナイがそれに近いことをいってたけど？」
「そんなこと」
「何かな？」

苛々と声を詰まらせるブラックとは対照的にエミルは悠然とした笑みを溢す。

「わ、分かっています。そんなことよりも……　――」

ぶすっと口を開いたものの、いい終わるまでにブラックは、すっと立ち上がり扉を睨む。それから一息つく間もなく、派手な音を立てて扉が叩き開けられた。破壊されなくて良かった。流石、王陛下の執務室の扉は頑丈だ。

「王・宮、面倒臭ぇっ！」
「――　……はぁ」

乱暴に入ってきたのはルカだ。
どうやら各所で足止めを食ったのだろう。最終的には全部、振り払ってきたようだ。後ろからどやどやと武装した兵士たちが集まっていた。

「陛下っ！　ご無事ですか」
「うん。平気だから下がって。彼、僕の知り合い。はいはい、下がって下がって」

雪崩れ込むように入ってきた大人数に、エミルはのんびり歩み寄りつつ、姿勢を正す兵士たちを片っ端から下がらせた。渋る兵士たちに「早く」の一言で最終的には全員引かせた。色々染み渡っているようで従順だ。

「で、何の騒ぎですか？」
「あんた、なんでこんなところで油売ってるんだよ」

犠牲者を出さなかったことを褒めるべきか、もっと冷静に行動するように窘めるべきか迷った末、ブラックはどちらも口にしなかった。

「マシロ、が……」

ルカの口からその名が挙がっただけでブラックは、その場から、ふっと姿を消した。

「えーっと、それで？」

残されたエミルは、人払いもしたところだし、是非とも続きを聞きたいところだ。がしっとルカの腕を掴まえて問い掛ける。ルカはブラックが消えたところと、エミルを交互に見たあと、はあ、と嘆息。

「二回も説明するの面倒だ」

「そう？　じゃあ、マシロの店に行こう。そこだよね」

にこにことルカの腕を掴んだままそういったエミルに、ルカはちらと机上へと視線を走らせ「無理だろ」とらしくなく咎めるような口ぶりだ。

扉は無理矢理閉めたもののその向こうのざわつきは納まっていないようだ。恐らく待機したまま、といったところだろう。もし、本気でルカが暴れたりしたら一般兵などでは役には立たないというのに、ご苦労なことだ。

「良いよ、いける」

エミルは扉の向こうを睨みつけたあと苦笑し、あっさりそう答えると、つっと耳のカフスに触れた。

「カナイ、アルファ直ぐに来て」

いい終わる前に「あれ、何の騒ぎだよ」とカナイが先に現れそれ

に続く形でアルファも現出した。ルカはその様子に、溜息を重ね「身勝手な王様」と毒づいた。

しかしそんな毒は微塵も届くことなく、エミルはにこりと笑みを浮かべて、さくさくと二人へと命令を下す。

「僕これからここ突破するから、退路を確保して。そのあといつものところで合流。ちょっとあったみたいだから、早くね……ああ、もし、ラウに掴ったら、通さないとストライキ起こすと伝えて」

「は？　ストライキって……」

動揺し問い返したカナイを無視してアルファが前に出る。

「もしかして、マシロちゃんに何かあったんですか？」

「あったみたいなんだ」

こくんっと頷いたエミルの返答を最後まで聞くことなく、アルファはにこりと微笑んで、すらりと抜刀し扉の前で構えて

「んじゃあ、いっきまーすっ！」

蹴破った。

第十九話：夢の始まり

＊＊＊

――　……んー……気持ち良い。

枕にごろごろと頬を摺り寄せて。起きなくてはいけないという衝動と、もう少しだけ眠っていたいという狭間でたゆたう。

一番幸せな時間だ。

「――　……ろっ！　真白起きろ！　起きろっつてんだろっ！　早くしろ、起きないなら、また、置いていかれたーって騒ぐなよっ」

「うーるさいなぁ、郁は。起きます。起きます。起きますよー……」

もうあと五分くらいは寝ていたかったのに。

私は、もぞもぞとお布団から這い出て、枕元においてある目覚まし時計をがっつりと掴む。それを顔の前でまじまじと見て跳ね起きた。

「ちょ、もっと早く起こしてよっ郁！」

「ずっと起こしてたよ。早く準備しろよー」

姉の部屋を躊躇なく開けて悪態を吐いた郁斗に、むんずと掴んだ枕を投げつけた。しかしながら、タイミングよく扉を閉められ虚しく床に転がってしまった。

我が弟ながら本当に可愛くない感じに育ってしまった。

「ふわぁ～」

ベッドから立ち上がって伸びを一つ。
カーテンを開けると今日も良い天気だ。

「――　……って、あれ？」

腕を頭上に持ち上げたまま、ふと止まる。

ちょっと待って。
これ、何？
夢？
嫌だな、なんか凄く久しぶりにこんな夢。
ていうか、長くない？　リアルすぎない？　え、私の気がつかないうちに月でも重なった？

いやいやいや、待て待て待て。

「あ、声戻ってる」

耳もあれだけ郁がうるさかったんだから、戻ってる。

――　……夢、だから？

「真白ー？　早くご飯食べなよー？」
「え、あっ、ああ、うん、分かったー」

臣兄の声まで聞こえる。
え、えーっと、夢、ってことは付き合わないと、駄目？　駄目だよね。ということは、私の部屋だし、朝だし……って、ことは学校に行かないといけない、の、かな？

私は困惑しつつも、身支度を整えて階下へ降りた。

何年離れていたとしても忘れることはない。

私の生まれ育った家だ。

ダイニングテーブルにはお兄ちゃんが用意してくれた朝食が並んでいる。

郁は先に食べたのか、郁斗の席には食べ終わった食器がそのままになっていた。

「郁斗、結局先にいっちゃったよ。真白も早く食べて」

「う、うん」

毎日座っていた席に、そのまま腰掛けてタイミングよく出してくれたトーストを頬張る。

綺麗に焼き色のついたトーストに、甘酸っぱいベリージャム。

私の好きな組み合わせだ。

美味しい。

なんで夢の中で普通に食事をしているんだろう。

そして、抱いた疑問は益々深まる。私はそのまま学校に普通に向い、授業を受けた。ユキやサチたちと他愛もない会話をし、帰りには寄り道をして……既に……

「数日を過ごしてしまった……　――」

長すぎるだろ。この夢。

もちろん、シル・メシアに落ちたときに最初にやった、頬をつね

るとかそういう初歩的なことはやった。

――……当然、痛かった。

今日も、平穏な日常を送り、帰宅して、がっくりと机に両手をついて項垂れる。

おかしすぎる。

私は間違いなくシル・メシア。二つ月の浮かぶ異世界に居た。あそこが今の私のホームグラウンドだ。結婚までしたのだ。

今更、これが現実ですよというように、元の世界での生活が戻ってきても違和感しか感じない。

「なにより、高校生に戻ってるなんて」

私は既に二十歳は優に超えているんだから、若返って嬉しいとかそんな単純に両手放しで喜べるような状況じゃない。

何が私に起こっているんだろう。

一体、何、が……私に起こっているのか……。

『――……眠り病？　とでもいうのでしょうか？』

ふと、前にブラックが口にしていたことを思い出した。

私、もしかして、例の流行り病にでも掛かったのか？

いやいやいや、ないないない。

だって、ブラックも王都まではこないっていってたし。

「……私、死んだのかな？」

死んだ先がこれなら、極めて平和だ。
このまま、私はこのもうひとつの私の世界で生き続けるのだとしたら、それもあり、なの、かな……。でも

「ブラック」

夕焼けに赤く染まる空を見つめて、ほぅと息を吐く。
もし、私が死んだのなら、ブラックはどうしているだろう。ちゃんと謝っておけば良かった。ちゃんと理由も聞けば良かった。お別れくらいいう時間、あると思ってたのにな。
無意識に、ぽんぽんっとお腹を叩く。太鼓腹が鳴るだけだ。いや、そんな鳴る程、出てはいないと思う。多分。

沢山、道連れにしちゃったな……　――。

こちらで目を覚ましてからカレンダーを見たら、十一月だった。
通りで寒いはずだ。
シル・メシアは、凄い寒いっていう期間、凄い暑いっていう期間が短いからあまり実感することはないのだけど、ここではそういうわけにはいかない。
じわじわと深まってくる寒さはいわば元の世界特有のものだ。

「真白！　一緒に帰ろう」
「うん」

時間的な流れとして、私が推測すると一度シル・メシアから戻ったころだ。あのままブラックと一緒に帰らなかったらきっとこうして時間が流れていた。そんな雰囲気だった。
私はいつもどおり、ユキとサチ、三人で学校からの帰り途中まで一緒に歩いていた。二人は今夜のテレビ番組の話で花を咲かせてい

るようで、ちょっとこの世界に疎くなってしまっている私には着いていけない。凄くおかしな話だ。

「――　……ねぇ、聞いてる？」

「え？　あ、ごめん。聞いてなかった」

そんなことを考えていたものだから、呼ばれていたのにも気がつけなかった。ユキは「しっかりしてよ」と私の肩を叩き私は苦笑する。

何の話だったのかと思えば、気が早い二人はクリスマスの話題に移ってしまっていたようだ。

クリスマス、か……そういえば、昔あっちでもその行事を持ち込もうとしたら変な方向へと流れてしまったことを思い出す。

「真白は予定決まってるの？」

「今から？　まさか決まってないよ。多分、臣兄が居ると思うから、一緒に過ごすと思う。郁は薄情者だから友達と騒ぎにいっちゃうかもしれないけど……」

通例だとそうだ。

両親ともに年末も忙しいから、私のクリスマスのお相手はお兄ちゃんと郁斗がしてくれる。郁のほうはこのところまちまちだけど、一応早く帰るか、遅く出掛けるかで、少しだけ一緒に居てくれる。

「もし、暇だったら一緒にどっか行こう」

ぽんぽんっと二人に両サイドから肩を叩かれて、力なく微笑む。

私、そんな先まで、ここに居ないといけないのだろうか。嫌、じゃないけど……ここには、ブラックが居ない……。

それに、この二人。
絶対にこの類の約束は守らない。

しかもときめく笑顔で、ごめんねーと男の子に走るのだ。らしいといえばらしいし、それを特に責める気になれないのは二人の特権だと思う。
それじゃあね。と手を振る二人と別れて、私はもう少し先にある自宅までのんびりと歩いた。

確かにハロウィンが終わったあとは、街のオーナメントもクリスマス色が出てくる。
冬のイルミネーションはとても綺麗だと思うし、私も大好きだった。シル・メシアはそういうのあまりない。お祭りも、年に一回だし、それ以外は気が向いたら開催されるのだ。
本当に王宮の人たち——今はエミルもしくはハスミ様か、キサキ。この間は、ハスミ様のところに子どもが一人増えたからと祭りになった。それも必ずするわけじゃない——の気が向いたら。

いろんな意味で適当だ。
それにもう馴染んでしまっている自分も恐いけれど。でも、そっちが私の中で当たり前になりつつある。

第二十話：基本装備でしょう？

あ～あ……夢なんだから、ブラックとか出てきてもバチ当たらないと思うんだよね。
こつんっと歩道に敷き詰められているカラフルなレンガを一つ弾く。

「マシロ」

それと同時に聞こえた声。流石夢っ！　都合が良いぞっ。

「ねぇ、マシロ」

重ねられた声に、私は嬉々として「ブラックっ！」と振り返る。
きっと隠すことも出来ない満面の笑みだったと思う。思う、の、に……――。

「あんた、誰？」

急激に冷めた。ひゅるるる～……と下降していく音が聞こえそうなほど、がつんっと下向きに。
意図せず、瞳を細めて怪訝そうな顔をしてしまう。

「っ？！　えっ、ええっ？！　い、今、はっきり私の名前を呼んだじゃないですか！」
「いや、違う。そうかと思ったけど、ごめん。人違いです」

いって、踵を返せば慌てて腕を掴れる。

「ち、違いませんよ。私はブラックです」
「いーやっ、違う」
私は断固拒否した。
強く強く拒否した。
だって……だってっ！
「耳と尻尾がないっ！　そんなブラックさんに知り合いは居ません」
「ちょ……っ、そ、そこですか？　私の判断基準って、そこですか？」
それ以外にないだろう。何を今更いっているんだ。
大体、それをとってしまったら……ただの美形じゃないか。そんな知り合い居ない。というか、真面目に恥ずかしい。
真っ直ぐ見れない。
こっち見んな馬鹿っ。
私は意図せず赤くなる顔をぷいっと反らした。
「マシロが、こちらでは有り得ないというから……」
その台詞にじわりと視線を戻す。
くっ、本当に無駄に美形だ。嫌というほど美形に囲まれて生活したから、もうどんな美形にも動揺しないつもりだったけど……やっぱり好みというものがあって……残念ながらブラックは私のドストライクなのです。
でも、話を聞かないというわけにもいかないから、じわじわと若干遠巻きに顔を上げた。
「取り外し出来たの？　やっぱり」

「……やっぱりってなんですか……出来ませんよ。ちょっと見えなくしただけです」

触ってみますか？　と私のほうへと腰を折ったブラックの頭へと恐る恐る手を伸ばして、ふわふわと撫でる。

あ、本当だ。

何かある。

気持ち良い。懐かしい……幸せ。

「元気、そうですね？」

「え？」

私がしつこく触るので、ブラックはそっと私の手首を掴んで姿勢を正した。そして、そう告げた顔はどこか切なげだ。

夢の中で元気というのも妙な話しなのだけど。

「――　……」

と、それよりも。

私はブラックの腕をぐいっと引いて歩き始めた。あっちで居るとき以上にブラックは目立っている。買い物帰りの奥様方や、学校帰りの女の子たちの視線が痛い。

本人は見られるということに慣れている人種だから気にしないみたいだけど、私は気にする一般人だ。

丁度家の近所には公園がある。

滑り台と小さな砂場だけの小規模なものだ。この時間になれば子どもは家に帰るし、人気がないに等しい。私はそこまでブラックの

腕を無言で引いて、少しだけ急いで到着した。

私が促すまま、ブラックはその内の端っこにあるベンチに腰掛けて、ふ……と空を仰いだ。

一番星がもう出ている。

「月、本当に一つしかないんですね」

「うん、まあ、そうだね」

「ここが、マシロが生まれた世界、マシロを育んだ世界。空気もそこに満ちる力も全く違う……凄く、不思議ですね」

いや、私が今、不思議なのはブラックさんが異世界堪能しているところなんですけど。

「え、えーっと、夢。だよね」

「ええ、八割くらい夢です。現実に近い夢。ほぼ現実のような夢。ここで、もし命を落とすようなことがあれば、本当に死んでしまいますし、ここにずっと居続ければ、やはり同じように死んでしまうでしょうね……」

「え、ちょっと待って、この世界でブラックはイレギュラーだよね。平気なの？　というか、どうしているの？」

よく分からないけど、今のブラックの台詞ではブラックがここに居るのはおかしいような気がした。とても不自然なことのように思えた。

だから、そう訪ねた私にブラックはやんわりと微笑んで私を見詰める。

綺麗な夜の色をした瞳に見つめられ、とくんっと心臓が跳ねた。

とくとくと心地良い緊張。じわりと胸が温かくなる。

「私たちは、一緒に居なくてはいけないでしょう？　だから、入り込んだんです……貴方の夢に……」
「え」
「少し揉めたので、時間が掛かってしまいましたが、なんとかなったので、私は今こうしてここに居ます」
ほら、触れられるところに……いって私の手を取る。
少しだけ冷たい手のひらが私の手を包み互いの温度を伝え合う。
夢なのに……温度的なものを伝え合えるのは不思議だけど、私たちの吐く息は白い。だから、ブラックがいった限りなく現実に近い夢というのはこういうこと、なのだろうなと理解した。
「じゃあ、私まだ死んだわけじゃないんだ」
「ええ、もちろん。今は、まだ……だから私はこうして迎えに……」
いいかけて、ブラックは刹那口を噤むと、ゆっくり首を振って
「共にあるために来たんです。マシロと命運を共にするために」
空いていた手がふわりと私の頬を撫で、指先がつうと輪郭をなぞる。くすぐったくて心地良い。ふっと降りてくるブラックの影に瞼を落としそうになって、はたと気がつく。
「っだ、駄目だよ。ここじゃ駄目」
「――　……え」
くっと腕を突っ張った私にブラックは驚いたように瞬いた。
「誰も居ませんよ？」

「誰か通るかもしれないでしょ？　ここ、家の近所なんだよ……その、えーっと、兎に角駄目だよ」
「そこまで気にしなかったでしょう？」
可愛らしく首を傾げられても、ちょっと困る。
確かに気にしなかった。異世界では。
あそこでは家族に恥をかかせてしまう心配もなかった。でもここではそんな勝手は違う。噂になるのも、家族に見付かるのも抵抗がある。
例え夢に近い場所であっても。
「――　……そう、ですよね」
私があわあわと考え事をしている間に、ブラックは何事かに行き着いてなんだか納得しているようだ。私から手を離して、泣くように笑っていた。
どうして、そんな顔するのか測りかねるけれど、ずきりと胸が痛む。
「私はマシロに“嫌い”だと宣言されてしまっていますし」
「え」
「店に強く残っていました。私も、ルカも、嫌いだと。こんなところ出て行くと……」
ふわふわふわぁっと身体中が熱くなる。
別にブラックに直接いったわけでも本気でももちろんない。けど、ブラックは素直だ。
口にしたそのままを信じてしまうのは常。
当然の反応だと思う。

あれから、声が出なかったりしたから、説明のタイミングが全くなかった。違うと口を開くより早くブラックは「すみません」と続ける。

「知っていたのに、私は、それを知っていたのに……マシロを探しました。気配すら消していたので、貴方の本気は分かっていたのに、それでも、どうしても……耐えられなくて、探しました」

しょぼしょぼと告げ、がりがりと足元の土を掻く。

「無理に連れ帰り、あれほど拒絶されても尚、なんとか掴まえておこうと……結局こんな遠くまで逃げられてしまいましたが、追い掛けてきてしまいました」

すみません。と苦しそうに重ねるブラックに何もいえず、また、私は一言だけ「ごめん」と口にした。私は好きでここに居るわけじゃなくて、迎えに来てくれたというのなら、シル・メシアに、連れて帰って欲しいと思う。

そう、思うのに、それを口にするのは憚られて自分の軽率な発言にブラックを深く傷つけていたことを今更ながら、強く痛感した。

第二十一話：白猫のお手柄

「ブラック」
「あ、はい」
「あの、まだ聞きたいことといっぱいあるんだけど、あとで話すから、その、夢でも」
「今はここがマシロの現実です」
「そう、なの？　それなら、それで、ブラックの生活拠点とか、色々考えなくちゃ……」

あわあわと口にした私にブラックは「そんなこと気にしなくても」と笑う。

でも気にするよ。
私があっちに落ちたときはブラックの家に泊めてもらったし、いろいろ面倒見てもらったから困ることもなかったし、だから、こっちでは私がちゃんとしないと。

「えーっと、猫になれる？」

一か八かで聞いた私にブラックは少しだけ考えるように目を閉じたあと「なんとかなると思います」と微笑んだ。それなら話は……早くないけど、早い。元の姿でいられるよりは扱いが楽になる。
じゃあ、こっちに来てと私はブラックの袖を引き何とか道路からの死角になる位置へと引き込んだ。

「ここでなら、誰からも見えないだろうから……人が通らないうちに猫になって」

さあさあと急かす私にブラックは、誰からも見えない……と意味深に私の台詞を繰り返したあと、私の身体をぐいっと引き寄せて顎を取る。

そして、拒否出来るタイミングを逃し、上向かせられると唇が重なった。

少し乱暴なくらいの口付けだけど、凄く久しぶりな気がする。

夢のような現実。

現実のようにリアルな夢。

私の理解が及ぶところではないことは分かった。

けれど唇から伝わってくる熱は夢とは思えない。抱き締めて離さない腕に幸せを感じる。

ああ、好き、好きだよ。

あんな風に傷つけるなんて、私は酷い女だと思う。

だから、掴んだぬくもりから距離を置くのは私も辛い。辛いけれど、いつまでもここでこうしているわけには行かない。私が、少しだけ終わりの意思表示をすれば、ブラックは素直に私を解放してくれた。

離れた瞬間外気が熱を奪って酷く寂しい気がした。

反射的にもう一度といいそうになって飲み込むと、ブラックの胸に添えた手に力を込め、顔を逸らし「お願い、早く」と急かした。

「――　……」

刹那落ちる沈黙が痛い。

その言葉に従って、ブラックはふわりと淡い光とともに黒猫の姿になった。そして、足元に擦り寄ってくるブラックを抱き上げて「

とりあえず、遅くなったから帰ろう」と急ぐ。

＊＊＊

「――　……真白。分かってると思うんだけど」
「分かってるっ。分かってるよ。お父さんが動物アレルギーだからペットは駄目なんだよねっ！　分かってるんだけど、お願い。私の部屋から出さないから、だから許して」

家に帰る早々、遅かったからと心配して出てきた臣兄に懇願する。
強く強く。
これまで何度も諦めてきたペット問題。だからこそ、きっとこれだけ強く押せば臣兄なら……

「仕方ないな。許してもらえるように僕からも頼んであげるよ」

こうなる。

「ありがとうっ！」

満面の笑みで告げれば、困ったように微笑んでいた臣兄も頷いてくれる。

「もう直ぐ夕飯だから着替えたら降りておいで」

そういって私の背を二階へ続く階段へと促すようにそっと押してくれる。
私は二つ返事で「分かった」とブラックを腕に抱いたまま、駆け

足で自室へと入り後ろ手に扉を閉めると片手で鍵をかけた。
今まで必要ないと思っていたけれど、今日はこの鍵があって良かったと初めて実感した。

そして、ほうと一息吐いた私はそっとブラックをベッドの上に載せて、鞄を机の上に置いた。

「マシロの部屋久しぶりです」
「そっか、そう、だよね」

ブラックは一度だけこの部屋に来たことがある。そのときは部屋がどうなんて考える余裕、お互いになかったけれど。

「シル・メシアに行くまではここで過ごしていたの」

どう？　と聞けばブラックは元の姿に戻り少し考えてから「狭いですね」と素直に口にする。
着眼点が微妙にずれているけれど、確かにお屋敷生活しかしていないブラックにしたらこの家も、この部屋もとても狭いだろう。
でも、普通。
もしくはそれよりは広いほうだと思うのだけど。

「ですが、可愛らしいですね」

ひょいと枕元においてあったぬいぐるみを抱き上げて微笑む。
因みに、黒猫のぬいぐるみなのに深い意味はない。意味はないよっ！　とりあえず、自己突っ込み。

「それで、えーっと私あまり状況を把握していないのだけど、何から聞いたら良いのかな？」

「なんでもどうぞ、私に答えられることなら」

なんでもというのは、とても心強いが難しい。

まあ、時間はゆっくりあるみたいだし、大丈夫、なのか、な？

私は制服のリボンを解きながらクローゼットを開き部屋着を取り出しつつ思案する。

「私、なんでここに居るのかな？　夢ってことは身体は別なんだよね？」

「寝ています。深い深い眠りに……どこまで覚えていますか？」

問われて、うーんっと唸る。

「確かあの日、私は温室の様子を見に行ったの……見に行って、水を上げようと思って……」

「ええ、マシロは温室で倒れていたそうです。ルカが見つけて部屋に運んでくれた。マシロは流行り病にかかってしまったのです」

「え」

というか、やっぱり。

なんだけど、どうして、私だけ？

王都で何か病気が流行っているような風はなかった。閑古鳥が鳴いているとはいえ、うちは薬屋さんだ。流行り病のようなものが出たら情報が入る。

「流行というよりはマシロが第一号で、唯一になると思いますが……」

どーいう意味だ。
あまり良い意味合いに取れなくて眉を寄せると、ブラックは苦笑して「すみません」と謝ったあと話を続けた。

「覚えていますか？　名もなき花を」
「あ、ああ、あれ？　あれなら、そういえば咲いていたような気がする。いや、もう色が微妙すぎて開花してるのかどうか良く分からなかったけど。一応あれにも水を」

ああ、そうだ、あの茶色の地味な鉢植えにも水をと思ったはずだ。そこで……。と、私が行き着いたことを悟ったのか、ブラックはにっこりと微笑んで「あれは新種だったんですよ」と続ける。

「今回はルカのお手柄です。ルカが、あの花の異常にいち早く気がついてくれた。ですが、確証がなかったから色々検討していたようです」
「もしかして、それで図書館に入り浸ってたのかな？」
「だと思いますよ。そして、確実に危険なものだと分かったから戻ったら……」
「私が倒れてた、と？」

ぽつりと続ければ、そうですね。と苦笑された。

「私も突然変異で新しく出来たものまでは知識は追いつきません。ですから、気がついて差し上げることが出来なくて……」

そんなことにまでブラックは責任を感じる必要はない。
何にでも初めてというものはあって、それにまで知識が及ばないことを責めるつもりはない。そんなことといえば、ブラック以外はみんな責められてばかりになってしまう。

筆頭はもちろん私。とはいえ、どうでも良いとまでは口に出来ないから話を勝手に進める。

「じゃあ、シル・メシアの私はどうなるの？」

「一応カナイに生命維持だけは出来るように言伝てきましたから、大丈夫ですよ」

「……ブラックも、大丈夫、なんだよね？」

「――　……まあ、恐らくは」

ブラックは、困ったように微笑んだ。

「私は、こうしてマシロの声が聞きたかったんです。だから、それ以上はあまり考えていなくて……もしも、マシロが目覚めるならきっと私も覚めますよ」

「そんな……確証もないようなことで動かないで……無茶、しないでよ……」

呆れる。

いくらなんでも、後先考えなさすぎだ。

多分、きっとみんなが私を助けてくれているなら、ブラックのことも助けてくれていると思う。私はそう確信出来るけれど、ブラックは私を通してでしか他人を信用出来ない。だから、きっと本気で終わりになっても良いと思ってここに居るのだと思う。

「どうすれば、私は目が覚めるの？　帰れるなら帰ろう？」

そういった私にブラックは切なげな顔をする。

「帰りたいのですか？」

「え、もちろん」

即答出来るくらいの勢いもある。

もう、ここで何日も過ごした。タダの夢にしてはリアル過ぎて、長過ぎて。困惑する。だから私の元の世界に帰りたいと思うのに、思っているはずなのに。

それなのに、ブラックは首を振る。

「嘘は吐かなくて構わないのですよ？　マシロがここに居るということは、貴方はここで何かを望んでいるんです。何かすべきことがある。もしくは……」

「私の居場所は、ここじゃない。シル・メシアでしょう？　ブラックの隣りでしょう？」

「……私はここに居ますよ。よく、考えてみてください」

貴方の望みを……　――

第二十二話：雄です。

ブラックのいっている意味が分からない。
夢だというのなら覚めれば良い。
それだけのはずなのに、私がこの夢を見る意味を考えろといっている。

この世界はただの思い出だ。私の居場所じゃない。
そのはずなのに、ブラックにそう告げられると、胸の奥がぐらりと揺らぐ気がする。

でも、そんなことをいわれると、私がシル・メシアを選んだことを後悔しているのではと疑われているようで、面白くはない。

もう、何もかも今更なのに……。

「夢というのは捕らえるものです。悪夢にしろ良夢にしろ、見るものを捕らえて離さない。だから、自らの意思で目覚めるのは、とても……そう、とても難しいのです」

戸惑っていた私の手をとってそう告げるブラックは、私の手の甲にそっと口付けを落とす。

「私はマシロと運命を共にします。隣りに、傍に居ます。それをどうか許して……」

真っ直ぐに見上げてくる瞳に胸が熱くなる。

――　……ドンドン！

もう一度何か口にしようとしたら乱暴に扉が叩かれた。
私はびくりと肩を跳ね上げ、ブラックは、すっと猫に戻る。
「おーい、猫飼うことにしたって聞いたけどー？」
郁斗だ。
私は、あわあわと鍵を開けて扉を開く。郁斗は不思議そうに眉を寄せて「なんで鍵なんて閉めてんの？」と首を傾げ、私を横へ追いやって「どこどこ？」と部屋の中を見回す。
「おー、本当（マジ）だ。黒猫かー、美人だな」
ベッドの上のブラックを発見して、郁斗は無遠慮に歩み寄るとブラックを抱き上げた。
「男かー……」
なぜ残念そうなのだ。というか、恥ずかしいから、でろーんって抱き上げるのやめて、もっと丁寧に扱って……ブラック我慢してくれてありがとう……。
「あ、そうそう、飯だって。この猫、名前何？」
「ブラック」
「お前の名前の付け方に愛情を感じない……」
「う、うるさいなっ！　私の猫なのっ！　触らないでっ」
ぶすっと不貞腐れて郁斗の腕の中からブラックを奪い返す。ぎゅぎゅっと抱き締めれば、ごろごろと擦り寄る。

実に猫らしい。
完璧だ。

「んな、むきになるなよ。それに、鍵もやめとけ……猫なんだから、そんなことしなくても逃げないだろ？」

直接郁斗は口にしないけど、私が一度居なくなってからとても心配性になっている。
鍵の心配もきっとそういうところから来ているんだと思う。

私は「分かった」と頷いて、着替えるから出て行けと、郁斗を追い出した。
ばたんっと扉を閉めると「あれ、弟の郁斗」と腕の中のブラックに一応遅れた紹介する。

「引っ掻かないでいてくれてありがとう」

苦笑してそう付け加えれば、ふるふると私の腕の中で首を振る。
可愛いな。
さて、まだまだ話は尽きないけれど、先にやっとかないといけないこともある。私はそっと足元にブラックを降ろすと、途中になっていた着替えに取り掛かる。
とりあえず降ろすときにこっち見るなと告げたけど、多分意味はない。

「んー……と、あ！」

上着を脱いで、ハンガーに引っ掛け、シャツのボタンに手を掛けたところで声を上げる。
一番初めに訂正しておかないといけないことを、先送りにしてし

まっていた。そして、振り返るとベッドの上で丸くなっていたブラックは顔をあげ、すっと元の姿にまた戻る。

それにしても、本当に猫耳がないだけで、この破壊力はなんだろう。

もう、何度となく重ねるけれどっ、エミルの比じゃない――単に好みと慣れの問題――気がする。

ぱぁっと自分の顔が赤くなるのが分かる。

「あの、えーっと、その、ね……本気じゃないから、」

ごにょごにょと告げた私にブラックは首を傾げる。

「だから、その、本気じゃなかったの。嫌いだなんて、その、私どうかしてて……」

あのときは本当に頭に血が上っていてどうすることも出来なかった。

自分の口から出る暴言も押さえられなくて。ぎゅっと出したばかりの部屋着を握り締め、ブラックの顔を見ることも出来ない。

「本当ですか？」

と声を震わせるブラックに、こくこくと何度も何度も頷いた。

沢山の好きを重ねても、たった一度の『嫌い』の破壊力は半端ない。私は今、どうして？　と思うけど、もし逆だったら、私はそれを跳ね除ける勇気はなくて、やっぱり今のブラックと同じように傷付いて頼りなさ気に不安に支配されてしまうと思う。

「ごめ……」
「謝らないでください。謝らないで……」
いつの間にか歩み寄り、目の前に居たブラックの両手が私の頬を包み、愛し気に何度も撫でる。早く下に降りていかなくてはいけないのだけど、ブラックの長い指が肌に触れると離れることを強く拒む。
少し肌寒いくらいの室内も暖かく感じる程、ふわふわと体温が心地良く上昇する。
恐る恐るブラックの顔を見上げると、目尻がほんのり赤らんでいて、瞳は潤んでいる。嬉しいが身体全体から滲み出ている。
良かったと心底感じたのと同時に、私は背伸びをして、瞼を静かに閉じた。
顔にブラックの影が落ちると優しい暖かさに包まれる。胸のうちから湧いてくるようなぬくもりが柔らかな部分から伝わってきて私を満たしていく。
ああ、本当に今、目の前にブラックが居る。
私のためだけに、もしかしたら嫌われたかもしれないと思いつつも、こんなところまで来てくれた。
凄く、凄く嬉しい
ぽさっと手にしていた服が床に落ちるのも気にせず、私はブラックの背に腕を回した。
「来てくれてありがとう……よく、分からないけど、少しだけ、考えてみる。それから……私もブラックに聞きたいことがあるの」
ちゅっと軽い口付けで離れてブラックの瞳を覗き込む。

「それで、私が嫌われた理由が分かりますか？」

くすりと微笑まれて、今度は私の方が眉を寄せる番だ。

「意地悪、だよね」

「大好きなんです……」

許してください。と強く抱きしめられたら許さないわけない。というか、ブラックが私に甘いのと同じだけ、私だってブラックには甘いのだから当たり前のこと、なんだけどな。

第二十三話：馴染みすぎじゃないですか？

「マシロの世界は面白いですね」
「……なんかブラック馴染みすぎだよね。フツーに馴染んでるよね」

翌日は学校が終わるのが待ち遠しくて仕方なかった。
昨夜はゆっくり落ち着いて話を、ということが出来なくて、大事な話は今日に回した。

ブラックには家で大人しく待っていてもらっても良かったのだけど、それってなんだか、私が家にブラックを縛り付けるようで気が進まなくて、好きに過ごしてもらうことにした。

そして、夢なのに、テスト期間ということもあり早く終わって嬉々としてブラックと合流する。
昨日会ったときも思ったけど、顔とスタイルが良いのは置いといて、それ以外全く違和感がない。服なんて、まんま雑誌とかに出そうだ。
この辺がもっと都会的なところだったら、確実にスカウトとかされてるだろうなと思う。
他にどのくらい違和感ないかというと、車に驚いてくれたりしないし、テレビにも昨夜驚かなかったし……ちょっと面白くない。
そういうのって、異世界召喚的な雰囲気として、押さえておかないといけないような気がしたんだけど、ギャップ的なものは感じないのだろうか？　残念すぎる。適応能力高すぎる。

「昨日と先ほどまで、マシロが学校に行っている間、暇だったので、一応書店で勉強したんです。読み書きも多分対応出来ると思います。もし、変なこといってたら教えてくださいね？」

「――　……優秀なんだね」
「普通ですよ」
謙遜している風ではなく、本人的には本当にそれが普通なのだろう。ということは私より余程今現在の時勢に詳しそうだ。
「見た目も、おかしくないですよね？」
今更そういって、自分の格好を確認している。
「おかしくないよ。格好良いと思う。私なんて不釣合いなほどに、ね」
ちょっと面白くない。
もういっそ、耳と尻尾出しっぱなしで変質者扱いでも受ければ良いのにと、可哀想なことを平気で思ってしまう。
そんな私の心内を感じたのか、ブラックは嬉しそうに微笑む。
「色々見ていて思ったのですけど、本当に皆マシロと同じように種を持たないのですね……凄く自由度が高い。そして、皆平等に学を修める。偏った知識ではなく。平均して皆が持つことが出来るようなシステムが出来上がっています」
のんびりと並んで歩きながらそんな話をする。
確かに、専門的なことを学ぶにしても、シル・メシアほど偏ってはいない。あちらは極端にいうならイチかゼロかなところがある。
「それにとても美しい。昨夜屋根から見下ろした夜景は素晴らしかったです」
「……危ないから屋根に上らないでね」

「大丈夫ですよ、猫ですから」

にこにこと好奇心丸出しで話をするブラックは珍しい。

「そうだ、このままデートしようか？」

制服のままだけど、まあ、良いよね。

そんなブラックを見て、にこりと提案した私にブラックは「マシロさえ良ければ」と微笑む。

――……うっ……私にだけでも猫耳見えたほうが良いです。

慣れなくて心臓に悪い。

ぱあっと、頬が赤らむのを隠すように視線を逸らせば、ブラックはくすくすと楽しそうに笑って話を続ける。

「そういえば、ふらふらしていたら、色々貰ったんですよ」

貰ったというから、ポケットティッシュとかその程度のものかと思ったけれど、ブラックが私に差し出してくれたのは名刺多数だった。

よく分からない出版社とかもあったけど、裏を返したら知っている雑誌の名前とか並んでいた。そんな妖しげなものもいくつかあったけど、有名どころもちらりほらり……。

「気が向いたら連絡するようにいわれたのですけれど、したほうが良いのですか？　何かのこちらでしないといけない契約的なもの？」

「……まあ、契約といえば契約だけど。しなくて良いから」

「仕事がどうとか。私こちらの通貨は持っていないので、何かしたほうが良いですよね。金銭的な問題は自分で何とかしなくては、マ

シロに何か差し上げることも出来ないし」

――　……夢の中でまで自立しようとしないでください。

はあ、と溜息を吐いて「必要ないよ」と溢し、目に付いた一枚をひらりとブラックへと見せる。

「間違ってもこういうところへの就職とか考えないでね」

ぶすっと口にした私にブラックはそれを手に取り、首を傾げ「どうしてですか？」と質問してくる。なんと説明すれば良いだろう？　やや迷ったあと私は丁度良いことを思い出した。

「私がルージュさんのお店で働いたときのこと覚えてる？」

人差し指を立てて、くるくると回しながらそういった私にブラックはとても渋い表情をする。ちゃんと覚えてくれているようで良かった。

「それと同じ。そういう職業を否定はしないけど、ブラックには関わって欲しくない」

因みにホストクラブの名刺だった。

こんなところにもそういうお店が出来たのだな、ということにはしみじみしたけど、ブラックがホスト？　やめて嵌りすぎるから。フツーにナンバーワンとかなりそうで恐い。

「分かりました。嫉妬ですね」

「……う、うん……まあ、それで良いよ」

もっと複雑な部分もあるのだけど、ブラックが嬉しそうなのでそれだけで良いや。

そして、ブラックのものだけど、私にくれたのだから私が好きにしても良いはずだ。ブラックが手にしていた一枚も奪い取って、私は、何の躊躇もなくびっびっと細かく千切る。

それから、丁度通りかかったコンビニのゴミ箱へと捨ててしまった。別に私の行動にブラックは何もいわない。

ゴミはゴミ箱。

間違っていません。

でも、本当は名刺を簡単にあんな風にしちゃ駄目だよね。ごめんねと心の中だけで謝罪する。

ふぅ、ブラックに就職難とか関係なさそうだ。

引く手数多で……て、本当に馴染みすぎ。

「それに、ここに長く住むわけじゃないんだから、仕事とか金銭的な心配まではしなくて良いと思うの」

「――　……住んでも構いませんよ」

「え？」

驚いて隣を見上げれば、私の視線に気が付いたブラックは私を見ると、可愛らしく肩を竦めた。

「冗談です」

「……そう、だよね。もう！　ブラックの冗談は分かり辛いんだよ」

そういって腕を絡めブラックの手を取る。

なんとなくどこかへいってしまいそうで恐かった。

私は夜景が綺麗だと感嘆していたブラックに、もっと高い位置から見せてあげようと展望台を目指していた。山の上にある展望台で、途中からはロープーウェイが通っている。
ゆっくりと山間を登っていくロープーウェイは平日ということもあり、私たちの貸切だった。

「こういうのはあちらにもありますよ」
「そうなの？　私見たことないよ」
「ええ、王都にはありませんね。天文台に登るところにあるんですよ。私は乗ったの初めてです。随分のんびりなんですねー」

高速だったりしたら、かなり恐いと思います。
そんな話をしている間に、山頂まで到着して、がこんっと揺れると、そっと支えてくれる。そのまま手を引いてもらって降りると、展望台までの道をゆっくりと歩いた。

冬は日が暮れるのがとても早い。
さっきまで空が赤らんでいたとしても、もう暗くなる。あまり遅くならないうちに帰らないといけないけど。

ブラックは、上り詰めた展望台の柵にお腹を預けて、少しだけ身を乗り出す。
あちらで居るときよりもずっとテンションが高い。
とても楽しそうに見える。

私がその隣り並べば、にこにこと口を開いた。

「見てください、マシロ。凄いですね。光が川のようです」
「今、季節だからね」

「季節？　寒い頃という意味ですか？」
「冬の寒い時期はイルミネーションが映えるよね。冷たい空気が良いのかな？　それにクリスマスが近いから」
「マシロが以前サンタクロースという篤志家の話をしたアレですか？」
「……うん、そう」

もう訂正するのも面倒臭い。
私が頷くと「なるほど、これも彼の力ですか」と微妙ずれたところで一人納得したように首肯して、又階下を見下ろす。

その横顔は外灯の僅かな明かりに照らし出されてとても綺麗だ。
でも、見ているとどこか切なく感じてしまうのはなぜなんだろう？　少し恐い。

「ブラック？」
「――　……はい」
「何、考えてるの？」
「冷えるのでマシロを抱え込んでも怒られないかどうか思案していました」

いうのとほぼ同時に、柵と自分の間に私を入れて抱き込んでしまう。

暖かい……。
寒い日の平日こんなところには人っ子一人居ない。ここまで来て知り合いに会うということもないだろう。私は素直にブラックに体重を預けて暖を取る。

「さっきの……本当に冗談だよね？」

首を捻ってブラックの顔を見上げると、ちらとだけ視線を投げられて「ええ、もちろん」と答えてもらうけれど、なんだかやっぱりうそ臭い。

「ここが夢なら、覚めないと……」

真面目にそういうのに、ブラックは困ったように微笑んで「当然です」と相槌をうち、でもそれ以上何もいわせないように、ふっと顔を近づけて唇を重ねた。

「……ん」

唇の端から漏れる吐息が白い。

繋がっている触れている部分だけが暖かくて、その分相手の存在を強く感じる。

でも、はぐらかすためのキスなんて、ブラックらしくない。

いつでもブラックは私に対して真摯な態度を崩さない。崩さないはずなのに。そう思うと胸が苦しい。ちくちくと痛む。

僅かな疑問が不安に変わる。

「――　……聞きたいこと、聞いても良いですよ」

僅かに降りた沈黙のあと、私の肩口に額を擦り付けたブラックがぽつりと口にする。

私は少しだけ悩んで、それでもそのままには出来ないから「うん」と頷いた。

第二十四話：大切なもの優先順位

大きく深呼吸。
口にする前から全身がどきどきと強く脈打っている。
口の中が乾く。

何から話せば良いだろう。
順を追って、そう、思うのに結論を急ぐ。

なぜ？　が頭の中を駆け巡る。
私はもう一度深呼吸を重ねてから意を決した。

「どうして、いってくれなかったの？」
「？」
「ルカもブラックも気が付いていたんでしょう？　どうして、私が蚊帳の外にいないといけないの？　私は関係者で当事者でしょう？　どうして……」

ルカから聞いたときの苦い思いが蘇り、声が震える。
怒っているわけじゃない、悲しんでいる……ううん。分からない。
ただ、納得がいかない。

ブラックは、細く長く息を吐き私の髪に顔を埋めつつ、すみませんと謝罪する。

謝って欲しいわけじゃない。
謝って欲しいわけじゃなくて、私は理由が知りたい。

「あの日、私は翁のところからの帰りで少し浮かれてた。不安がな

いといえば嘘だけど、でも、喜ばしいことに変わりはないでしょう？」

「……すみません。私には嬉しいかどうか喜ばしいのかどうか、分かりません。マシロが喜ぶのならそれが一番だと、そう、思います……マシロはハーブ園の……アリシアでしたか？　彼女のときとても喜んでいましたし、それと同じくらい切なそうな顔をしていました。だから……できればと思ったのです」

「そ、それならっ！　それなら、分かったとき直ぐにでも」

ぽんっとブラックを背で弾いてくるりと振り返り、向き合って見上げる。

ブラックはとても困った顔をしていて、どうして私が怒るのか分からないという体を崩さない。

本当に不思議そうに首を傾げる。

そして、暫らく私を見詰めて「本当に……」と口火を切る。

「直ぐに駄目でしたよ？　マシロ……悲しむでしょう？　知らないほうが良いと思ったんです。また、機会はあると思いましたし、それなら、無駄な悲しみなんてないほうが」

「ブラックだって辛いでしょっ」

私は聞いただけで、吐きそうなほど辛かった。

苦しかった。

頭が真っ白で何も考えられなくて、どうして？　だけがぐるぐると支配していた。

「辛くないですよ？　どうして、そう思うのですか？　マシロが痛まないなら私は痛くないです。辛くないです」

「――　……っ」

ブラックをとても遠くに感じる。
こんなに近くに居るのに。

暖かさも鼓動も伝わる距離に居るというのに、とても遠い。

同じ感情を共有することが叶わない。
ブラックには私が中心で、それ以外の命なんて重くないし意味が分からない。

きっと、それが我が子でもそうなのだろう。

私なんて今だって、口にするのも躊躇する。
それなのにブラックは、きょとんとしている。本当に何も分からない子どものように不思議そうにあっさり口にする。

だから、今も私の言葉の意味が分からない。

「マシロなら知れば悲しむと思いました。だから、ルカにも口止めしました……子どもには無理だったようですけど……」
「……」
「マシロが辛くなければ、私は辛くないです。何も感じなくてすみません。マシロが傷付くだろうことは察することが出来るのに、他の事はまだ良く分かりません」

そんな風にしょんぼりとされると私もそれ以上は強くいえない。
私は長く息を吐き、こつんっとブラックの胸に額を押し付ける。
分からなかっただけ、私にとって良かれと思ってそうした結果だ。
それを気に入らないからといって私が一方的に臍を曲げてしまった。

間違ってはいないと思う。普通だと思う。でも、相手はブラックだ。他の誰かじゃなくて、ブラック。そう考えたら仕方のないことだったのかもしれないと思えてしまう自分に苦笑する。

あの日、体調が芳しくなくて、仕方なく用事のあった序に翁のところへいった。そして、その結果私は懐妊を告げられ心躍っていた。

それなのにルカはあっさりと「ああ、また？」と口にしたのだ。

また。

と……怪訝な顔をした私にしまったと慌てたから言及したら……、以前にも一度兆しがあったらしい。それは私が気が付けないうちに幕を閉じた。

私は私が全く知らないうちに新しい命を消してしまっていた。

『ブラックさんだって知ってた』

そういわれたとき、頭に血が昇ってしまった。

私だけ、私だけ知らない。苛々して止まらなかった。私はブラックのことが大好きだ。信用しているし、彼のことを分かりたいと思っている。でも、ブラックは違った。私だけ、わたしだけ。

私は当事者のはずなのに、偏った愛情によって知らずに安穏と過ごしていた。堪らなかった。

「私やルカは見ることが出来るんです……特にマシロは種を持たない。だから、よく見えるんです……伝えられなくて、いえなくて、すみませんでした……」

何も聞きたくないと思った、もう、私から罵るようなこともした

くないし、だから、話もしたくないと思った。
そう……私は、分かってた。ブラックが、私のことしか考えられないことくらい……そして、それはとても偏った感情であることも。

「マシロ……泣いているんですか？」
「――　……」

私が喜ぶだろうと、子どもを望み。
私が悲しむだろうと根付くことのなかった命の存在を伏せた。

「私たちは、大切なところで擦れ違ってる。肝心なところで私は独りにされる。守られてばかりだから、こんなことに……私がもっと強ければ、その信頼に足る存在だったら」

私が心身ともに強いと認められていれば、隠されなかったかもしれない。私はとても弱くて不安定。情けないことにそれが事実なのだろう。
でも、でも……　――
ブラックは何をいって良いか分からなくなっている。
困惑し混乱している。

それが分かるのに、私は続けた。

「あのとき、私、同じだけ貴方も傷付けば良いと思った。私サイテーだから、私が居なくなれば、自分の意思で出て行ったと知ったら傷付くと思った。それなのに、私の思惑通りに拒絶され傷付いたブラックを見て、私はまた傷付いた。もう、どこで間違ったのか分からないよ」

私も、もう分からない。

そう続けた私をブラックはただ静かに抱き寄せた。

今は、ちゃんとブラックの鼓動が聞こえる。外気に冷えた服が私の頬の熱を奪っていってくれる。心地良くて静かに呼吸を整えた。

「今度は、無事、だよね」

「え、あ……はい。もちろん」

「そっか……じゃあ、早く戻らないと……」

ブラックと二人で……　――

静かに目を閉じて、ブラックのぬくもりを感じる。鼓動を感じる。私の居るべき場所は、もう、この場所ではない異世界だ。そしてこの人の隣りにしか私の居場所は存在しない。

それでも尚、やりのこしたこと、か。

――　……　――

「ねぇ、マシロ」

少しだけ遅くなってしまった。

家には電話を入れておいたし、大丈夫だろう。帰りはのんびりと歩いて降りた。

緩い坂道の両脇の明かりだけが頼りだけど、こちらのほうが慣れたものだ。シル・メシアの夜はこの世界ほど明るくはない。

きゅっと繋いだ手に力を込められて、私はそれに応えるように振り仰ぐ。

見上げた私と視線が絡むことなく、ブラックはぼんやりと前を見てぽつりぽつりとどこか不安そうに零した。

「私はマシロしか大切に出来る自信がありません。実感が湧かないというか、そういうレベルではなく……愛することは出来ないと、そう、思います」
「――　……うん」

ブラックが告げる言葉は、普通に聞けば薄情であると思うし、この世界の常識からいえば有り得ないと思われてしまっても仕方ないと思う。
けれど、私にはなんとなく分かる。私はブラックを知っているから。彼が異世界であっても異質だといわれてしまうことも、その理由も、もう、なんとなく私には沁み込んでいるから。

ブラックの腕に腕を絡め、こつりと頭を擡げる。

それでも、私はこの人が好きでこの人を選んだ。
間違ったなんて一度も思ったことないし、これからもそう思うことなく、私は愛されると思う。自惚れでも何でもなく、きっと、それだけは絶対なのだと、そう思える。

それに、欲しいと思っても、それがリアルな話しになってきたとすれば、私だって、分からない。
少なくとも私は大切にすると思う。
その私をブラックが大切に思ってくれるなら、そう悪いことにはならないと、楽観的に思える。

「心配しなくても、私はブラックが大好きだよ。傾ける愛情が減ったりしないよ。大丈夫」

愛情は減るものではなく、きっと増えるものだ。そう思える。

第二十五話：スイッチオン（前書き）

※Ｒ１５程度（もしくは以上）の性表現が含まれます。苦手な方、該当年齢に達していない方は、この頁は飛ばしてください。多分そんなに問題ないです。

読後不快感を示されてもどうにも出来ません。

第二十五話：スイッチオン

＊＊＊

「駄目、で、す……もっと、優しく……っ」
「優しくしてるつもりだけど、あれ？　んっ、ちょ、ごめん」
「い、たい、です」
「そういえば、私、猫なんて洗ったことないや……」
「ちょ、マシ、ロ。げふっ」

――　……というわけで、帰宅した私たちは大きいままお風呂は問題だろうと、猫のままお風呂に入れてあげたのだけど、失敗に終わった。

「……まだ、口の中に石けんが入っているような気がします……」
「ご、ごめんね？　明日は勉強してから挑戦するよ」
「また、やるんですか……？」

いや、そんな泣きそうな目で見られても。

「な、何事も経験だよ。大丈夫、もっともっと頑張るからっ！」

ぐったりとベッドに寄りかかり、アイスティーを飲んでいたブラックに力強く答えると「そう、ですね」と曖昧な笑みと、曖昧な返事が返ってきた。
そんなに、怯えなくても次は大丈夫だ。というか、次がある時点で問題かもしれないのかな？

「それより、マシロ」

ことりとグラスをローテーブルに載せたブラックはベッドに腰掛けると、ぽんぽんっと膝を叩いた。
私は「何？」と単語帳を片手に促されるまま横向きに腰を降ろす。テストなんて夢の中でどうでも良いかもしれないけれど、実施される以上はそれなりの準備をしないと落ち着かないというものだ。
私は基本的に小市民で小心者ですからね。

「マシロは勤勉ですね」

褒められているのかと思ったのだけど、違ったようだ。
ブラックは私の手の中から、単語帳を抜き取ると、あっさりローテーブルに放ってしまった。私の短い拒絶の言葉は無視された。

「こちらに来てから、あまり構ってもらっていません」

大きな身体で猫らしく擦り寄ってくる。
がっつりと私の肩を抱いて、顔を近づけて口角を引き上げる。なんでそんな良い顔されないといけないのか、じりっと後退したくなるのは本能的なものだ。
危機を感じた。
生命的な何か。

ねぇ、マシロ。と耳に甘い声を注ぎ込まれ、ぱぁっと身体が熱を持つ。空いていた手は前に流れてきていた長い髪を絡めて遊ぶ。

「ブラック、あ、ぁのね」

すりっと鼻先が耳の後ろを擽り「はい」とブラックが返事をするとその吐息が掛かる。
鼓動が早くなって、あわあわするので離れてくださいという気持ちを込めて微妙にずれたけれど、もちろん徒労に終わった。

「タオル一枚で生殺しだったんですよ……」
「な、生殺しって、そんな……仕方ない、でしょ、」

うちのお風呂は狭いし、大人二人が一緒に入るわけにはいかない。
重ねるけどお屋敷ではないのだ。
服を着ていては嫌だというブラックの我が儘を聞いて、タオルで妥協したのだからそこは見逃して欲しいと思う。

「それはそうと」

そのくせあっさり引いたブラックに拍子抜けする。
どうでも良いならそんな話持ち出さないでよ。

「会えなかった一年ほど……マシロはここで過ごしていたのですよね」
「――　……え？　ああ、まあ、そうだよ」
「寂しく、なかったですか」

頬に鼻先を摺り寄せて、時折頬に唇が寄せられる。
くすぐったい。でも、心地良い。
緩く瞼を落として、柔らかく注がれる愛撫に身を任せる。ブラックの声も所作も性急さがなければ、とろりとして緩やかに私を甘く酔わせるには十分だ。

「寂しかったよ……とても……」

今でもそのときのことを思い出すと切ない想いが溢れてくる。
人生のうちあんなに後悔することは後にも先にも、もうないと思えるくらいは後悔した。会いたくて声が聞きたくて、触れたくて…ほぼ連日泣いて過ごした。
そんな私の気持ちを察したようにブラックは続ける。

「きっと、マシロの方が寂しかったですよね」
「――　……え？」
「この場所では、誰も私たちのことを知らない。私には貴方を迎えに行くという目的があったけれど、マシロはそうじゃない。ただ、無為に時を過ごすのは辛いと思います」

今はこうして一緒で嬉しいと締め括り、肌に纏わりつくように首筋に舌を這わせる。濡れた部分が冷えた空気に晒されてひやりとし身の内を熱くする。

「ねぇ、マシロ……その間、私を思い出すことはありませんでしたか？」
「――　……っふ、ん、ある、よ、もちろん」

生暖かな息が耳に注ぎ込まれ絡みつくように問い掛けられる。
柔らかく、私の身体をなぞっていた大きな手がいく当てのない私の手を包み込む。

「え」
「――　……触れたこと、ありますか？」

予想していなかったことに驚き、思わずブラックの顔を見た。
蠱惑的な笑みを浮かべたブラックは、色めいた瞳を細めて私のこ

めかみに唇を寄せ軽く食みぺろりと舐める。そのなんとも艶かしい感触に私の胸の奥がきゅっと縮まり熱を持つ。

ブラックの手で固定された私の手は彼に促されるように、自分の足の付け根に触れ、ゆっくりと指先が這う。びくりと肩を強張らせ、嫌だと力を込めるけれど、全く意味を成さない。

「ヤ、だ……」

「触れなかったんですか？　こうして……」

「、しな、ぃよ」

パジャマの上からでも、その奥が、じんっと熱く熱を持っているのが分かる。

やめてと顔を逸らすけれど、拘束するまでには至らない程度の腕の力なはずなのに緩むことはなく、ゆるゆると蠢き確実に私が感じるようにと突き進む。

羞恥心に瞳が潤み、俯いてきゅっと瞼を硬く閉じれば、その間をブラックの舌が這い軽く眼球に触れていく。背筋から、かぁっと熱が這い上がってくる。

泣かなくても、と、喉の奥で哂われて、きゅうっと身体の奥が苦しくなる。

「本当に、一度もない、ですか？」

重ねられた手に力が込められて、強い刺激が感じやすくなった部分を攻める。

短い吐息が漏れ、じわりと額に汗が滲む。

胸のドキドキが全身に伝わり、身体中が心臓になってしまっているように激しく脈打ち熱を孕み放出するときを待ちわびる。

「……いじわる、しない、で」

声が掠れる。

ないわけじゃなくても認めるのは恥ずかしすぎる。

僅かに身を捩って掴まえられていない方の手で、つっとブラックの内腿を撫でる。その中心が張り詰めているのが分かり自分だけじゃないとどこかほっとする。するりと、撫でて見上げれば薄っすらと濡れた瞳と出会った。

吸い込まれるように上向いて、重ねられる唇を軽く食み、柔らかく吸う。

「んぅ、ぅ……」

「……は、ぁっん……」

濃厚な口付けに、固定されてしまった手のひらの奥が熱い熱を発し呼吸しているように淡く湿ってくる。直に触れなくても分かるくらいに、もう、濡れてしまっていると思う。

「ねぇ、ないですか？」

尚重ねられる質問に、きゅうっと閉じた瞳をあけることは出来ない。

ないといえばどうだというんだろう。あるといえばどうだというんだろう。

どちらの答えも、物凄く恥ずかしいような気がするし、沈黙は既に肯定しているような気がする。それを分かっていて、私に口にさせようとしているブラックは酷い。

「ひどぃよ」

はぅ……っと唇の端から洩れる吐息を吸い込むように唇が重ねられ「嫌いますか？」意地悪すぎる問い掛けだ。この程度で嫌いだと明言出来る気持ちじゃないことくらい、お互いに嫌というほど分かっている。

私は苦しげに息を吐き、ブラックに触れていた手をベルトに掛ければ、その手をそっと掴まえられ自分の背中の方へと押しやられた。手持ち無沙汰にブラックの服の端を、きゅっと掴み、どうしてと赤い顔のまま見上げると微かに潤んだ瞳を細められる。

「好きです。貴方の全てが……だから、私の大好きなマシロのこともっと深く知りたくないですか？」

知りたくないです。結構です。勘弁してください、やめて。なんていってもブラックは愉悦を浮かべるだけだろう。どの部分がスイッチだったのか分からないけれど、私はブラックのエスっ気に火を点けてしまったようだ。

じわりと身体が汗ばむ。

「っ！　ちょっ、や……っ」

私の片手を掴んだまま、パジャマのズボンに手が滑り込む。びくりと反射的に逃げ出そうとしたら空いている手で固定されてぴくりとも動けない。私はブラックに引かれるまま、つっと下着の中へと導かれる。

濡れていることは自分でも分かっていたけれど、肌から下着が離れる瞬間糸を引いた気がしてきゅっと瞳を閉じた。

ふわふわふわっと身体中の汗腺から汗が噴出して、ぷいっと顔を

背けると追い討ちを掛けるように、ふふっと息声で笑われて首筋に唇を寄せられる。

「凄く濡れてますね、気持ち良い？」

ぬるぬると私の指先を使って秘部を撫で、ぷつりと亀裂の奥へと指を滑らせる。ぞくぞくと背を這い登ってくる官能は、ブラックの手で与えられているのか自分の指先なのか分からない。

「ゃ、、め……」

力ない拒絶の言葉と共に自由になる手でブラックの服を掴み、ずるずると下がり落ちる身体を支える。

ぷつりと、自分の指先に生暖かい感触が絡まりお腹の奥がじんっと疼く。

「マシロの中、暖かいでしょう？」

そう囁かれて、指先に感じる暖かさの意味を知る。

私の指は浅くしか入っていないけれど、ブラックの指はもっと深く入り込んで中でゆっくりと円を描き耳元で囁く。私の身体を掴まえていた手が、パジャマの上から胸に触れ柔らかく揉む。じわじわと体重を掛けられ、私はぐらりと後ろに倒れベッドにぽすりと堕ちた。

「……んな、ことまでしないよ……馬鹿……」

無理な姿勢により手がようやっと解放されて自分の体に密着していた手を抜き去ると、圧し掛かってきたブラックから顔を反らして抗議した。

ブラックは私の喉元にキスをしながら、慣れた手つきで私の上着のボタンを外し素肌に触れる。ゆっくりと与えられる快楽に、息を殺し熱い吐息を漏らす。

「――　……っ、ん、そう、ですね」

「ちょっ」

ぼんやりと熱くなってくる頭の片隅で濡れてしまった手をどうしようかと思っていたら、ブラックが指を絡めてきた。そしてそのまま顔の前まで引き上げてくると、躊躇なくぺろりと私の指を舐める。

思わず慌てて手を引こうとしてもピクリとも動かせない。驚きに赤くなり目を丸くする私をブラックは悦に入った瞳でちらと見たあと、瞼を落としてワザとらしくねっとりと舐め上げる。時折ちらりと見える舌先が婀娜っぽく淫らでいやらしい。

「……ふ、っ、んぅ……ゃ……」

唇の端から洩れる声を必死で抑えるのに、どこまで我慢出来るか正直自信はなかった。

第二十五話：スイッチオン（後書き）

※この続きは裏R指定頁でどうぞ。
下記アドレスです「○○○」部分をパスワードに置き換えて、指定ページにてお楽しみください＾＾

ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ１１．ｐｌａｌａ．ｏｒ．ｊｐ／ｓｓｈａｐｐｙ／ｂｅｅｎ／ｍｕｇｅｎ○○○７．ｈｔｍｌ

※パス請求はブログ『ちょこっと広場』の「パス請求案内」を参照ください。

ｈｔｔｐ：／／ｓｙｏｕｓｅｔｕｎａｒｏｕ．ｓｅｅｓａａ．ｎｅｔ／ａｒｔｉｃｌｅ／１８４６１００８７．ｈｔｍｌ

第二十六話：デート日和

＊＊＊

――　……ドンドンッ！

「起きろーっ、真白、おーきろーっ！」
「ぎゃっ！」

ばさっ！　と無遠慮に布団を剥ぎ取られ、一気に覚醒した。
目の前には相変わらずカルシウム足りてないんじゃないかと思う、我が弟が眉間に深い皺を寄せて、私の大切なお布団を持っている。

「返して」
「そうか、学校へは行かないんだな？」
「行く。でも、あと五分」
「五分程度寝るんだったら、さっさと起きろっ！」

……低血圧という言葉を知らないのだろうか？　私の伸ばした腕を無視し、郁斗は床に布団を放って「さっさと飯食えよ」と部屋を出て行ってしまった。
多少乱暴に扉が閉まったのを見詰めて、ふわぁあ！　と大きな欠伸を一つ。

「あ」

ちゃんとパジャマは着ていた。
隣りも黒猫ちゃんになっている。

形跡はちゃんと片付けてくれたようだ。それも確認せずに寝落ちする私。駄目っ子だなと苦笑してから、仕方なくベッドから抜け出した。

出かける準備を整えて、ぼふんっと鞄を机の上に置いて唸る。
そんな私の顔を覗き込むように、とんっと身軽に机に上がったブラックをちらと見て、もう一度唸った。

「どうかしたのですか？」

可愛らしく黒猫の姿で訪ねてくるブラックに私は首を振ったあと、よしっ！　と決断した。

バッグを開けて、荷物を加える。
私服だ。
なるべく皺になったりしなさそうなものを選んで、一式詰めて一息。

今度はポケットから携帯電話を取り出して、ブラックの前に置く。
ブラックは、ちらとそれを見て、私を見上げた。

「デートしよう」
「はい？」
「デート。私、授業が終わったら直ぐに出るから、ブラックもその頃に出てきて、あ、ああ、学校出る前にそれに連絡するから、」

いってきょとんとしているブラックの前に転がしたケータイをつんっと突く。

「これね、ケータイ電話っていって、こっちで主流になってる通信

手段なの。この画面……」

いいつつ私は机の上にあった、家の電話の子機を掴むと自分のケータイ番号を押す。

数秒待てば、聴きなれた着信音が鳴り、ケータイが光り始める。

ブラックはしみじみとそれを見つつ、私が「鳴ったらここを押すの」と通話ボタンへと導く。

猫手では難しかったらしく――ちょっと苦戦しているのが可愛かった――ブラックは、少し警戒しつつも元の姿に戻って、ボタンを押した。

『もしもし、聞こえる？』

「え、ああ、聞こえます。なくても聞こえますよ？」

まあ、室内だからね。

隣り同士で電話してるからね。うん。

私は肩を落としつつも子機を戻して説明を続けた。

「離れてても聞こえるから。この液晶画面に『公衆電話』って出たら私からだと思って？　学校から電話するから、そうしたら、えーっと」

私はブラックの手の中からケータイを抜き取って、ナビの設定をする。一応家から駅まで。

「この地図が案内してくれるから駅で待ち合わせしよう？」

一度帰宅したほうが確実だけど、時間が勿体無い。

慣れないことをさせるのは可哀想な気がするけど、ブラックなら

大丈夫だよね？

「魔法具的なものですよね？　マニュアルとかあります？」

「えーっと、取り扱い説明書は直ぐに出ないから」

もう一度ケータイを取って簡単マニュアルを表示させる。

「これで大まかなことは分かるよ。他所に掛けたりしなきゃ、適当に弄くって良いからね」

と押し付けた。

ブラックはにこりと楽しそうに笑って「ありがとうございます」とお礼をいってくれる。その笑顔になんだか気恥ずかしくなったのと、階下から「置いていくぞーっ！」という郁斗の怒鳴り声を聞いて、私は慌てて外に飛び出した。

昨日は思いつきで出掛けてしまったけど、今日は行き先もちゃんと決めている。

デートといえば遊園地だろう。

そんなに大きなところではないけれど、近場にあるし、行かない手はない。

私は半日ずーっと時計と睨めっこ。

早く終われ早く終われと念じていた。いっそ、最後の授業は抜け出そうかとも思ったけど、やっぱりそういうのは良くないと自分を戒める。

「テスト勉強もはかどらないし、カラオケでも行かない？」

終業と共に私は鞄を握り、ユキの誘いが掛かったときには、扉に

手を掛けていた。

「ごめん、今日はパス」

普段は走らない廊下も突っ走る。

玄関フロアのところにある唯一の公衆電話のところで急ブレーキを掛けて、自分のケータイを鳴らす。

出るかなぁ、出るよねー……どきどき。

なんか自分の電話に自分で掛けるなんて不思議。

ああでも、紛失したときは一応やるかなぁ？　そんなことを考えていたら、ぷっと通話可能になった音がした。

「ブラック？」

『マシロ？』

ちゃんと出てくれたというこの異常な喜びはなんだろう。

出ろといってあるんだから出るのは当たり前だろうけど、出たよっ！　本当に。

それも少し声が緊張してる。

ああ、きっと耳とかふわんふわんと船を漕いでいるはずだ。今すぐ見たい。目視したいっ見えないけどね？

「私、今から駅に向うからブラックも頑張って来てね？」

『分かりました』

「ブラック、大丈夫？」

『え？　ああ、はい。平気です。迷わないと思いますよ』

なんか凄い可愛い。

こういう通信手段ってあっちではないから新鮮だし、ブラックにも馴染みがないはずだ。私の方が知っていることがあるなんて、ちょっとした優越感。

それになんていうか、受話器越しに聞こえるブラックの声は少しくすぐったい。私、きっと恥ずかしいくらい浮き足立ってると思う。自覚ありです。

私は馬鹿丁寧に受話器を置くと再び駆け出した。

家に寄ってからなんて面倒をすると一時間くらいロスをする。このまま向えば十五分程度だ。

＊＊＊

走って駅まで到着すると先に来ているなんてことないと思うけど、きょろきょろと辺りを見てからまだブラックが来ていないことを確認して、私は——本当は駄目だけど、今日だけ許して——トイレで着替えを済ませて荷物をロッカーに押し込んだ。

髪もちゃんと直したし、服は少し子どもっぽい気がするけど、でも、こっちに戻ったら高校生だったのでそれに合わせたら仕方のない選択になった。

入り口でのんびりとブラックが到着するのを待つ。

この待っている時間というは不思議だ。

絶対にくるのがわかっているのに、本当に来るかなーとか、どきどきと心地良い緊張感がある。そわそわしすぎたら私が不審者だ。

なんとか浮き足立つ気持ちを押し留めて、ブラックが来るだろうなという方向を見詰めた。

「月見里さん？」

まだかなーと背伸びして遠くを見ていたら直ぐ隣りで名前を呼ばれて私は振り向く。見慣れない制服だけど……と、顔を見上げると、びくりと肩を強張らせた。

「やっぱり、月見里さんだ。私服だし、もしかしたら違うかもって思ったから」

思ったなら素通りしてくれれば良いのに、どうしてわざわざ声を掛けるんだろう。

私は少し苛々としながらそっけなく「そうなんだ」と返した。

「凄く久しぶりだよね。俺ずっと会えないかな？　会いたいなって思ってたんだけど」

私は二度と会いたくなかった。

折角学校も一緒じゃなくなったのに、どうして、私に拘るんだろう。

「私、待ち合わせをしているから、用事があるなら早くお願い」

テンションマックスだったのが一気に下降した。

物凄く不機嫌全開で口にした私に目の前の好青年っぽい男子生徒。

名前は大崎トオヤだ。

私の初恋の相手、そして、あっさり浮気されて別れた相手だ。

今更、今更、だ。

第二十七話：別れても好きな人

「うん、ごめん。えっとその、あぁっと、待ち合わせって彼氏？」
「そうだけど、」
「え、あ、そう、なんだ？　どんな人？」

何でそんなことを大崎くんに答えないといけないのか分からない。分からないけど隠すこともない。

「大崎くんより誠実な人だよ」

苦々しくそう答えれば、本当に苦い思いが蘇ってくる。
もう、どうでも良いはずなのに、あのときのショックを受けた映像が脳裏に蘇る。

大嫌いだ。
嫌い、嫌い、嫌い……私はあんなに大好きだったのに、他の人に触れるなんて許せない。自分があんなに嫉妬深いとは思わなかったけど、嫉妬の苦さも、失恋の辛さもあのとき知った。

意図せず、きゅっと唇を引き締める。

「そのことなんだけど、あれは誤解で……」
「嘘だよ。あのあと、」
「再三！　再三、説明しようとしたよっ。月見里さん聞いてくれないし、弟くんに邪魔されて掴らないし、ケータイは繋がらないから家に電話しても、お兄さんに毎回居ないって切られるし、どうしようもなかったんだ」

え……、と、ちょっと初耳。
二人ともそんなこと全然いってなかったのに。

縋るように、胸の問えを吐き出すように口にする大崎くんに私はきょとんとしてしまう。

「キス、してなかったの？」

今更どうでも良いけれど、でも、どうしてだか必死な姿の大崎くんを、勝手な誤解をしたままは可哀想な気がした。
だから、ぽつりと尋ねてしまったのに大崎くんは、益々顔を赤くして「それはっ」といい淀んだ。

なんだ、したのはしたんだね。
じゃあ、関係ない。

理由がどうあれあのときの私が許すはずない。私が謝罪する理由もない。

「で、でも、それは、君が好きで」

白々しい。
私の心は急激に冷えていった。

もう良いから、私に関わらないでといいたくて口を開いたら、私が音を出す前に「マシロ？」と声が掛かった。それと同時に、そっと肩に手が乗っかる。

「すみません、お待たせして。えーっと、ナンパですか？」

私の待ち人はそういって対峙していた大崎くんを見て何か思い出したように「ああ」と溢した。
それと同時に、すぅっとブラックの表情が冷えた気がする。
間違いなくブラックの中で私を傷つけたであろう、彼は“敵”認識なんだろうな。大崎くんにとっては気の毒なことだけど、私はどこか嬉しくてほんのちょっぴり気分が上昇する。
「待ち合わせってこの人？」
そんなこと私に答える義理はないけど最初にそういったのも私だから「そうだよ」と頷いてブラックの腕を取ると「行こう」と引いた。
ブラックは何か物申したそうだったけど、全て今更。こんなことで時間を潰されるほうが嫌だ。
「月見里さんっ」
振り返る義理はない。
ないけど……。
「何？」
無視出来ない私弱い。
繋いでいた手に反射的に力を込めると、同じだけで返してくれる。
その力に勇気を貰って、もう少しだけその場に留まる。
「――　……」
結局大崎くんは何もいわないから私は踵を返した。

付き合いきれない。
何がいいたいのか分からない。

そんな切なげな目をされても……私が、悪いことをしたみたいだ。
私が悪いわけない。どんな理由があのときの大崎くんにあったのか私は知らない。
その理由を聞く気にもなれず痛みだけ抱えて、心が冷えてしまったのはきっとそこまでの関係だったということだ。
私も、まだ、子どもだったし……そんなに他人に優しく出来ないよ。

――……ごめんね。

心の中だけで短く詫びた。

ホームに入れば丁度到着した電車に乗った。
車内は時間帯のせいもあって空いていた。適当な席に腰を降ろして、ふぅ、と一息。

「平気、ですか？」

腕を額に乗っけて、嘆息すればブラックが心配そうな声を掛けてくれる。
そうだ、私はこんなことで気分を落ち込ませている場合じゃない。
折角、デートしようと誘い出したんだし、あんなに楽しみにしてたじゃないか。

「平気だよ」

腕を降ろして、にこりと返せば「そうですか？」とブラックも微笑んでくれる。優しく頬を撫でてくれる手のひらが心地良い。苛々と出ていたとげが簡単に抜け落ちてしまう。

そうだよ。本当に好きなら、こうやって互いに癒しあえる筈だ。そう出来なかったのは大崎くんは私の半身ではなかったということだ。

だって、私の半身は異世界に居たのだから……ここで許し満たされる筈はなかった。

「そんなことより、駅まで迷わなかった？」

「大丈夫ですよ。マシロが貸してくれたケータイを見ましたし、朝見せてくれたときに大体覚えていましたから」

流石としかいいようがないブラックの記憶力に脱帽。

ケータイを私に戻してくれる。それを受け取れば「ああ、そうだ」とブラックは別のポケットから茶封筒を取り出した。

『山梨様』と書かれている。落し物だろうか？

「何これ？　山梨って誰？」

「名前を聞かれたので、咄嗟にヤマナシと名乗ってしまいました。マシロの名前を借りました。中身は今日のデートで使ってください。物価とか良く分からないので、マシロに任せます」

といってにっこり。

え？　と思って封筒の中を見たら一万円入ってた。どうしたの？と訪ねればにこにこ。

「午前中、家の近くのカフェでバイト募集中という張り紙を見つけたのでやってみました」

「半日でこの額って多すぎないっ？！」

バイト経験は少ないから分からないけど、時給二千円とかないだろう。カフェで。

「また都合が付けば来て欲しいから、色をつけておくといわれました」

色多すぎ……でも、近所のカフェといえばあそこだろうから……。

「ウエイターしたの？」

「はい、簡単で助かりました。あ、ああ、でも、もっと朗らかにといわれたのは厳しかったです」

最終的には気にしなくて良いといってもらえましたけど。って、どんだけ引きつった顔をしたんだろう。というか、朗らかなブラック……有り得ない。

アルファが見たらお腹抱えて笑い転げること必至だ。

それは、そうと、

「制服着たの？　あの白のワイシャツに黒のベストで黒のパンツにエプロン……」

ずいっと身を乗り出せば、その勢いに押されてブラックが「え、ええ」と頷く。

「そっかー。じゃあ、またやる機会があったら声掛けて」

「はい、構いませんけど……」

「是非とも仕事ぶりを見てみたいから」

下がりきったテンションも今完全に戻った。

是非ともそのギャルソン風のブラックに会いたい。

絶対格好良いに決まっている。

店も話題になるだろう。

ふふっと自然と笑みが零れてしまった。それと同時にブラックも、ふっと笑みを溢す。見上げれば目が合って益々笑みを深められた。

は、恥ずかしいな。

ぽぅっと頬が赤くなるのを隠すように、顔を逸らして、こほんっと咳払い。

そして、手にしていた封筒をブラックへと押し返す。

「これは、ブラックが手にしたものなんだから、ブラックが使わないと駄目だよ」

ですが、と渋るブラックに私も頑固だから、うんとはいわない。

私も、一応お年玉の使い先とかあまりなかったから、そこそこの貯えはあるのです。

「こっちに居る間くらい、私も頼りにされたいんだよ」

そういえば、ブラックはそれ以上食い下がらなかった。

ふふー。

遊園地も楽しみ。

ギャルソンなブラックも楽しみー。

予定外はあったけど、出ることにして良かった。

私の思考回路は誰が思うよりも単純だ。

＊＊＊

最寄り駅に着けば専用のシャトルバスが出ている。
それに乗れば遊園地は直ぐそこだ。バスを降りて早々、軽快な音楽で迎え入れられる。

「人が多いですね」

正面ゲートを潜れば、平日だけど、そこそこの人出はある。

「あ、っと、ごめん。ここじゃないほうが良かったかな」

人ごみが苦手だということを考慮するのを忘れていた。
再び私がしょぼんとすると、ブラックはくすくすと笑みを溢す。
そして、私の手を取ると「行きましょう」と引いてくれた。

「別に人ごみが苦手というわけでもないですよ？　縁がなかっただけです。ほら、種屋にこういう場所は不似合いでしょう？」

……確かに、葬儀屋に結婚式場くらい相反するかもしれない。
そういう意味なら、ここでブラックは種屋ではないのだから、気にする必要はない。

誰もブラックのことを知りはしない。
異世界っていう環境はブラックにとってとても自由な場所だなと痛感した。

私は何とかやる気を取り戻して「じゃあ、これ」と入り口で受け取ったフリーパスと、案内のパンフレットをブラックに渡した。
蛇腹状になったパンフレットの隅っこをブラックに持ってもらって、私はぱらぱらと引き出していく。
そんなに大きなテーマパークではないから、珍しいものや凄いものは少ないけど、一通りメジャーなアトラクションは揃っていると思う。
偉そうにいっても実は私も常連というわけではない。

「この辺のが、乗り物、うーんっと遊具？　でね」

のんびりと足を進めながら、園内の説明をする。
興味深そうにパンフレットに視線を落とし、一々頷いてくれるブラックに嬉しくなった。

「何から行こうかなぁ。あんまり時間がないから……とりあえず、」

第二十八話：そんな人だと思わなかった

＊＊＊

「――　……大丈夫ですか？」
「ごめん、平気」

調子に乗りすぎて、絶叫系を網羅してしまった。
空いていたのだ、普段より。

そのお陰でどのアトラクションもスムーズに乗ることが出来た。
待ち時間〇〇分とかなくて、わーいと思ったのに、あの待ち時間も必要なのかもしれない。
直下型のジェットコースターに乗って、トロッコ型のコースターにも乗って、がんがん左右に振ってくれる海賊船にも乗った。ブラックの「もう一度良いですか？」につられて、最低二回ずつは乗った。
そして、膝が完全に笑ってしまった。ふらふら。

「どうぞ」
「……ありがと」

冷たいお茶を頬に当てられて力なく受け取った。因みにブラックはケロッとしている。きっと三半規管も猫並なのだ。

「次は、もうちょっと大人し目のやつにしよう」
「大丈夫ですか？」
「少し休んだら大丈夫、どれが良い？」

ちょこんっと私の隣に座ったブラックは、アトラクションの一覧に視線を走らせている。
こくんっとお茶を流し込んで盗み見ると、楽しそうだ。尻尾とか目視出来たらきっと好奇に揺れてる。そんなことを思っていたら、くんくんっと腕を引かれた。

「マシロ、マシロ」
「うん？」
「次これが良いです。これも絶叫系というやつですか？」

本当に、楽しそうですね？
ブラックの意外な一面を見てしまったような気がする。

これです。と指差す場所を見れば、ゴーカートだ。それならきっと大丈夫。

「良いよ、行こう」

お茶に蓋をして、バッグに滑り込ませて立ち上がった。
ひょいと、肩に掛けたはずのバッグを抜き取られ「え？」と見上げると「持ちますよ」と微笑まれる。

「大丈夫だよ」
「まだあまり顔色良くないですよ？　少しくらい助けたい、マシロの力になりたいです」

そんな風にいわれたら断れない。
私はブラックからバッグを取り返すことを諦めた。

「ありがとう」

普段からお礼はその都度ちゃんと口にするようにしているつもりだけど、なんだか気恥ずかしくて小声になってしまう。変だな……今更。

空を仰げば茜色に染まっていた。次で最後かなぁ。

よし！　行こう。と気分を新たにブラックの腕を引っ張る。

「ええと、こっちがアクセル。進むほうですね？　こっちが、ブレーキ……」

「私が運転するよ」

「やってみたいです」

にこにこにこ……。

なんでこんなにノリノリなんだ。なぜ今尻尾と耳がないんだ。

予想以上のブラックのノリにちょっと押される。

まあ、子どもでも運転出来るおもちゃみたいなものだから、ブラックなら難なくこなせると思うけど。

思ったけど間違いだったーっ！

「恐いぃぃっ！　スピード出しすぎっ！！　前にぶつかるーっ！　振り落とされるー」

「ふふ、大げさですね。大丈夫ですよ。しがみ付いててくださいね」

ハンドル握ったら性格変わる系の人だと思わなかったー！

ここのカートは時間制で十五分間自由にコースを走れるタイプなんだけど、絶叫系と大差なかった。

――……がっくり。

私は再びベンチと仲良くなった。

ブラックはとても満足そうだ。

それならそれで良いけど、スピード出し過ぎで怒られた。そして、なんであんなにスピードが出たのか不思議で、他のものも暴走してはいけないからと、急遽チェックが始まり、暫らくアトラクションが休止してしまう騒ぎになった。

ごめんなさい。

本当ごめんなさい。この猫のせいです。

当の本人はもう終わりなのかとちょっぴり残念そうとか有り得ない。

騒ぎになるのは分かるよ。あんなのゴーカートのスピードじゃない。

頬に当たる風が痛いとかない。

はふー、と一息吐いていると、ぽつぽつと明かりが灯り始めた。

ナイトタイムに入るんだろうな。帰りの時間も考えたらそろそろ戻らないといけない。

「マシロ、あの大きなやつはゆっくりそうじゃないですか？」

ブラックが指差したのは観覧車だ。

うん。

最後には良いかもしれない。ゆっくりだし。暴走するようなこともないだろうしねっ！

差し出された手を取って私は立ち上がった。そのとき丁度通りがかった女の子たちの声が耳に入る。

「ちょ、見て見て、あの人格好良いよね。モデルさんとかなのかな？」

「えー、でも見たことないよね。雑誌とかに載ってたら絶対覚えてるって」

遠巻きに聞こえる声の殆どを無視しているけど、全然気にならないわけじゃない。ブラック、格好良いもんね。人目を引くのは当たり前だと思う。

「じゃあ、一緒に居るのって」

「マネージャーとか？」

クスクス笑いが胸に刺さる。

気にしない。

気にしてない。

ここでは私なんて“白月の姫”なんて付加価値もないから、普通以下かもしれない。急激に気分が下降して靴先から目を離せなくなってしまった。

なでなでなで

「っ」

ふわりと頭に乗っかった手が私の頭を撫でていく。

大きな手。

髪を梳いていく長い指が心地良い……って、なんで私が今、ブラックになでなでしてもらわないといけないんだ。
私はブラックの手は好きだけど、こういう、もろ慰めてますというされかたは好きじゃない。

むぅっと眉を寄せ顔を上げると、私の頭を撫でていた手は、つっと私の頬へ滑り降りそっと優しく撫でていく。
くすぐったくて恥ずかしい。
咄嗟にどう反応して良いのか戸惑っている私にブラックが顔を寄せ、ちゅっと頬に口付けた。

「っちょ！」
「行きましょう？」

慌てて頬を押さえたけど、絶対見られてる！
今度は恥ずかしくて顔をあげられない。

そんな私のことも周りもお構いなしというように、ブラックは私の手を引き、それにつられて私はふらりと足を進めた。一歩二歩と、踏み出すごとに足並みが早くなり、そのままブラックに手を引かれてパーク内を小走りに進んだ。

「今なら丁度天辺あたりで花火が上がりますよ。是非見てくださいね」

と、にっこり声を掛けられる。
ばたんっと外から施錠され小さな密室がゆっくり動き出した。

やっと人目を逃れたと胸を撫で下ろし、一息。楽しかったのと同じだけ心地良い疲労感が襲ってくる。

「ありがとうございます」

すとんっと私の隣に座った重みで少しだけ個内が揺れた。

「んー？　何でお礼？」
「凄く楽しかったです」
「私も楽しかったよ？」

なんとなく居心地が良い意味で悪いというか、今更ながら気恥ずかしいというか、私は「あ」と外を指す。丁度四分の一くらいまで来たところ。

遠くに海が見えた。薄暗くて空と海との境目が曖昧だ。

「海に近いのですね？」
「う、うん……」

後ろから覆い被さるように私の指差した方を見るブラックに胸が高鳴る。なんだか私一人舞い上がってどきどきしているようで、居た堪れない。

赤くなる顔治まってくれれば良いのに、どきどきと同じだけ身体が熱くなる。

「おや？　なんだかあちらは賑やかそうですね？」

ほら、あっち、と促され視線を下に下げれば、きっとナイトパレードが始まったのだろう。少し遠くの音に聞こえるけれど、明滅するライト。光が踊っている。ああ、それで、花火、だったんだなぁ。と思う。

「ごめん。パレード見損ねちゃったね？」

折角なのにと申し訳なくなってそう告げれば、ブラックは「構いませんよ」と髪に唇を寄せる。

「パレードなら、王都でも見られますし……上から見る機会は少ないですから返って良かったかも知れませんよ？」

「まあ、確かに」

「それに、少し二人きりにもなりたかった」

「――　……それは反則」

後ろから、ぎゅっと抱き締めて、すりっと頬を寄せてくるブラックに私は僅かに眉を寄せる。硝子越しのブラックの視線が、どうして？　と訪ねてくる。

「ここは景色を楽しむ場所、だよ」

「見てますよ」

「そう、だけど、さ……」

ごにょごにょと何をいっても説得力がない。背中で感じるブラックの鼓動が心地良い。ほう、と気持ちが凪ぎいてくる。

誰に何をいわれても、どちらの世界でも、この人と一緒なら、まあ、良いか。なんて気になってくるから不思議だ。

「ブラック、また、どこか行こうか？」

いって振り仰げば目が合って笑いあう。

そうですね。と同意され心躍る。

次はどこに行こう。

沢山見せてあげたいところがある、沢山……でも、どのくらいの時間、それが許されるのだろう。

ふと心に影が差すと。どーんっと大きな音がして夜空が七色に輝いた。

「マシロの瞳がキラキラしています」

「花火、見たほうが良いよ」

苦笑すれば「こちらが良いです」と影が落ちてきた。

ブラック越しに見る花火はとても綺麗で、私は珍しく目を閉じることも忘れて魅入っていた。

第二十九話：やっぱりっ？！

帰りの電車の中ではうとうととしてしまい、ブラックに起こしてもらうまで気が付かなかった。

「――　……どうかしましたか？」

駅で制服に着替えなおして、家の前に到着すれば、辺りはもう真っ暗になっていた。

近くの公園でブラックには猫に戻ってもらい私の腕の中で大人しくしている。

「え？　ああ、いやぁ……怒られるかなぁ？　と思って覚悟を決めてたの」

「覚悟が居るようなことをさせてしまったんですね」

すみません。と謝られて苦笑する。

ブラックは悪くない。というか、私の提案なのだからそのくらいは覚悟の上。ただ、私はお兄ちゃんに甘やかされているから怒られ慣れていないため、怒られるには心構えが必要だ。

「ふふ、くすぐったい。大丈夫だよ。帰ろう」

「――　……何家の前で猫といちゃついてんの？」

たしっと私の鎖骨あたりに前足をおいてぺろりと頬を舐めたブラックに笑いを零していると背後から声を掛けられて、びくりと肩をこわばらせる。

振り返るまでもなく、声の主は

「郁斗。こんな時間まで何やってるの！　テストでしょう？」
「……それ、そのまんま真白に返しても良い？」
お姉ちゃんモードで怒ったのに、あっさり折られた。
その通りですから、お姉ちゃんはそれ以上いいません。むっとしたまま黙ったら、変な顔と笑われた。本当に失礼だ。
「ほら、入るぞ」
ぽすぽすと背中を押されて私は門扉を潜る。まあ、怒られる道連れが出来て良かった。
玄関先で靴を脱ぐと、並べるためにブラックを廊下に下ろす。あれ？　お母さんも戻ってるんだ、あと見慣れないのもあるな……。
そんなことを思いつつ、何度いっても郁は脱ぎっぱなしなので、郁の分もそろえてあげていると
「母さんっ！」
臣兄の大きな声が聞こえた。
私と郁斗はその声に顔を見合わせた。声はリビングの方からだ。
私が立ち上がれば二人で頷いて、そぉっとリビングへ続くドアへ近づく。
「母さん何を考えているんだ。うちには年頃の女の子だっているんだよっ！」
「もう、大丈夫よ！　王子様はとても紳士的だから、真白に手を出したりしないわ。それに、ホームステイだと思えば」
「思えないよっ！　僕は反対するからねっ」
臣兄があんな風に声を荒げていることはとても珍しい。

私と郁斗は怪訝な表情を消すことも出来ずに、静かにリビングの扉を開いた。足元でブラックがすいっと先に入ってその動きを止めた。

そして、私も止まった。

その原因の矛先は……私たちの視線の先に、王子様が居たのだ。

いや、王様だ。

――……――

「なんで、どうしてどういう経緯で、こうなるの？」

結局お兄ちゃんも、お母さんには推し負けて了承せざるを得なくなった。郁斗は複雑そうな顔をしたものの「いつものことだろ」と即座に諦めモードに入った。

「マシロの拾い物ぐせは、母親譲りだったのですね」

「僕は落ちてないよ、失礼だな」

お母さんは押し付けるだけ押し付けて、電話で呼び出しを受けて再び出社。郁は話し途中で、飽きて自室に戻ってしまった。

お兄ちゃんが部屋の準備をするからと二階の空いていた部屋を片付け始めたところで、ずるずると王陛下を私の部屋へと引きずりこんだ。

「なんで、エミルまでここに来るの？」

「こちらに来る暇があるなら挙式でも上げておけば良いのに」

私の当然の問い掛けの間にブラックがしらっと口を挟む。それと同時にエミルの頬にぱぁっと朱がさした。

「上げないよっ！」
「えっ?!　そんな予定があったのっ?!」

あんな一件まであったのだから、本気で身を固める決意をしていたとしてもおかしくはない。けれど、そんな話があったなら一言くらい相談、ではなくても、話くらいしてくれても良いのに、ちょっと水臭い。

「ないよっ！」

突然張り上げたエミルの声にびくりと肩を強張らせる。エミルは直ぐそれに気がついて慌てて謝罪してくれる。

「あ、っと大きな声でごめん。本当に、ないよ?」
「う、うん」

私はなんとか頷いたけど、ブラックはまだエミルに絡んでいる。
ぐだぐだだ。
いつものことだけど、ぐだぐだだ。
ブラックなんて耳と尻尾をしまうのを忘れるくらい苛々している。
来るとき揉めたといっていたのはきっとエミルと揉めていたんだろうなと痛感。

「本当、遅いんだよ二人とも。何のんびり過ごしているの?」
「う、ごめん。まだ、終われるきっかけが見つからなくて」

はぁと深い溜息のあとそういったエミルに私も肩を落とす。何より真剣に心配してくれているだろうエミルに突っ込まれると、遊びまくっていた手前居た堪れない。そんな私の頭をふわふわと撫でて

「マシロは良いよ」と微笑む。

「だからといって王陛下まで来なくとも」

「来るよ。放っておくと居座るつもりだと困るから。あんな中途半端な状態では種も取り出せない。種屋不在のままそう長くあの世界は持たない」

「勝手に出せば良いでしょう」

「君だけならそうするけどねっ」

なんだか物凄く恐い会話がなされているような気がする。

私が、怯えているのが分かったのか、エミルはちらと私を見て苦笑すると、ふぅと嘆息して肩を竦めた。

「――　……兎に角、僕も命運を共にする」

きっ！　と真っ直ぐブラックを見据えるエミルに、ブラックは「来たんだから仕方ないでしょう」と呆れたように口にして流してしまった。

そして、エミルは本当に行き当たりばったり。というか、私たちを迎えに来ただけだからと備えなく、言葉も文字も通じなかった。

一応、うちではホームステイ。

外国人――異世界人ですが――ということになっていたから、それを特に問題視されることもなく、流石夢っ。私の第二外国語選択だと、通訳に立っても特に疑問視されなかった。

何事にも、実は一番慎重である郁斗だけが気になるようだったけど、もともとが揉め事を嫌うタイプだったため、害はないと判断したのか口出しをするようなこともなかった。

第三十話：黒猫とカフェと陛下と私

――……RRR……RRR……

放課後。

穏やかに数日が過ぎ、テストもあと一日何とかしようといいあったところで、聴きなれない電子音が響いた。

真白のじゃない？　とユキにいわれるまで自分のケータイだと気がつかなかった。

ポケットを探れば本当に私のだ。

この間ブラックにケータイ貸したとき弄ったのかな？　と思い至って私は二人に先に帰るようにいって教室の隅っこでもう一度ディスプレイを確認する。

見たことのない番号。

いつもなら、知らない番号の電話には出ない。臣兄にもキツクそういわれている。でも、しつこく鳴るそれになんとなくの予感がして私は電話に出た。

「はい」

『マシロ？』

恐る恐る出た電話先の声は聞き間違えるはずはない。ブラックだ。

とくんっと心臓が跳ねて気分が高揚する。

「どうしたの？　これ、誰のケータイ？」

『マスターのケータイです。この間、またバイトに入ったら知らせて欲しいといっていたのを思い出したので借りました』

よく私のケータイ番号を暗記していたなーと感心するところかな？
ケータイ越しに聞こえてくるブラックの声が耳にくすぐったい。
私きっと今、顔が赤くなっている気がする。だって、凄くどきどきする。

『――　……？　マシロ、マシロ聞いていますか？』
「……え、あ！　う、うん。聞いてる聞いてる！」

慌ててそういった私にブラックは「声が上ずってますよ」とくすくす笑う。なぜだ。なぜ私の方がこちらの住人だったはずなのに、ブラックの方が馴染んでいる感があるんだろう。

「ご、ごめん。なんか緊張しちゃって」
『私にですか？』
「いや、なんか、その、恥ずかしくて、っていや、なんでもないっ！」
『ふふ、マシロは可愛いですね』
「っ！　そんなことよりっ！　用事っ！　用事があったんでしょっ」

愉快そうなブラックの声を無理矢理切った。他人の電話で長話は拙い。
ブラックはまだ笑いが零れていたようだけど「そうでした」と話を戻してくれた。はぁ、もう心臓に悪い。調子狂うなぁ……。

『あのですね。もう、上がって良い時間になっているんですけど、マシロ来ますか？　来るならそれまでこのまま居させてもらいます』
「え、あ、行く行く！　待ってて直ぐ行くから」
『ゆっくりで良いですよ。危ないといけないので、気をつけて』

穏やかにそう告げられて、ほわほわと暖かい気持ちになる。
分かった！　と勢いで見えないのに頷いて窓ガラスに頭をぶつけてしまった。
痛い。私、天パり過ぎだ。自己反省。ぶつけたおでこを擦りながらケータイを仕舞い込んで、誰も居なくなった教室を出て行った。

「マシロ」

学校を出て直ぐくらいにそう声を掛けられ、声の主を探せばエミルだ。
私が足を止めれば足早に駆け寄って隣りに並んだ。そしてそのまま帰り道を歩きながら話し掛ける。

「どこ行ってたの？」
「当てもなくうろうろ、かな？」
「大丈夫？　どこか用事があれば一緒するよ？」

言葉が分からないようなところで、ふらふらと出歩くのは怖いのではないかと思ったのだけど、エミルは何でもないようににこりと微笑んだ。

「僕のここでの用事はマシロを連れ帰ることくらいだよ」
「――　……ご、ごめん。どうやって戻れば良いのか……」

しょぼしょぼと告げれば、エミルは穏やかに微笑んで「気にしないで、でも忘れないで」と告げてくれる。

「ところで、マシロは今帰り？　それとも、どこか行くところだったの？」

「私は今からブラックのところへ行こうと思って」

いったあとで、もしかして、しまったかなぁ？　と思ったけど遅かった。

にっこり「僕も行く」の一言で

「使用人な感じも似合ってるよね」

こうなってしまった。

二人が大喧嘩している風な姿は見たことないけれど、体感温度は常に下降気味だと思う。

「どうして、エミルが一緒なのですか？」

「え、えーっと、途中で会ったんだよ。それで、そのー、成り行きで」

若干申し訳ない気持ちになって、ぽつぽつと告げてブラックを見上げると、超威圧的にエミルを見ていた。見ていたけど、なんかそれがちょっとストイックな感じがして

「格好良い……」

「え？」

思わず零してしまった本音にエミルとブラックが同時に私を見た。私は慌てて口を押さえたけど遅い。地獄耳コンビだから確実に聴かれているだろう。

「えと、その、何で眼鏡？」

「ああ、愛想が作れないなら掛けるようにいわれたので……伊達ですよ？　視力は悪くないです」

そ、そーなんだー……と、平然を装っているつもりなのに、じわじわじわっと頬が熱くなってくる。マシロ？　と不思議そうに名を呼ばれて、びくりっと肩を跳ね上げてわたわたしちゃう。

「あ、と、その、ケーキセットください」

ごにょごにょと俯いて告げれば、エミルも「紅茶、アールグレイで……」と無難に頼んでくれた。

正面に座ったエミルの顔も見られず、持ってきてもらったお水のグラスの淵を指でなぞる。なんで、眼鏡一つで制服一つでこんなにわたわたしないといけないんだ。

ブラックが美形なのは今始まったことじゃないし、って、分かってるんだけどっ！　破壊力増し過ぎです。

心臓に悪いよ。

はふーっと長嘆息した私にエミルが、我慢出来ないとばかりにふふっと噴出した。

「――　……なんていうか、女の子してるね？」

くすりという笑いを重ねたエミルにそう呟かれ「え？」と顔をあげると、なんだか物凄く楽しそうな顔をされていて、私はまた顔を伏せた。ううう。耳まで熱い。

「少し、時間が戻っているからかなぁ……それとも、ここはやっぱりマシロが安心出来る場所なのかな」

特に問い掛けているわけではないようだ。

エミルはぽつぽつとそう呟いて、窓の外を見て通り過ぎていく人たちを眺めていた。私は、そんなエミルを見つめて不思議な気持ち

になる。エミルは、何を見ているんだろう？　そんな私の視線に気がついたのか、向き直ったエミルはさらりと告げる。

「素のマシロって、物凄く女の子らしいんだね」
「そ、それは激しく貶されてる？」
「褒めてるよ。思い切り。だって凄く可愛い」

むぅ。

あんな風にいわれたあとに、そんな風にいわれてもあまり褒められている気はしない。でも一応
「ありがとう」といっておいたけど、むくれっ面が治ってないから、エミルにぷにっとほっぺを押さえられてしまった。

しかも、蕩けるような優しい笑顔で。

「いい加減、諦めたらどうですか？　こんなところまで追い掛けて来ただけでも、鬱陶しいというのに」

意図せず沸いてしまった甘い雰囲気を掻き消すように、冷たい声でそう告げたブラックは、苛々とした声色とは対照的に、丁寧に私の前にティーポットとカップ、そして、可愛らしいラズベリーのタルトを置いた。

同じように、エミルの前にもセッティングしてから、私に向き直って、にっこりと微笑み「一口食べてみてください」と勧められる。

私は視界の隅で、エミルが私のカップに紅茶を注いでくれているのを見ながら、さくりとタルトにフォークを刺して切り分けると一口ぱくり。

「美味しい。それになんだか、食べ慣れた感じが……」

近いだけにあまり来染めているカフェではないから、味に馴染みがあるというわけではないのだけど。疑問に思って首を傾げればブラックが嬉しそうに答えてくれる。

「私が作ったんです。マシロが来るだろうと思ったので、マスターにお願いして」

「ああ、だからか……うん。凄く美味しい」

重ねた私にブラックは、良かった。と笑みを零して「そのままゆっくり食べていてくださいね」と機嫌良くその場を立ち去った。

「僕も一口欲しい」

「え？　ああ、良いよ」

はい。といつもの調子で、一口大に切ったタルトをフォークに乗っけてエミルの口に運んでしまった。店には他のお客さんも居た。当然のように女性客の方が多くて、なんかどこからか分からないけど飛んでくる視線が痛い。そのまま机に突っ伏したくなる程の大打撃だ。

「でも、ブラックが誰かの下で働くなんて凄い違和感。有り得ないよね」

王様は微塵も周りの視線は気にならないのだろう。

慣れって凄い。

優雅に紅茶を口に運びながらそう呟いたエミルに「そう、かなぁ？」と首を傾げる。ブラックはあれでいて順応力があるようだから、色んなことにそんなに抵抗ないと思う。

私の持った疑問にエミルは気が付いたのか、ふぅと短く嘆息。

「マシロのため。以外の原動力なんて彼にはないだろうけど……本当、思い切りが良過ぎだよ」

意味が分からなくて問い返そうとしたけど、丁度着替えて済んだブラックが私の隣りに腰を降ろしたので、その話はあっさりとどこかへ流れてしまった。

第三十一話：人魚姫を求めて（1）

「そういえば、エミルさっき何を見ていたの？」

三人で仲良く（？）店を出て、ふと訪ねるとエミルは少しきょろきょろとしてから、車道で目を留めた。

「――　……もしかして、車？」

何気なくそう問質せばエミルは僅かに頬を染めて、こくんっと頷く。

「私は、あの大きいクルマに先日乗せてもらいましたよ」

えへんっとどこか得意気にバスを指差したブラックに、エミルは素直に驚いていた。

何か微妙にずれたところで会話が成されているような感じが、とても微笑ましい。私が、シル・メシアに落ちたばかりのときもこんな感じだったのかな？　ふふっと零れた笑いを隠すことなく、私は「乗ってみる？」とエミルの袖を引いた。

私はエミルの返答を待たずに、車道側に立つときょろきょろ。タクシーを掴まえた。

「そんなに遠くに行く時間ないけど、遊びに行こうか？」

と、二人を誘った。

車内でこの二人に挟まれるのは微妙に居た堪れない感があるのだけど、エミルは流れていく景色を物凄く珍しそうに見ていた。

本当は山のように質問がありそうだ。
聞かれても私には答えられっこないような、難しい問い掛けばかりだろうけど。

向った先は百貨店。
買い物というわけではなくて、そこの最上階に屋内型水族館がこの夏にオープンしていた。

私は運転手のおじさんに聞いて、そのことを「そういえば」と思い出した。
夏はブラックを失った寂しさでそんなところで遊ぶ心の余裕などなかったから、すっかり忘れてた。そのときの気持ちが、ふと私の心を縛ると苦しくなる。
胸の痛みに僅かに眉を寄せると、ふわりと大きな手が私の手を包み込んだ。
顔を上げればブラックがにこりと微笑んでくれる。私の気持ちを察してくれたことにも嬉しく、きゅっと力の篭った手に胸を撫でおろした。
きりきりとした胸の痛みが嘘のように引いていくのが心地良く感じる。

今の私は大丈夫。
一人じゃない。

二人ともシル・メシアでは立場のある人だから、自由にしているように見えても色々ルールがあるのだろう。そのルールから解放されているからか、雰囲気がいつもより解放的？　というか、より自由な感じがする。
百貨店に入っただけでも嬉しそうだ。

タクシーの運転手さんには妙な勘繰りをされて「大変そうだね、頑張って」なんて何を頑張れというのか良く分からない応援をされてしまったけど、ま、良いや。

「ふわ、なんだか薄暗いね？」

恐くない？　と聞いてくれるエミルが微笑ましいとかいったら駄目かな？　施設エリアに入れば照明は最小限に絞られ、ヒーリング系の音楽が流れている。

「平気だよ、植物園じゃないんだし、ここは海の生き物を見て廻るところ。それだけだから、恐いとかないよ」

と、そんなことよりも入館して早々なんだけれども。

「二人ともう少し離れてください」

「え」

「どうして、二人で声を揃えるかな？　あのね、両サイドから手を取られると、物凄く歩き難いの」

「え、いつもは繋いで」

この二人実は仲が良いのだろうか？　普段そんな風に見えないけど、さっきから同じタイミングで口を開く。

「どうして、貴方がいつも繋いでいるのですか？」

「繋ぎたいから」

揉めないで。

黙ってても目立つから、貴方たちは滅茶苦茶目立つからっ！

私は通路の隅っこには寄っていたものの、あわあわと周りを見渡した。そんなに沢山の人で賑わっているわけではないけれど、通行人はもちろん見ていく。

恥ずかしい。

ふわふわっと体温が上昇してこんな季節に汗ばむ気がした。

「そ、そんなに繋ぎたいなら二人でどーぞ。私は大丈夫だから」

居た堪れなくて先に歩き出せば、わたわたと追い掛けてきてくれる。そんな二人をちらと確認してから、私はチケットの半券と共に受け取ったパンフレットを開いた。

ここのメインは壁一面の大型の水槽と、途中にあるトンネル型の水槽らしい。トンネルの通路からは空飛ぶペンギンが拝めるとか。ちょっと楽しみ。

「この辺は見たことあるよね」

小さな水槽で泳ぐ煌びやかな熱帯魚を覗き込んで、エミルが声を掛けてくれた。

「あ、可愛い。グッピーだね……っていっても珍しい種類らしくて、ええっと……」

私は水槽の隣りに書いてある説明書きを丁寧に読み上げた。

エミルは途中で「もう良いよ」ととめることをしなかったから、提供先まで読んでしまった。

次の水槽では、面倒臭そうながらも私がエミルにかまけるのが面白くないのか、ブラックが説明書きを読み上げる。それでも最後ま

で聞いていたから、ここに素直に興味を持って楽しんでくれているのだろうことが分かって私は嬉しかった。
興味深そうに水槽を覗くエミルを見たあと、ちらりとブラックを見上げれば、苦笑して小さく肩を竦められた。

「ブラックはそんなに楽しくない？」
「いえ、マシロと居られるならどこであっても楽しいです。エミルほどは珍しいとは思いませんけど、王都は内陸側に広がりますから、海との接点は少ない、生活拠点からあまり出られないから目新しいというのも分かりますけどね」

そういって、エミルがあんまり素直に魅入っているからブラックもエミルを急きたてるようなことはしなかった。

「こんな風に生息しているなんて実物見たの初めて……って、あ、ごめん」

少し折っていた腰を伸ばして振り返ったエミルは、ふと、自分が盛り上がり過ぎていることに気が付いたのか、薄暗い室内でも分かるくらいふわりと頬を染めた。ちょっと可愛い。

「良いよ。気に入ってくれたみたいで良かった。この奥もっと凄いみたいだよ、行こう」

くいくいとエミルの袖を引きブラックの背を押して狭い通路を抜ける。

第三十二話：人魚姫を求めて（2）

「――　……っ」

通路を抜けると空間（ホール）が広がり、中央の円柱形の水槽にはイワシの群れが延々と泳ぎ続けていた。照明に反射する様は実はイワシって綺麗な魚だったんだなーと改めて実感する。

そして、見上げても尚高く感じる天井。

その先の壁は全面ガラス張りになっていて、奥へ奥へとどこまでも続いているように見えた。実際は水槽だからそんなに奥まではないと思うけれど、極端に広く見せるような造りになっているのだろう。

「凄い……海がある」

歩み寄って、手を伸ばそうとしたエミルの手を掴まえた。

多分、こういうところは触っちゃ駄目だと思う。私を見て首を傾げたエミルに「触っちゃ駄目だよ」と微笑めば、小さな声で「ごめん」と聞こえた。

謝るようなことではないけれど、なんだかエミルが小さな子どものように思えて微笑ましい。

――　……　――

「お疲れ様です」

「――　……私あんなに説明書き読んだの初めてだよ」

巨大水槽の中で、次々に横切る魚の説明書きを順に読み上げた。

エミルは、もう大丈夫といってくれないから、殆ど網羅したと思

う。ふらふらと、円柱形の水槽の傍に設けてあった長椅子に腰掛けると、ブラックがタイミング良くお茶を渡してくれた。
受け取ってきょろきょろすると室内の隅っこに設けてある自販機だ。あそこにあるってことはここで飲んでも大丈夫ってことだよね。
私は、お礼をいって蓋を開けると、話し過ぎて乾いてしまっていた喉を潤した。

エミルは近くで見て楽しみ、ブラックは少し離れたところから全体像を眺めてそれなりに満足していたようだ。なんとなくそんなところにも性格が出るなと思うと面白い。

「遊園地も楽しかったですけど、ここも良いですね。なんとなく落ち着きます」

スィーと大きなエイが水槽の中を優雅に泳いでいく。
のどかだ。

「水のある場所って癒されるんじゃないかな？　もっと時間が合ったら遠くの大きな水族館に行っても良いんだけど」
「沢山あるんですか？」

手持ち無沙汰になっていたお茶を手の中から抜き取って、残っていたのを傾けながら問い掛けたブラックに、ちょっぴり恥ずかしい気持ちが湧いてくるのを押し殺して頷いた。

「うん、あると思うよ。大体シル・メシアが少なすぎるんだよ。癒し系というより恐怖スポットの方が多いし」
「まあ、楽しむという観点よりは、危険なものを管理しているというほうが、意味的には合っているので生命の危機を感じるようなものが多いかもしれないですね」

物騒なことをいいながらもブラックは楽しそうだ。物騒なことや危険なことを、そうとは感じないだけの強さを持っているからの余裕だろうなと思う。

そのあとも暫らく堪能しているエミルを眺めたあと「エミル、そろそろ次行こうよ？」と声を掛けたら凄い質問が飛んできた。

「ずっと探してたんだけど、人魚は居ないんだね？」

「え？」

声を裏返した私とは対照的にブラックはしなっと「当然です」と答える。

「あんな危険なものを放ったら、他の魚が一匹も残りませんよ」

「あー……そうだよね。残念」

シル・メシアの人魚ってどんなですかっ？！

私はまだお目にかかったことがないんですけどっ！　そんな危険生物でしたっけ？

確かに尾ひれは貴重な薬剤になり、ウロコは宝飾品にも使われることは知っているから、居るのは知ってるけど……。

「この世界に人魚は居ません」

「！！」

その一言の方に二人とも衝撃を受けているようだった。

「じゃあ、半漁人くらいなら、あれはまだ大人しいよね？」

「そのくらいなら居るのではないですか？」
「……居ませんからっ！」

ジェネレーションギャップ、とはいわないよね。こういう世界観のギャップってなんていうんだろう？　あちらに長く住んだつもりだけど、未確認生物はまだまだ多そうだということはよく分かった。

そして私はトンネル通路で空飛ぶペンギンを堪能した。

可愛い。
短い手（羽ですか？）を張って、すぃーって泳いでいく姿が可愛過ぎる。それにキラキラと光を反射させる水面も、ゆらりと揺らぐ陰を落とすトンネル内も幻想的でとても素敵だ。

「あれは見たことないよね？」
「不恰好な鳥ですね？」
「あれが羽なら飛ぶのかな？」
「無理じゃないですか？　あれから魔力的なものは感じませんし、それを抜きにして飛ぶとはとても……」
「だよねぇ」

異世界人コンビはこの際放っておく。

「ん」

私の癒しタイムを邪魔したのはメールだった。
音は消していても流石にポケットでぶるぶるされれば気が付く。
私はそれを確認しつつ、トンネルを抜けた。抜けた先は甲殻類？のゾーンになり、食べれるかなぁ？　と思わず考えてしまうものが並んでいる。

メールは臣兄からだった。

『真白今どこ？　エミル君が居ないんだけど、迷子になってたらどうしよう』

というものだ。

時間を確認すれば、もう夕方。流石にのんびりし過ぎてしまった。お兄ちゃんはエミルと一つ屋根の下を反対したとしても、元々が優しいので、ちゃんとそれなりに気に掛けてくれる。

それを知っているはずなのに、浮かれて連絡を怠ってしまった私には反省点があるなと、自己反省しつつ、エミルは一緒だから大丈夫だとメールを返信した。そして、ちらと目に留まったカニを見て

「カニ鍋食べたいとかいったら駄目かな？」

と心の声が漏れてしまい前を歩いていた二人の時間を止めてしまった。

ごめんねー、女の子は夢ないよね。

こういうとき情緒的になれないよね。

美味しそうとは思わないよ。目の前の大きすぎるカニを見てもね。

でも、ちょっとカニといえば食材的なイメージが……。

帰りは、心配した臣兄が車で迎えに来てくれた。もちろんそのときは、ブラックは猫の姿に戻っていて臣兄に「よく入れてもらえたね？」と感心されてしまった。

私の膝の上で丸くなっていたブラックは、若干複雑そうな表情をしたものの、ふぅと息を吐きぽすっと頭を落とした。

第三十三話：女友達

＊＊＊

そして、数日何事もなく過ぎてしまった。

「今日でテストも最後だし、何か食べに行こうか？」

というユキの提案を私は断りきれずに、放課後、私たちは連れ立って街に出た。

エミルが家で大人しくしてくれているか、とか、ブラックが良い子で丸くなってくれているか、とか――どちらも期待薄だ――気になることがないわけじゃなくて気が気じゃなかったけれど、こうして、三人で出かけるのも久しぶりだ。

私たちはカフェを梯子して、新発売のケーキと、評判のワッフルを堪能したあと、別腹能力を活かし、車売りのクレープで締め括ることにした。

最初はもちろん、テストの話もしたもののサチの「終わったものは仕方ない」という発言で直ぐに消え失せた。そのあとは、いつも通りユキの恋愛話に雪崩れ込むわけで……。

「ありがとうございました」

にこりと気の良さそうなお兄さんが、最後の私にクレープを手渡してくれたところで、三人で少しずつ食べながら近場の公園を目指した。食べ歩きは駄目だとアルファに怒っていたことを思い出し、とても懐かしく感じる。

シル・メシアに帰ったら何をしようかな？

――……帰ったら……。

シル・メシアが私の帰る場所だ。

早く、帰らないと……。

はぁ、と溜息を落とすと二人に早くと手招きされた。慌てて駆け寄ろうと走り出すと、ふと目に付く。

「げ」

エミルとブラックが歩いている。

仲良く、か、どうかは分からないし何をいっているのかも良く分からないけど、シル・メシアでも滅多に見られない光景だ。

「何々、どうしたの？」

「ちょ、モデルさんとか芸能人かな？　なんかこの辺で撮影あるって話あったっけ？」

「た、ただの観光客じゃないかなーははは……」

私は乗り出してきそうだった二人を、元の公園まで引きずってとりあえず座らせた。あの二人、悪目立ちする。でも今注意しに走っていくことも出来ず、私はぐっと堪えた。

とりあえず、ブラックたちに見付からなくて良かった。見付かったらほぼ確実に寄ってくる。そうすると二人への説明が面倒臭すぎる。

今の、私に出来ることといえば、二人が公共の場で妙なことしませんように。神に祈るばかりだ。

「んー、なんも情報ないなー」

本気で芸能関係だと思ったのか、ケータイを弄くっていたユキが残念そうに溢す。

情報なんてあるはずない。芸能人どころか地球人ですらない。

仕方ないか、と諦めてぱちんっとケータイを閉じたユキは、ポケットに滑り込ませながら手にしたクレープを頬張る。

本当にあの二人は一体何を話していたんだろう？　険悪な雰囲気とまでは分からなかったけど、こちらに来たときエミルはぴりぴりしていた。

私にすら隠すことが出来ない空気だったんだからそれなりだろうと思う。そして、私に当たることのないエミルがぶつかっていくとしたら、やはりそれはブラックのところで……。

いい争いしないという方が無理だ。

二人のことが気になりすぎて、ユキやサチの話は上の空、どこかそわそわしつつ、急いでクレープを掻き込む。味も多分美味しいのだと思うけど、何せ満腹のところに押し込んでいるのもあって、ちょっと微妙だった。

「ねぇ、真白聞いてる？」

「――　……えっ？！　ごめん、聞いてなかった」

何度か名前を呼ばれていたのだろう。

ユキに肩を叩かれてびくりと顔を上げると、そんなにがっつかなくてもと笑われてしまった。クリームついてるよ、と反対隣りに座っていたサチが、私の握り締めていたハンカチを抜き取って、ぐいっと拭き取ってくれる。

私……どこにいっても同じ様なことを周りにさせてしまっている

ような気がする。

「だから、さ」

あわあわしている私に、ユキが何かいい辛そうに口を開いた。
何でもずけずけ口にするユキにしては珍しい。

「あのね、今更なんだけど、さ……覚えてる？　寺脇のこと」
「覚えてるも何も、今クラスメイトじゃん。そのくらいの記憶力はあるよ。テストは全滅だったけど、ね」

いって苦笑した私に、ユキも表情を崩してくれたけれど、それは一瞬で直ぐに先ほどと同じように難しい表情になる。

「あー、そっちじゃなくてさ」

何か察したのか当てがあるのか、サチが続きを促した。
他に彼についての心当たりといえば、苦いものしかない。正直思い出したくもないし、この二人にその話題に触れて欲しくもない。

私の腹は真っ黒だ。

寄ってしまった眉間に気がついたのか、ユキは「ごめんねっ！」と唐突に謝った。は？　と目を見開く私に、ユキは口早に続ける。

「本当、今更過ぎるんだけど、真白、居なくなっちゃったり、そのあとばたばたしたりで、謝る機会がなくて、ずっとずっと気になってたのっ！」
「え、えーっとなんだろう？」

ふわぁっと顔が熱くなってくるのが分かる。
出来れば触れて欲しくない。
なかったことにされるのも辛いと思ったけれど、ここでまたそんなことを掘り返されて二人に距離を取られたり、また、あんな風にいわれたりするのは嫌だ。
そう思ったらぎゅっと胸が痛くなった。

「真白が居なかったときのことを、掘り返すのは、結構酷かったからパスなんだけど、さ……寺脇も酷くて……その、そのとき、色々、話、したんだよね……それで、その……なんていうかさ……自分の軽さを思い知ったというか、その、本当、ごめん。真白のこと嫌いになってた」

がつんっと殴られた気分だ。

知ってるよ、知ってた。私、嫌われてしまってたんだよね。
二人に……。

分かってたけど、今、ぶつけられる台詞だとは思わなかった。
もう、忘れてくれたのだと、なしになったのだと……それなのに……きゅっと唇を噛み締めると、じわりと血の味がした。

そんな私に気が付くこともなく、ほりほりと頭の後ろに回した手で頭を掻いて地面を見詰め、そう口にするユキに重ねる形でサチも「あたしも」と重ねる。

「真白は、可愛いし、無条件で人に好かれるから、少しずるいと思ってて……ユキに同調しちゃった……。でも、居なくなって、沢山真白のことを考える時間が出来て、なんて馬鹿だったんだろうって

思って……。あたし、気がつかないところで、真白に沢山フォローされてて、ズルイなんて、お門違いだった」

「え。ちょ、」

泣きたいのはこっちなのに、気がついたら二人とも泣いていた。あわあわきょろきょろ。幸い誰も居ない。ハンカチは一枚しかないし、さっきクリームつけちゃったし、どうしよう。

「ごめんっ！　ハンカチないっ！」

どうしようもなくて、宣言したら、二人の時間を止めてしまった。

「ふ、ふふ。何？　ハンカチいるの？　あたし、タオルならあるけど」

「わたしもあるよ。使う？」

ごしごしと、二人して自分の目を擦りつつ、バッグからタオルを引っ張り出し私の膝に載せてくれる。

「二人が使ってください」

がくりと項垂れてそれぞれに押し付ける。

二人ともくつくつと肩を揺らして笑い始めた。泣いたり笑ったり忙しい。タオルに顔を埋める二人を交互に見て、一息……これは、夢、だもんね……私の都合の良いように、きっと出来ているんだろう。

でも、それでも、やっぱり嬉しい。

二人は、いうタイミングを逃していただけで、私のことを分かってくれていた。分かろうとしてくれていた。そのためにあの時間が

必要で……私には……

ふ、と、私は行き着いた。
ごしごしと顔を拭っている二人に「あのね……」と切り出す。

「――　……私、一生に一度の恋。見つけたよ」

赤く染まる空。
このあと直ぐに暗くなってしまう。

そんな高い空を仰いでぽつりと口にする。

「だと思った」

そういったのはユキだ。

「どうしてそれが一生ものだって分かるの？」

不思議そうなのはサチだった。私はそれぞれの言葉に笑みを溢し
「んーっ」と唸る。

「分かるんだよ」

そう、分かるのだ。
まだまだ迷走中のユキは、その形に憧れを、その言葉の意味すら
必要としないサチには幻を……それぞれが抱いている。
そして、私はそれが形になった。

「どんな人なの？」
「――　……猫みたいな人」

「美人ってこと？　気まぐれってこと？」
「私にしか懐かないってこと、かなぁ？　よく分からないけど、兎に角猫みたい」
見た目がという部分は含んだ笑いにとどめて伏せた。
「だから……気にしないで」
私は弾みをつけて立ち上がった。ぱんぱんっとスカートの後ろを直し、二人と向き合う。
「私、気にしてないから……二人が私の居ない間に、私のこと、考えてくれていたんだって、分かって、嬉しかった。どうでも良い、その場だけの付き合いなのかと、少しひねくれてた」
私のほうこそ、ごめん。というべきだ。
「また、私が居なくなっても……」
「居なくなるのっ？！」
「どうしてっ！」
二人とも過剰に反応して立ち上がる。
ぼすっと鈍い音を立てて鞄が地面に落ちてしまったが二人とも気にしない。真っ直ぐに問い掛けた答えをただ待っている。
私の胸は痛み悲鳴を上げているのに、どうしてだか暖かな気持ちになっていた。
「帰らなくちゃいけない場所があるの。二人のことも、大好きだけど……でも、私を必要としてて……私が必要としてて……私に、必要なところなの」

私はシル・メシアが好きだ。あの理不尽な世界が好きだ。
そこで生を全うしないことは分かってる。それでも私はあの世界が好きだ。そこで暮らす人たちが好きだ。
みんなが好き。
ブラックが……大好き。

帰りたいと、私が思う場所は、いつの間にか変わってしまっていた。

「……まあ、一生に一度の恋の相手が、相手じゃ、わたしたちに分はないよね」
「行くんじゃなくて、帰るんなら、仕方ないよね」

それぞれに口にしてくれる台詞と、切ない笑みに胸が苦しくなる。
私は、やっぱりこの二人のことも大好きだ。
自分ではない他人を、私を、心から分かろうと努力してくれた二人が、とても愛しい。

第三十四話：貴女の居る場所

そして、私は暖かい気持ちのまま、足早に帰路に着いた。
その途中で、忘れていた二人の姿を発見。
仕方ないよ。
エミルには髪の毛が目立つからと、帽子を勧めたけど、それを隠した程度で王子様オーラが消えるわけじゃないし、長身美形の二人が並んでいるだけで目立つのだ。

見付けたくなくても見付けてしまう。

そして、本人たちは人に見られるということに慣れてしまっているので、全然気にならないようで、周りはどうでも良いらしい。
幸い時間も関係し人通りも少なく、ちらちらと通行人が見ていく程度で収まっている。

「それだから、最初から僕が来るっていったんだよ」
「私はマシロに何かを無理強いするつもりはありません」
「……そう、だよね。ブラックにとったら、こっちの方が好都合だよね。ここには僕らの居場所はない。柵（しがらみ）もない。君みたいな根無し草なら、どこでだってやっていける。でも……」
「そんなくだらないことは良いとして、ルカは大人しくしているのですか？」

苦々しく口にしていたエミルの話をあっさりとぶち切ったブラックは、面倒臭そうに傍のガードレールに体重を預けて、かつこつと地面を蹴る。

「ルカには、別の役割を与えたから大人しいよ」

「ほぅ、役割？」
「僕はそういうのが得意。なんだよね？　口八丁手八丁。先遣隊に合流してもらった。もちろん、蒼月教団には内緒だから、ばれたら恐いよねー、大事な大事な種屋候補生を勝手に使ったら、そりゃ、怒られるよね」
ちらと、ブラックを見て口角を上げ「今正に種屋さん引退しそうだしね」いって、鼻で笑う。
ブラックはそれには何の反応も見せずに「ああ、そうですか」と軽口で返すだけだ。
「兎に角、私はマシロを無理に連れ帰るような無粋しません」
そういうことで、と、勝手に締め括ったブラックは、預けた体重をぽんっと戻し「先に戻ります」とあっさりエミルを置いて帰り道へと去っていってしまった。
その姿が角を曲がるまで見送ったエミルは「はあ」と嘆息し、振り返ると「マシロ？」と声を掛ける。
「――　……っと、あー、ごめん」
別に隠れるつもりも盗み聞きするつもりもなかったけど、ひょっこり出て行くタイミングを見失ったのだ。いつからエミルが気が付いていたのかは分からないけど、顔を出した私にエミルはにこりと微笑んでおいでおいでと手招きする。
「ブラックも気付いてたよね」
「んー、どうかな？　ブラック、今は随分力が削られてるから、気付いていないかも知れないね。僕は、ほら、もともとそういうの魔力的な干渉ないからさ、殆どいつも通り」

いってにこりと微笑み「あれ？」とエミルは私に手を伸ばすと「血が滲んでるよ？」そして唇を軽く拭う。は、恥ずかしいから公衆の面前でそういうことをさらりとしないでくださいっ。

私は、ぱぁっと頬が朱色に染まるのを隠すように「平気平気。大丈夫」といってふるふると首を降り顔を逸らす。

こほんっと短く咳払いして、仕切りなおした……確かに、ここは色々違うとブラックも最初に溢していた。猫の姿を取ることも、本当は無理を強いているところなのかもしれない。

「僕らも、戻ろうか？」

「あ、うん」

曖昧に私が頷けば「道々、話してあげるよ」といつものように手を取られた。

「ルカに、何させてるの？」

「え、ああ。ルカが新種を発見したんだけど、そのことは、聞いたかな？　マシロの店にあったアレなんだけど、その成果を生かして、色々手を貸してもらうことにしたんだよ。眠りに落ちた民、全員をこうして迎えに行くことなんて到底無理だからね。ちゃんと、対処法を掴んでおかないと……繁殖を食い止める方法とか、気付け薬の生成法とか、まだまだ、突き止めないといけないことも多い。その手伝いをしてもらっているんだ」

にこにことエミルは王様らしいことを口にする。

それにと加えて続けてくれる。

「そのくらいさせておかないと、あの手この手で、ブラックの息の

根をと狙って邪魔なんだよね。正直なところ面倒……子どもって真っ直ぐ過ぎて……大抵はアルファが相手してくれるんだけど、通常業務に差し支えるからって、僕の命令なのに苦情が来るんだよ。騎士団の総管轄はキサキだから余計にきびきびと、ね」

だから仕方なく。と泣き言を加えたエミルに苦笑した。

そんな私をエミルはいつもの穏やかな瞳で見つめて微笑む。

「僕は最後まで反対したよ。ブラックがこちらに来ることを」

「――　……え」

聞きたいことではあったけれど、エミルからあっさりと告げられたことに驚いた。

それがありありと顔に出ていたのだろう、エミルは苦笑して「マシロは、ブラックに来て欲しかったかもしれないけど」と前置いて、きゅっと握った手に力を込める。

「ブラックはマシロに何も強要しないからね。彼では駄目だと思った、彼は適任じゃない」

「でもブラックは」

「迎えに来たといった？」

そう問われて思い返す。ブラックは……

「追い掛けてきたって、いってたと思う」

ぽつりとそう溢せば、エミルはふふっとお上品な笑いを溢す。そして、苦々しく付け加える。

「そうだと思った。僕らはとても強く、マシロに戻って欲しいと願

っているのに、ブラックの願いだけは違う。だから、彼をここに来させるのは嫌だったんだ」

「え」

「ブラックは、マシロが居ればその場所がどこでも良いんだよ。夢なのか現実なのか曖昧なこの世界でも、シル・メシアでも関係ない。マシロが望めば、帰還を勧めることなく望み通り、この世界を取ると思う。そんな危ない橋、僕は絶対に嫌だったんだ」

エミルの読みは確かだ。

確かにブラックは既にそれに近いことを仄めかしている。それに、さっき、エミルがブラックに告げていたように、ブラックにとってはこちらの方が自由だ。種屋という柵もなく獣族であるという縛りもない。その上、一緒に居られるなら……と、ブラックがここを選ぶのも必至。

ブラックは常に私しか見ていない。

「僕はね。ブラックほど優しくはないんだよ。マシロを自由にさせてあげられない。僕は絶対にマシロを連れ帰りたい。僕はあの世界でマシロを沢山傷つけたと思う。これからも、辛い思いをさせると思う。少しの間だけど、こちらでのマシロを見ていて思ったよ。ここは美しいときが満ちた世界だ」

繋いでいる手にぎゅっと力が込められる。それは痛いくらいだ。

「でも、やっぱりシル・メシアに戻って欲しい。僕にもあの世界にも、マシロが必要だから」

それが、もし、君の願いではなかったとしても……そう続けたエミルが泣いてしまうんじゃないかと思って私は焦ってエミルの腕を抱き締めた。

強く、強く。
言葉以上のものが伝わるようにしっかりと。

「……大丈夫だよ。私、帰るから……ここにずっと居座るつもりはないから……」

ここは私にとって都合の良い世界だ。きっと夢なのだからそうなのだと思う。
けれど、そこでずっとぬるま湯に浸かっていたいかといえば、ノーだ。私の帰りを、家族と同じように待ってくれている人たちが居る。
無茶して、迎えに来てしまう人が居る。
傷付くのは怖い。
それでも、傷付いたときみんながいてくれるなら、きっと私はそれを乗り越えられる。

「大体、私がここに居座り続けて、エミルまで捉えてたら、私、ラウ先生に酷い目に合わされるような気がする」
「……あー、僕今絶賛ストライキ中だから。戻ったらラウ怒ってるだろうなぁ」

――……本当に無茶しぃだ。

がっくりと肩を落としたあと、顔を見合わせた私たちはくすくすと笑いあった。

第三十五話：弟は姉に弄られるために存在する

「っと、取り込み中みたいだね」

角を曲がるとエミルにぐっと腕を引かれた。

え？　とその先を見ればこともあろうかっ！　郁斗がブラックを捕まえている。

なんで、どうして？

面識ないのに、面識ない人に喧嘩売るような真似をするような子に育てた覚えはない。慌てて追いつこうとしたら、エミルに一歩も進ませてもらえなかった。

「僕、いってるの意味分からないけど、声聞こえる？」

「え……」

いわれて耳を澄ませば、あまり大きな声で話しているふうでもないけれど、どちらも聞き慣れた声だ。耳に馴染んだ声は、他の音よりよく聞こえると思う。

ちらとエミルを見て、こくんと頷く。

エミルは、それなら聞いておいたほうが良いんじゃない？　と耳打ちし私は不安な気持ちを抑えて、逡巡したあと大人しく立ち止まった。

「――　……んだ。そんな真白がテスト期間中に遊び歩くなんて、しかも、あんたみたいな男と」

う。

どうやらこの間家の前で会うより先から見られていたようだ。あ

の時は、郁斗だってふらふらしてたってことなのに、自分のことは棚上げなんて可愛くないっ。

「否定はしませんけど……」

「真白と……姉貴とどういう関係？」

郁斗めっ。姉の交友関係にまで口出そうというのか！

「いってもかまいませんけど、それが何か関係ありますか？」

「あるよ。かなり……あんた、姉貴をどこへ連れて行こうっていうんだ？」

厳しい顔つきでそう問い掛ける郁斗のあんな顔、私は見たことない。

「私はどこへも連れて行きませんよ。ただ、待っているだけです」

郁斗の苛々をあっさりと受け流すように、ブラックの声は静かだ。静かに事実だけを述べる。

「姉貴は馬鹿だから、人を疑ったりしないし、誰かのためとかいったら、すぐにでも、ほいほいどこにでも着いていくようなやつなんだ」

そんなに気軽に私は着いていったりしない。失礼だ。むすっと眉を寄せた私にエミルがどうしたの？　という風に首を傾げる。

「それを唆（そそのか）して一体どこに連れて行くつもりだ。俺、聞いたんだよ。帰るってなんだよ。姉貴の帰る場所はここだ。他のどこでもない。どこにも連れて行かせない」

「重ねますけれど、私はマシロをどこにも連れ去ったりしませんよ。大丈夫です。もし、マシロが動くなら、それは彼女自身の意思です。そのときは、どうかマシロの話を最後まで、聞いてあげてください」

ブラックの落ち着いた態度に、郁斗は毒気を抜かれたようだ。「聞くも、何も……」と溢したときには、自分の迷いを露わにしてしまっていた。

「貴方が思うよりも、マシロはずっとしっかりしていますし、自分を持っています。ただ、流されるだけの人物ではない」

「あんたに、真白の何が分かるんだよ」

「……分かりますよ。私はもう何度もマシロに助けられているのですから」

いって微笑んだブラックは、ちらとこちらを見た。見付かってる。明らかに見付かってるよ？　出て行くかどうか迷った。

「真白は、馬鹿でお人よしで……」

「自身の能力以上のことを平気で抱え込む。だから、周りは自然と手を貸さないといけなくなる……」

くっ、二人とも変なところで意気投合した。

はあ、と嘆息して「物凄く貶されている気がする」とぼやけば、エミルは「まさか、そんなこと有り得ないよ」と微笑んでくれるけれど、それ以外に取りようはないと思う。私ががっくりと肩を落として居ることなんてお構いなしにブラックは、しなっと続ける。

「もう、あれは一種の才能です。マシロでなくては誰も従わなかった。マシロでなくては、何も、変わらなかったんです」

――　……とくんっ

と胸の奥がざわついた。

私でなくては、何も変わらなかった……私で、良かったの？　本当に……。

私は可愛くないから、もし、シル・メシアに落ちたのが自分でなくても良かったのではないかと心のどこかで思っていた。世界に白月の姫が必要であったとしても、それが自分でなくても問題なく同じような展開になっただろうと思った。

だから、余計に必死になっていた部分もある。

自分の価値を見つけたくて。存在意義を確立したくて。

「――　……私、シル・メシアが好きだよ」

ぽつと独り言のように溢せば対面していたエミルには「ありがとう」といって貰える。

何にどう仕舞いをつけたのかは分からないけれど、こちらに足早に歩いてきた郁斗と目が合った。郁斗は派手に肩を跳ね上げて、目にも明らかに飛びのいた。

「ひっ！　真白!!　に、留学生」

「コニチハ、イクトサン」

……エミル。グッジョブ。

こんなのが王様な国が良いよ。本当。

通りを覗けばブラックの姿はもうなかった。私には気が付いていたと思うけれど、先に家に戻ったのだろう。

そのまま、じゃあ、そういうことで！　と逃げ出そうとをした郁斗の首根っこをジャンピングアタックで確保した。根っこの部分は優しい子だから、私がずるずる引っ張られるようなことはない。私が引っ張る側です。

「帰るよ」

「え、いや、俺は今日用事が」

「ないね。姉の交友関係にまでずかずか入り込んでくる、迷惑千万な弟に予定なんて存在しないね。私がルールです」

帰ります。ぐいぐいと私は足を前に出した。

直ぐに郁斗が重くなるので「自分で歩きなさいよ」と勝手もいう。

大丈夫。

これも姉特権だ。

「なっ！　盗み聞きなんて悪趣味だぞ。お、俺はただ間抜けな姉を心配してだなっ！」

「ふーん」

間抜け、ね。

郁斗は昔から勘が良くて、良いことも悪いことも、私や臣兄より先に察することが出来ていた。因みにかなり関係ないけど、郁斗の天気予報はテレビの天気予報よりもずっと正確に的中する。

そんな風に色んなことに過敏に反応するから、本当は誰よりも心配性で臆病だ。悪態や強気な言動はその裏返し。私もお兄ちゃんも分かってるから、嫌な気分にはならない。寧ろがっつり可愛がってあげる。

「姉をストーキングしておいてよくいうよね」

「偶然だよっ！　偶然っ！！」

ほらね？　必死な郁斗はやっぱり可愛い。

第三十六話：昔ながらの光景

私は、もう分かってしまった。
気がついてしまったから、私はもうシル・メシアに戻るだろう。
――……きっと、これまで以上に痛い思いをするだろうあの世界に……。

身を裂くように辛くて、目を覚ましたことを一瞬でも失敗だったと思うこともあるかもしれない。それは後悔の欠片かもしれない。
でも……それでもやっぱり私は、あの世界を選ぶ。今の私にはそれしかないから。

「私、少しは料理上手になったでしょ？」

殆ど無理矢理、郁斗にも夕飯の支度を手伝わせた。臣兄はいわなくても隣りに立ってくれる。エミルも手伝うといってくれそうだったけれど、私の様子を察して任せてくれた。

「まあ、吃驚するような調味料を投入しようとするクセはなくなったよな」
「あー……いわれてみればそうだね。真白は新たな挑戦が大好きだから」
「……二人とも」

私の料理はそんなに酷くない。

「郁斗だって、私と変わったもんじゃないでしょ」
「いやいやいや、俺は真白みたいに炒め物にまでマヨネーズ投下し

た上に、七味入れてからし入れて……なんて恐ろしい真似しねーし。最終的に砂糖とか入れたときには、何がしたいのか分からなかった」

なぜ郁斗は涙目なのだ。失礼極まりない。

あれは単に、微妙な辛さだったから甘くしたらどうかと思っただけだから、そんなに変なことじゃない。

「驚くほど不味くなかったじゃん」

「真白は悪食だよね。おかしいよね。普通に美味しいもの食べてもらってるつもりなのに」

臣兄もちょっと失礼だ。それに、大の大人が三人台所に入ると狭い。

でも……楽しい。

ずっと、もっと小さかった頃は、こうやって三人並んでご飯の準備をしていた。お父さんもお母さんも忙しかったけど、三人で居れば寂しくなかった。

私は、郁斗も臣兄も大好きだ。

だけど……、じわりと視界が緩くなる。

「にゃぁう」

「っ！　うわ、ブラック」

ふわりと足首に掛かった暖かな毛皮に肩を強張らせる。そんな私を見上げて、ブラックは猫らしく額を足に摺り寄せて尻尾を絡ませた。

「大丈夫だよ。私は平気だから」

心配そうなブラックの仕草に私が笑みを溢すと、臣兄も同じことを思ったのか

「なんだかずっと一緒に居たみたいに懐いてるね。気持ちが通じてるみたいだ」

と苦笑する。

言葉もキチンと通じてますけどね？　心の中だけでこっそり微笑む。

「どういうわけか、真白にだけな」

「ふふ。可愛いよね、猫」

「臣兄、猫好きだったっけ？」

作業再開。私は足元にブラックの暖かさを感じながら続けた。

「あれ、覚えてないのか？　臣のヤツ、昔捨て猫拾ってきてさー、オヤジに滅茶苦茶怒られて、ずーっと部屋で泣いてんの。俺あのときまだ臣と同じ部屋だったからさー、うるさいのなんのって」

「郁斗だって泣いてたよ。父さんに『兄ちゃんをいじめるなっ！』ってつっかかっていって返り討ちにあって。兄ちゃん、ごめぇぇんって、すっごいすっごい泣いてた……結局、猫さんは駄目だったけどねぇ……」

「ええっ？！　うそっ！　思い出せない」

そんなことがあったら覚えてそうなのに私ってば薄情だ。本当なら絶対に郁が面白おかしいことになっていただろう。姉として心に留めておかねば損をした気にすらなる。

それに、臣兄がそんなに泣いてるところなんて覚えがない。

「仕方ないよ、あのとき真白遅く掛かった水疱瘡のせいで隔離されてたんだよ」
「あ、それなら覚えてる。私二人より少し遅かったから、結構酷くて……」
「あれ以来、二目と見られない顔に」
――　……ごすっ
「なってないよっ！　失礼なっ」
「包丁の柄使うなっ！　殺す気か」
「刃じゃないんだから良しとしなさいよ」
苦々しく「ったく……横暴だ」と溢した郁斗に私と臣兄は笑わずにはいられなかった。
楽しい。
凄く、凄く楽しい。
私はこの二人が大好きで、かけがえなく大切で私が胸を張って自慢できる兄と弟だ。
――　……　――
今日は片付けまで郁斗にも手伝わせた。
本当はもっと拘束したかったのに、俺は狩りに行く。と部屋に篭ってしまった。部屋で出来る狩りって何やってるんだろう。ゲームかな？
私はエミルがお風呂に入っている間に、珈琲を淹れて、臣兄の部屋を訪問した。こんこんっと部屋をノックするといつも通り「どーぞ」と柔らかい声が聞こえる。

「珈琲淹れたんだけど」

と手にしていたお盆を軽く持ち上げた。

臣兄は「ありがとう」と微笑むと机に向っていたのをやめて、私のためにドアを支え招き入れてくれる。

足元を変わらずちょろちょろしていたブラックがするりと入りきったところで、ドアは静かに閉められる。でも、ブラックが一緒だったからだろう。扉は完全に閉められることはなくて、押したら簡単に開くように、ほんの少しだけ開けられていた。

ブラックは私の傍を離れることはないだろうけど、本当の猫は気まぐれだ。そんな臣兄の小さな気遣いがとても心地良い。

臣兄の部屋は、とてもシンプルだ。

ベッド・机・本棚にローテーブル。必要最小限のものしか置かれていない。

温度的な話だけではなくて、どことなくひんやりとした冷たい印象を与える。意味もなくものが増えてしまう私とは違って、どこか潔癖な印象を与える。

私はローテーブルにお盆を載せて、机の椅子をくるりと回して座った臣兄にマグカップを一つ渡す。私も一つ取り上げて、臣兄に近いベッドの隅っこに腰掛ける。

その隣りにひょいと飛び上がったブラックは、私の太もも辺りに背を寄せて丸くなった。

そっと背を撫でれば、ぷるるっと耳を震わせて腕の間に頭を沈める。

ふぅっとマグカップの湯気を吹けばゆるりと立ち上っていた白い湯気がふわっと拡散した。

君が居ない（1）

マシロが抜け、ブラックが抜け、ついにはエミルまで欠いてしまったシル・メシアは静まり返っていた。
穏やかとは違う何か、底の方で不安定に揺れている大きな災厄の前触れのような静けさに近いと、皆肌で感じていた。

なかったものを得。
得たものを失くす。

そのことがこれほどの影響力をもつとは、本人が一番予想していないだろう。

「退屈です。暇です。カナイさん攻撃しても良いですか？」
「――　……何をどうとってそういう流れになるんだよ」

王宮療病棟内の一室にて本日も同じ会話が成されていて。

「お前忙しいんだろ？　早く職務に戻れよ。怠慢してると、キサキ様直々にお迎えに来るぞ」
「いーなぁ、カナイさんは暇で。というか、ずーっとここに居られてー。まぁ、今エミルさんの顔見ると軽い殺意が沸くのでずっとは勘弁ですけど」

アルファはそういって、ちょこんっと可愛らしく肩を竦めるが口にしていることは物騒極まりない。しかし特にそれを咎めることもなく、カナイは部屋の隅っこを陣取ったまま「拗ねるなよ」と苦笑する。

「拗ねてませんよっ！　僕も一緒に行きたかったんですっ。それなのに君命なんて使われたら、僕動けないじゃないですか」

ぶーぶー頬を膨らませてぼやく。

それは拗ねているということだろうと、カナイは呆れて続ける言葉を失くした。

確かに口付きこそ親しいが、アルファにとってエミルの発言は絶対。

それを違えることは決してない。それが自分の意思に反しようと絶対だ。それは騎士素養の一部でもあり、骨の髄まで叩き込まれていることだ。

「んで、その君命の監視はちゃんとやってるのか？」

「やってますよー……ルカは研究棟に居ます。不機嫌極まりない調子で、シゼが自分の領域の一部を貸してますからね。僕が張り付いてたら、研究棟が幾つあっても足りなくなるから出て行けと、シゼに追い出されたんです」

ルカはアルファに対してとても好戦的だ。

一応、新種研究に着手しているものの、アルファが傍にいるとむずむずする。犬猿の仲。なのだろう。切っ先を向けたくて仕方ない。

そして、この二人がぶつかろうものなら、周りが多大なる迷惑を被る。

いくら元通りに戻すことが出来るといっても、そのために人員を割き時間を割くことは出来ればしないほうが良い。だから、壊さないに越したことはないのだ。

「にしてもカナイさん、変わらず顔色悪いですね」

「……当たり前だろう。お前今俺にどれだけの負荷がかかってると

思ってるんだよ。この三・五人分の生命量を一人でカバーしろって、有り得ない……」

「じゃあ、助手でもつければ良いじゃないですか。一人で、なんていってないでしょ」

愚痴たカナイにアルファはあっけらかんと答える。しかしカナイは気難しい表情をしてゆっくりと口にする。

「……お前なら出来るか？」

その真摯な問いに、アルファは逡巡することもなく「嫌ですね」とあっさり答えた。

「他人は信用出来ない。どっちでも良いのは若干一名居るけど、それでもなくした責任は持てないから、出来れば自分で補います」

「なら分かるだろ」

「やっだなー。僕はカナイさんの心配もしてあげてるんじゃないですか」

ぽすぽすとカナイの頭を叩いて、カナイが肘をついていたテーブルに沈めた。

丁度そのタイミングで部屋の扉が叩かれた。返事を待つことなく扉を開けて入ってきたのはシゼだ。シゼは「こんなところで暇を潰していたんですか？」とアルファを見つけて苦笑した。

「ねぇ、シゼ……カナイさんってこれのせいでやつれてるんじゃないの？」

魔力系の回復薬として毎日シゼの運んでくる薬湯は、味に飽きが来ないようにという中途半端な気遣いから、いつも珍妙なものにな

っていた。
効果のほどは絶大でありながらも非常に残念な点だ。
「失礼なことをいわないでください。これはちゃんと製法を守って作ったものです。効果はきちんとあります」
だから、カナイさんは生きているでしょう？　と問われては答えようがない。
カナイの引きつった笑いから察するに味はいまいち。と……。
シゼから受け取った薬湯と睨めっこしていたカナイは、意を決してきゅっと目を閉じ一息に呷った。それと同時に再び扉が叩かれる。
「はいはーい」
それにアルファは陽気に答えて扉を開いた。
その先に居たのは一般使用人だ。このあたりの担当なのかどうかは知らないが、王宮使用人が療病棟をうろうろしているのはちょっと違う。
ということは……
「宰相閣下より、ご用命です」
やっぱりと、アルファは嘆息した。
「聞いて拙い人居ないから話して」
面倒臭そうにアルファに促されて使用人は深々と一礼したあと用件を告げた。

「マリル教会のレニ司祭及び、蒼月教団のレムミラス殿から現在の二つ月について詳説願いたいとのことです」

告げられた内容に、アルファはげんなりといった雰囲気で素直に「うんざり」と零す。

「うんざりするほど説明してないから、うるさいんだろう？　にしてもあいつらの情報網ってどうなってんだろうなぁ、こっちシャットダウンしてるのに」

「無駄ですよ。あっちにはハクアが居るし、あれ鼻が利きますからね。マシロちゃんがドコにいるかくらいすぐに突き止めてきますって、ルカはルカでレムミラスに報告義務がある。あいつ一辺倒だから……」

ぶつぶついいつつ、ちらと並べられた寝台に横たわる三人を見て、はぁ、と嘆息。

「マリル教会には僕が行きましょうか？」

カナイから空いたカップを受け取ってそういったシゼをアルファは暫らく眺めたが、いい。と首を振った。

「このことに関しての対外的なことは僕に一任されているし、僕がやらなくちゃいけないことだ。正直友好的とは思えないけど、僕が行かなくちゃいけない」

シゼは、ルカの相手嫌だろうけどねー、にやにやとそう締め括って裏手でシゼの肩をぽんぽんと叩いた。

「じゃ、カナイさん。僕忙しいんで、しっかりやってくださいね。

シゼ、僕が戻るまで、ルカの足止めといて」

先に部屋をあとにした使用人に続いて扉に手を掛けたアルファにそういわれて、シゼは曖昧に頷いた。

嫌だというのを隠すことは出来ない。

けれど、違えることもしないだろう。

アルファはその確信が合ったから、重ねることはせず部屋を後にした。

君が居ない（2）

＊＊＊　アルファサイド。

療病棟の雰囲気は好きじゃない。
嫌なことばかり思い出す。

一番新しいものといえば、種屋に大敗を喫したことだろう。

あれは屈辱的だった。
煮え湯を飲んだどころの話じゃない。

苦々しく顔をしかめて、もう完全に癒えた腕をぐっと押さえた。
あんな傷を負われされたにも関わらず、相手は手加減をしていた。
元通りにきちんとくっ付くように丁寧に切り落としていった。
それが余計にアルファの神経を逆撫でする。

マシロちゃんはなんでまたあんなのが良いんだろう。
原因は僕には分からないけれど、あんなことになるくらい酷い喧嘩をしてしまうのだから別れれば良いのに。
そう素直に口にしたときに、エミルが複雑そうな笑みを浮かべて「ないと思うよ」といったのを思い出した。

「結局マシロが自分の感情で怒りを示すのは、ブラックに対してだけだよ。マシロは僕らにあそこまでの感情をぶつけたりしないからね？」

確かにマシロが自分の感情で怒っているのを見たことない。
こちらがマシロの常識から外れたことをして怒られることはあっ

ても、それは自分たちのためだ。

「女の子って難しいな……」

ぽつっと零したところで療病棟を抜けた。

相変わらず王都の空は絵の具を零したように晴れ渡っている。

絶対に連れて戻るといったエミルの言葉を信じないわけじゃない。

でも懇々と眠り続ける姿を見ていると、ただただ不安になる。

「早く会いたい」

今願うのはそれだけだ。

早く目が覚めて、いつもと変わらない毎日に戻りたい。

刺激的な毎日もそれなりに楽しいと思っていたけれど、そこに彼女が居ないくらいなら、そんなものより、だらだら続く日常のほうが良い。

そう思うくらいには、自分もだらだらしている。

それが心地良く感じるのだから、自分の中の”美しいとき”も存外平和なものだったんだなと苦笑する。

「そうだなぁ……」

マシロちゃんの目が覚めたら、まずはクリムラの新作を先に食べたことを自慢しよう。

絶対絶対、羨ましがるから、その顔を堪能して、そのあと一緒に連れて行ってあげよう。

快気祝いにこっそりと。

ふふ、エミルさん怒るかな？　でも、良いよね、怒らせておこう。
ちょっとくらい仕返ししてもバチは当たらないはずだから。

＊＊＊カナイサイド

静かに閉じられた扉に、続けて手を掛けたシゼは「では、僕も役目に戻ります」と口にしてから、ちらと寝台に視線を投げてぺこりと頭を下げた。

シゼは律儀だ。

再び先ほどまでの静けさを取り戻し、カナイは一度だけべったりと机に張り付いて溜息。
恨めしげに寝台を睨みつけても何も変わらない。

ただ、傍に寄らなくては生きているのかどうかも怪しいくらいの様子で、静かに懇々と眠り続ける肉体。全ての生命活動を止めてしまっているもの二名。

肉体が乖離しないように留めておくことが実に厄介だった。

種の存在を感じることの出来ないカナイは、このときマシロが本当に異世界人は種を持たないんだなとしみじみ感じていた。

流石のカナイも、四六時中魔力を放出し続けるのは無理。
しかし、今はそんなことをいっていられない。深夜僅かに浅い眠りとともに休息を取る以外は、誰かの傍らで肉体の維持に努める。

今度は、マシロの番だ。
乖離する心配がないマシロが実は一番気楽だ。

カナイは、よいしょっと部屋の隅から離れると、んーっと身体を伸ばしつつ、眠っているマシロの傍に寄った。そして、傍に置いてある椅子に腰掛けて手を取る。ふわっと欠伸を一つしてから、ぽすりと寝台の端っこに頭を預けた。

他二人は額に手を当てて魔力を注ぎ、生命活動を助けるのだけれど、思いの他無理な姿勢になり疲れるのでマシロのときだけは少しだけ身体を休めつつ行うことにしていた。
本格的に寝入ってしまってはいけないので、監視にけたたましく鳴り響く目覚まし時計型の傀儡が終始張り付いている。
因みに日に何度か鳴り響き、療病棟を騒然とさせるが今は皆それにも順応して飛び込んでくるものは居なくなった。

「――　……」

きゅっと握る手に力を込めると、ふわりと僅かに発光し暖かくなる。
それが全身に行き渡っているのを確認してから、カナイは静かに双眸を伏せた。

――　……どんな夢を見ているんだろうな……。

ぼんやりとそんなことを考える。
ブラックがマシロのあとを追った後のエミルの取り乱しぶりを思い出すと、ふと心が陰った。

「何もお前まで行かなくても」
「駄目だ。ブラックじゃ絶対に役に立たない。寧ろいかせるべきじゃなかった。どうして、止められなかったんだろう」

かつかつと、追加の薬が出来上がるのを待つ間、エミルはずっと部屋の中をいったりきたりしていた。
もちろんその間は、仕事なんて何一つ手についていなかったから、時々苛々した様子のラウが来てくどくどと説教を垂れていく。けれど、エミルが全く聞いていないことを毎回思い知ったように「全く！」と踵を返す。

「どんな世界の夢を見てるか知らないけど、マシロだってシル・メシアに愛着くらいあるだろ？　帰る場所を間違えるとは思わないけど……」

信じてないのか？　と、カナイが付け加えると、突き刺さる勢いで睨みつけられた。

「不安なんだよ！　不安なんだ……美しいときで溢れた世界と、こと天秤に掛けて、本当にこちらを選び取ってくれる？　夢だと気付いても目覚めることを望んでくれる？　こちらに、ブラックが居るならまだしも……」

苛立たしげに靴を鳴らす音を聞いていると、カナイにまで不安は伝染する。

「ブラックは、こっちの住人で種屋だ」

きっぱりと自身の中に生まれた不安を消すように口にすれば、ぴたりと足を止めたエミルが切なげな瞳を向け「……カナイ」と諦め

に似た台詞を続けた。

「そんなもの捨ててしまうよ……種屋は唯一無二の存在だけど、同じだけ不安定。いつだって代わりのきく役目でもあるんだ。ブラックがそんなものに拘るとはとても思わない」

いって、すとんっとマシロの寝台の脇に腰を降ろして、マシロの手を取ると、そっと唇を寄せた。

「僕は見極める目を持つんだ……分かるよ……僕の持つ不安の意味が……僕に見えないものは、この世界の理から外れたマシロの選択だけだ……」

僕はマシロを失えない……いってマシロを見詰め深憂しているエミルに漠然とした不安が占拠した。

「――　……早く起きろよ」

自分たちにとっても、マシロは唯一無二。
大切な存在であることには変わりない。
愛しているかと問われれば、もちろんだと迷うことなく応えることが出来るだろう。

しかし、優先順位となれば自分はもちろん、アルファやシゼにいたっても己の主君であるエミルが筆頭に上がる。けれど、エミルがもし、国とマシロを天秤に掛けられた場合どちらを取るか分からなくなりそうだ。
そのくらいの中毒性を見せていて恐くなった。

――　……俺はお前もエミルも失いたくないよ……。

君が居ない（3）

＊＊＊ルカ&シゼサイド

療病棟からの帰り、ふと思いついて王宮の書庫へと立ち寄ってから研究棟に戻った。

いつもなら、各研究部が協力体制を取ることはあまりない。しかし、今は非常事態。国は白月を目覚めさせるために持てる力の全てを傾けているといっても過言ではなかった。

そのせいで、通常なら清閑としているこの空間も多くの研究者が互いの領域を許可もなく行きかいざわついている。

殆ど人通りのないはずの自分の領域を平然と行きかう人間と擦れ違い、シゼは一つ溜息を落とした。早く元のあるべき姿にこの空間が戻ることが何よりも望ましい。

その上、このことの総括はなんとあの白猫に託されていた。

エミルの判断。

そして、支持だ。シゼも逆らえない。けれど、面白くない。

ただ、第一発見者であるというだけで、このことの全てを任せるには不安要素の方が多い人物だ。

もちろん、そのことはエミルにも進言した。

しかし、エミルはにこやかにシゼの肩を叩いて「そのための補佐だよ。シゼがしっかり纏めてね」と交わされてしまった。

あの猫はどうにも苦手なのに……。

はぁ。と溜息を重ね、ドアノブに手を掛けた。

「おせぇ」

「なぜ貴方がここに居るんですか？」

「起きてた？」

資料を纏めたりするのに使っている書斎の一つにルカという白猫の先客が居た。

いつもならマシロが座ってなんやかんやと口出ししているソファを陣取っていたことも、正直面白くなくシゼは眉を寄せる。

そんなシゼをあっさり無視して、問い掛けを続けたルカに、シゼはいっても無駄だと嘆息し「変わりなしです」とあっさり告げて他所から持ち寄った資料を大きな書机に置いた。

そうか……と、頷いたルカはちらとシゼを見て、直ぐに視線を逸らす。

「これを、僕にどうしろと？」

「おれ疲れたから、あんたが解析してよ」

先客というように机上を占領していた、レポートを取り上げてぱらぱらと捲る。

――……いまだ名前すらない新種の解析結果。

放出される花粉と、吐き出される毒素の解明に着手したものだ。

一刻でも早くこれを解き明かし、今も遠方で眠り続けている人たちへの特効薬を精製する必要がある。何よりも今、この病に倒れている人間がこの王宮内にも存在している。

猶予は、ない。

「おんなじ人間が続けて目を通すより良いだろ」

いって、立ち上がると部屋の隅に置いてあったワゴンから勝手にお茶を淹れはじめる。

「あんまり役に立つとは思えないけど、薬師としてはあんた天才なんだろ？　あの人も一応あんたには一目置いていたみたいだし」

「……あの人？　マシロさんですか？」

椅子に座って、どっさりと置かれていた資料の端から目を通し始める。写しを何度も見たものだけれど、新たにルカが書き込んでいる箇所も幾つか点在していて、それを拾いつつチェックしていく。

「店長っ！」

ぶっとルカが噴出したのを聞いて、シゼは不可解な表情で顔をあげた。

そのままルカはあははと笑っている。

「ないない、あの人、どんだけ特別に囲まれてても萎縮一つしないんだぜ？　一目置く場所が違うって」

「そうですね。自分を殺しかけた人を傍に置くくらいですからね。マシロさん自身変人です」

苦々しく零したのにルカは微塵も気にした風もなく聞こえていなかったように続ける。

「ブラックさんだよ」

「はぁ？　どうしてまた」

意外な名前が上がった。

「あの人、あんたの薬だけは自分で飲まないまでも、店長が飲むのは許してたし、面倒臭くなったら『シゼにでも聞けばどうですか？』っていってたからな」

おれは必要としなかったけど。つんっとそう付け加えたルカに、そういえば、ルカが此処へくるようになったのはこの一件からだと思い至った。

突然きて、即成長薬を寄越せといったときにはどうしてやろうかと思った。

「おれはあんたが嫌いだからな」

「奇遇ですね。僕も貴方が嫌いです」

二人揃ってにこりとしたところで、室内温度が三度以上下がった。他に空間を共有しているものが居なくて良かった。

「大体、貴方はマシロさんが居なくなっても興味ないんじゃないんですか？」

寧ろ居なくなれと思っていたはずだ。

「別に……」

いいかけて口を噤む。

互いに嫌いなはずなのに、部屋から出て行く気はないのかルカは最初に座っていたソファに腰を降ろした。そして、仏頂面のまま自分で入れたお茶を口に運ぶ。

暫らくは、シゼが資料を捲る音と、ペンを走らせている音しか聞こえなかったのに、ぽつりとルカが零した。

「――　……分からない」

決して大きな声ではないが、他に誰も居ないのだ。小さな声であっても外に発された声が聞こえないわけない。シゼは、その台詞に続きがあるように思えて顔をあげた。資料には、手に持っていた多少不恰好な彫りの施してある琴を添える。話の内容によってはこのまま閉じられる可能性もあるからだ。

「店長なんて居なくても良いと思う」

「そうでしょうね」

シゼにはルカに掛ける同情めいた言葉はひとつもない。その必要もないと思っている。

そんなシゼのどこか余裕とも取れる態度に、むっとした表情をしたものの、ルカは特に食って掛かるつもりもなかった。

君が居ない（4）

「おれが最後に聞いた台詞は『大嫌い』だった」
「好かれたいんですか？」
「！そんなわけないだろっ！……ていうか、正直良く分からない。別に他人から向けられる感情になんて、おれは惑わされない。そういう風に出来てる。そういう風に、仕込まれた。感情が一番種屋にとって不要なものだから……って、そう、ずっといわれた」

ぽつぽつと零すルカはもう手元もシゼも見ていなかった。
ただぼんやりと空を眺めて淡々と口にする。

「今の種屋店主は無茶苦茶私情を絡めていると思いますけど？」

皮肉めいた言葉を投げてもどこか遠くだ。
静かに「……うん……」と頷き、いけないことだ。と続けた。

「レムミラスなら、そういうだろう。でも、本当に駄目なのかどうかおれには分からない。それを確かめるには、あの人の種を飲むべきだと思ったのに、あのチビっこい騎士が邪魔をするんだ！　種屋を庇うものが居るなんて有り得ないっ誰が種屋をやったって一緒だろう！　そう思うよなっ！　みんな普通そう思ってるじゃないか！」

突然、うわぁっ！　と頭を掻き毟って足を投げ出し不満げに零すルカに、シゼは僅かに口角を引き上げた。

「足」
「は？」
「テーブルに足を載せないでください」

マシロさんが居れば確実に叩かれていますよ。そう付け加えられて、ルカはぶすっと頬を膨らませテーブルから足を下ろした。

「大体、店長が居なかったら、あのチビだって種屋を庇ったりしないだろ。やっぱり店長を消すのが先か。いや、駄目だ。それじゃあ、おれずっとマシロに嫌われたままだよ。いや、嫌われるのがどうとかではなくて、なんだよそれっ！　あぁぁぁぁあ、あいつ、あのチビスゲー邪魔。殺せないかな」

一人でソファの上で悶え苦しんでいるルカはとても種屋候補生には見えない。唯の子どもだ。因みに先ほどから何度もアルファのことを、チビチビと繰り返しているが、ルカの方がまだ背は低い。その事実を必死に隠したいことを実は知っている。

シゼは思わず笑い声が出そうになるのを、口元を押さえ押し殺して落ち着いてから、ゆっくりと告げた。

「無理じゃないですか？　僕じゃないんだから」

ぴたりと暴れるのをやめたルカは、静かにシゼを見た。

「そうだな、あんたなら簡単なのに……」

一瞬だけ視線が絡む。

ゆらりと真っ白な尻尾が好戦的に揺れ、投げられた殺意の篭った視線に、本気を感じられなくてシゼは不愉快そうに眉を寄せたがルカは気にする素振りもなく「無駄はしない主義だから」と偉そうに口にして肩を竦めた。

「もう良い。チビの相手はいつでも出来るから」

よっと反動をつけて立ち上がったルカは、つかつかとシゼのところまで歩み寄って、こつっ！　と机上を突いた。種屋の種が欲しいという、話の元からはすっかりずれてしまっていることに、シゼは気が付いていたけれど、あえて掘り返すことはしなかった。

「だからさ、あんな連中宛にならない。早く、さっさとなんか新しいポイント見付かんねーの？　そこら中のモルモット眠らせたんだけど、何試しても大抵死んじまうんだよな……ほら、こっちの……」

いいつつ、シゼの前に置かれていた資料をどさりと捲り、ぱらぱらと進める。

目的の箇所についたのか「こっちのこれと……これが」と指でなぞる。

「――　……これってこんなものも含んでいるんですか？　というか、残ってたのか……」

「絶対そうだって、進化の過程で絶対絡んでる。こいつが増えてたあたりの土壌も持ち帰ったから直接調べてみろよ、絶対出る」

それならと、シゼは先ほど自分が持ち寄った資料を、どさりと山から下ろして頁を捲る。

「このあたりの、調整を……　――」

「逸れに近いことなら、昨日やってみた」

これこれと続けて指でなぞる。

「近いだけで同じことではないでしょう？　駄目です。こちらは試してみる価値があると思います。それだけではなくて、こっちの…

…」

いい掛けて山と積まれた、本のタイトルに視線を走らせて「ああ」と唸る。どうやら目的のものがなかったらしい。取ってこないと！と立ち上がったシゼを「いい」と制止して「おれが行く」と続けた。

「おれが行くから必要なの書き出して、図書館だろ？　あんたがいってたら日が暮れる」

自分の書いたメモを握り締めて「チビっ子には伝えといて直ぐ戻る」といい残してルカが姿を消したところをぼんやりと眺める。

「……不要なもの、か……」

美しいときを見たものは、不要なものすら切り捨てることが困難になるものなのかな……。

ぼんやりと、そんなことを考えて、背にしていた窓の外を仰ぐ。

――　……ごそ……っ

ズボンのポケットに留めておいたチェーンを外し、中から懐中時計を引っ張り出す。ぱちんっと開けば、図書館を卒業した日付が刻まれている。

この世界で日付など意味を持つことはないと分かっているはずなのに、そのはずなのに、そこに刻まれた数字に意味があるような気がしてくる。

美しいときが確かにそこにはある。そう思えてしまう。

ぱちんぱちん……手持ち無沙汰に蓋を開いたり閉じたり。毎朝巻くのが日課になっている。あの日から一度も欠かしていない。欠かしていなかったのに……今は、止まってしまっている。

壊れているわけではない。

この時計は美しいときを刻むものだ。そのせいで、ただ、巻くことの意味が分からなくなった。

良い天気だ。

こういう日には決まってマシロがこの部屋の扉を叩いた。

そして、殆ど無理矢理――内容はその時々色々だが――付き合わされる。

「今度はこちらが無理矢理付き合ってもらわないと……」

いつまでも寝かしておくわけにはいかないだろう。

それはとても、彼女らしくないとシゼには思えた。

第三十七話：お兄ちゃんと私（1）

「真白」

意外にも先に口を開いたのは、臣兄だった。

私がその声に顔をあげれば真っ直ぐに私を見ていた。どうしたの？　と首を傾げれば、臣兄は少しだけ遅疑逡巡し顔を伏せた。

そして、改めて顔を上げるとにこり。

「今日はどうしたの？　あ、えっと、もしかして、クリスマスの相談かな？　今年もケーキ一緒に焼こうか？　真白の好きなもの沢山作ろう」

そっか、町はもうクリスマス色に染まっていた。

でも、きっと今年のクリスマスに、私はここに居ない。黙ってしまった私に気が付かないように臣兄は重ねる。

「それとも、欲しいものがあるの？　新しい服とか、アクセサリー？　うーん、ケータイを新しくしたいとか」

あれこれと真剣に考えてくれる臣兄に微笑ましい気持ちになり、私は「ううん」と首を振った。

「そういうのは恋人にしてあげなくちゃ、だよ」

いつもいつでも私贔屓な臣兄に笑って告げれば、臣兄も笑みを深めて「うん」と頷いた。

「だから、目の前の小さな恋人にいってるんだよ」

さらりとそんな風にいわれると嬉しいやら恥ずかしいやら。本当に臣兄は私に甘い。

照れ臭くてふわりと熱を持つ顔を逸らせば、そっと伸ばされた臣兄の手が私の頭に乗っかり優しく撫でていく。この感じはやっぱりエミルのそれに似ているなと頭の片隅で思った。

「僕はもう、真白に口を利いてもらえなくなるのは嫌なんだよね」

本当に苦いものでも噛み締めたような顔をしてそういわれて思い至る。

そういえば、昔。学校の帰りに臣兄が彼女とキスしているのを見てショックを受けた私は、

「一週間くらい無視し続けたんだっけ？」

「十日だよ。もう、本気で泣きそうだった。いや、泣いたかもしれないな。うん」

物凄く真剣にそういって頷いた臣兄に恥ずかしさ倍増だ。

お兄ちゃんは今も、だけど、あの頃も私が一番って態度を崩さなかったから自分より大切な誰かが居るということに物凄い衝撃を受けて、悔しさのあまり辛く当たってしまった。今思えば、可愛らしい子どもの嫉妬だ。

「ご、ごめんね？　あの時はお兄ちゃんが捕られると思って必死だったんだと思う。臣兄が大好きで、自分だけのものだと真剣に思ってた頃だったから」

あのことが原因で今も臣兄から女の人を遠ざけていたのなら申し訳ない限りだ。

絶対モテると思うのにお兄ちゃんはいつでも家に居てくれる。私としては嬉しいけど、でも、私は臣兄の思い描くような良い妹ではないと思う。

だって……。

これから口にしなくてはと思うことに心が陰るとそれを打ち消すように、明るく臣兄が続けてくれる。

「あの時は、凄く困って、それと同じだけ凄く嬉しかった。真白に必要とされていることが嬉しくて、確か今頃だったんだよね。クリスマスが近くて、大きなケーキを焼いたな」

「覚えてるっ！　ウェディングケーキくらい大きくて苺が沢山乗ってて、凄く可愛かったし、美味しかった」

ふと蘇る記憶を嬉々として口にすれば、臣兄はくすくすと楽しそうに笑って「ウェディングケーキは大げさだよ」と肩を竦める。

「まだ、真白は子どもだったからとても立派なものに見えたんだろうなー。普通のケーキを三段に重ねただけだったんだよ？」

「そうだっけ？　凄いっ！　嬉しいっ！　臣兄のお嫁さんになって、毎日美味しいものを食べようっ！　って誓った記憶しかないなぁ……」

しみじみそう答えれば「本当にそう出来れば良いのにね」ととても小さな声で零して、臣兄は柔らかく瞳を細めてふんわりとまた私の頭を撫でる。

そして、ねぇ、と改めて声を掛け、私が顔をあげると「今なら」と口火を切った。

「今なら平気？」

問われているはずなのに、縋られているような気がするのは、私がそうであって欲しいと願っているからかな？　今でも、私だけのお兄ちゃんで居て欲しいと、そう我が儘を募らせているからかな。

でも、例えそうだったとしても、私はちゃんと臣兄の背中を押してあげなくちゃいけない。お兄ちゃんの、大好きなお兄ちゃんの時間を止めたままではきっといけないのだと、そう、強く思う。

「――　……少し、少しは、嫌だな。寂しいなって思うと思うけど、でも、もう私も子どもじゃないから、我慢するよ。出来ると思う」

口にしてから今の自分はまだまだ子どもだったと気付いたけれど、訂正するよりも先に臣兄が「そうか」と納得してしまった。

そして、暫らく沈黙したあとぽつぽつりと零す。

「僕は、嫌だな。僕は、嫌だと思っているよ……」

「え？」

「……嫌なんだよ……」

そういって私から顔を逸らすと、眉間に深い皺を刻んで溜息を吐いた。

臣兄はこれまで、私に駄目だとか、嫌だとか、いったことがない。それなのに今はハッキリと断言された。きっとその言葉は嘘や冗談ではないのだと思う。思うからこそ、私は何かいわなきゃと言葉に詰まる。そんな私の様子に呆れたのか、臣兄が顔を上げ「ねぇ、真白」と呼びかけた。

「――　……どこかに、いっちゃうの？」

「え」

ゆらりとカップの中身が揺れた。

「真白は、嘘が吐けないよね。その、つもりなんだね」

私はきゅっと唇を噛み締めた。それを告げるつもりだったのだけど、いざ臣兄から切り出されると辛くて、苦しい。

「いかないで欲しい。真白。どこにも行かないで……まだ、僕が必要だよね？　真白は、まだ僕を頼りにしてくれるよね？」

真っ直ぐに私を見つめてくる。不安で揺れる臣兄の瞳が私を捕らえる。

「……あの、ね。臣兄、覚えてる？」

身を乗り出しそうだった臣兄は、ゆっくりとそう告げた私に「何を？」と問い返して椅子に座りなおしてくれた。

「二つ月のある世界、シル・メシアっていうんだけどその世界の話……私、臣兄にしたことがあったと思うの」

馬鹿なことをともいわずに、臣兄は真面目に聞いてくれた。今と同じように、耳を傾けてくれた。

「うん、覚えてるよ。壮大な話だったから、印象深い」

困ったように微笑んでそういってくれた臣兄に私も微笑む。

「それに、そこは真白が求めた世界だ。お迎えでも来たの？」

私は静かに首を振った。

ぴたんぴたんとブラックの尻尾が私の足を優しく弾く。私に話を続ける勇気をくれているように感じて心強い。

「迎えなんて必要ないの。私、いつでも帰りを決められたんだよ。いつでも、二つ月のある世界に、シル・メシアに戻れた」

「戻る？　真白が帰る場所はこの家だ。他じゃない……」

ことりと私は手に持っていたカップを、机の上に置いた。

一口も口をつけなかったそれはまだゆっくりと白い湯気を立ち上らせていて、ひやりとした空気をほんの少しだけ温めてくれる。

「私、好きな人が居るの」

「真白の考えを分かって欲しかった人？」

「……うん、そう」

「分かってもらえたの？　もらえそうなの？」

「――　……分からない」

そっと隣りで丸くなっているブラックの見詰め、背中を撫でる。艶やかな毛並みが室内灯にも反射して光の波を泳がせる。黒って綺麗だ。

「分からないけど、でも、私が居ないと駄目だと思う。私が居れば分かってくれる。理解してくれようと努力してくれる」

「それなら、それは真白じゃなくても！　恋ならここでも出来る。今すぐじゃなくても、」

当然のように食い下がる臣兄に、私は「駄目だよ」と首を振った。

第三十八話：お兄ちゃんと私（2）

「だって、私にも彼が必要なんだもん」

そういうと自然と笑みが零れた。

驚きを隠せない、何をいえば良いのか分からない。そんな風に椅子に体重を預けて脱力する臣兄に私は話を続ける。

「彼はね、私が居れば良いの。二つ月のある、その世界じゃなくても。現に、今だって傍に居るといってくれてついていてくれる」

「え」

「駄目なのは私。私が、その世界じゃないと駄目なの。私がそっちを選ぶんだよ。私は、そこに大切なものがたくさんあるの。守りたいものがたくさんあって、みんな、きっと私を待ってる」

狼狽する臣兄の顔を見ていられなくて、私は自分の膝小僧を見つめた。

視界がゆらりと揺らいで、自分が泣きそうなことに驚く。

――　……ぺろり。

慌ててそれを手で拭おうとしたら、起き上がっていたブラックが私の肩に前足を乗せて目元を拭ってくれた。

「ありがとう……」

優しいブラックの額をそっと撫でる。

「例え、あっちが待ってなくても……私がみんなの傍に居たい。私

が、あの世界を、みんなを求めてる」

分かって、と、臣兄を真っ直ぐに見ると、臣兄はぼんやりと私を見返して、緩く口角を引き上げた。冗談だと、そう、思われてしまっただろうか。

けれど、それは杞憂だったようだ。お兄ちゃんは決して私が口にすることを疑ったりはしない。

はあ、と溜息を溢して、片方の肘を机に載せ頭を抱えた臣兄はゆっくりと首を振る。

「居るって？　どこに居るの。僕らから真白を捕って行ってしまう彼は、どこに居るの？」

「彼のせいじゃなくて」

「彼のせいだよ」

きっぱりと断言された。

いつもは温和な臣兄だからこそ、その強い言葉に私の心臓はきゅっと痛む。

「その人が居なかったら、真白はそこまでその世界に執着しなかっただろう？　その彼が居なくても、真白は、僕らよりもその世界を選んだ？　真白一人が非常識な、そんな酷い世界を……」

きっ！　と睨むように強い目で見つめられてそうはっきりと告げられ、私は次の言葉が出なかった。なぜなら……その通りだからだ。

私はブラックの居るあの世界が好きだ。

ブラックが居ないなら意味はない。

でも、だからといって、ブラックのせいじゃない。ためでもない。

強いていうなら、私自身のためなのに。

「――　……マシロを責めないでください……」
「っ！」

がたりっと椅子を鳴らし、臣兄は立ち上がった。
それにつられるように私も立ち上がる。

私たちの話に我慢しきれなくなったブラックが、元の姿に戻ってしまっていた。幸い耳と尻尾は隠してくれている。ちらと、私を見てブラックが「すみません」と詫びた。

「良いよ。最初から、紹介するつもりだったから」

機を見て臣兄には会って欲しかった。この人が私の好きな人だと紹介したかった。私は……　――

「私、幸せなんだよ。お兄ちゃん……」
「真白」

臣兄はいつも冷静で私に優しくて甘くて、だからこそ、その勢いの矛先がブラックにむけられるんじゃないかと私は少しだけ二人の間へと立ち位置をずらした。

「騙されてない？　地位とか名誉とか財とか……容姿とか……。真白は騙されてるんじゃない？」

私とブラックとの間で逡巡してそういった臣兄に私は苦笑する。
まあ、普通に考えてブラックと私がお似合いだとは思えないだろう。

「――　……もし、私が騙されているなら、彼は私を永遠に騙し続けてくれるよ」

騙してませんよ。というブラックの心の声が聞こえた気がする。きっと、困ったような笑みを溢しているだろう。

「でも、彼は猫で……猫、なの？」

ブラックの立ち姿をマジマジと見つめながら首を傾げた。

「……人、だと思う」
「人ですよ」
「人は猫になれないよ」

……尤もです。まあ、猫も人になれるのか？　という点ではどっちもどっちだ。

「じゃあ、便宜上猫男ということで」

血は争えないのか？　多分、私と同じことをブラックも思ったのだろう。目が合って、思わず笑いあってしまった。何？　と不機嫌そうに首を傾げた臣兄に私はにこりと微笑む。

「私も、一番最初に彼をそう呼んだから。似てるんだなって、思ったの」
「ルインシル＝ミア。それが私の名です。もし、便宜上とおっしゃるなら、マシロと同じようにブラックとお呼びください」
「……いや、呼ばないけどね」

ぷいっと大人らしくなく、臣兄は自己紹介してくれたブラックか

ら顔を逸らした。
なんというか……娘は嫁にやらんっ！　と不貞腐れているお父さんみたいだ。いや、お父さんも居るんだけどね。
少々呆れてしまった私に気が付いたのかどうかは分からないけれど、臣兄は、ふと思い出したように口火を切った。

「もしかして、エミル君も関係者？」

まあ、この展開からいってそうとしか考えられないだろう。
臣兄の問いに、私はこくんと頷いた。

その反応に「そっか……そうか……」と溢した臣兄は、瞑目し、細く長く嘆息し、身体中の息を吐ききったようだ。

「真白は大切にされてるんだね」

片手で顔を覆うようにして眉間を、ぐっと押さえた臣兄はそういって苦しげに肩を落とした。

「うん。みんな、大切にしてくれる」
「そう、だよね。理解に苦しむところはあるし、どう行き来するのかも知らないけれど、きっと二人とも無茶を推したんだろう……母さんが、連れて戻ったことも、ある意味必然だったのかな……」

はぁ、ともう数え切れないくらいの溜息を重ねる。
溜息が本当に幸せを落とすというのならば、必死に拾ってあげないと、もう臣兄の幸せは尽きそうな勢いだ。

「幸せ、なんだよね？」
「うん」

「もう、決めてしまったんだよね」
「――　……うん」

そうか、決めてしまったのか、そう繰り返した臣兄は、最後とばかりに盛大な長嘆息をして顔を上げると、ぐいっと私の腕を引き突然のことによろめいた私をぎゅっとその胸に抱き締めた。

痛いくらい強く。
掻き抱くように力を込められる。

「好きだよ。大好き。僕の大切な妹だ。どこへもやりたくないよ。まだ、早い。まだ、まだ……」

嫌だという声が微かに震えている。
それは私が本気だと認めてもらった証でもある。お兄ちゃんはいつも私に甘い。甘くて、優しい。結構歳も離れていたから、小さいときからよくこうして抱き締めて守ってもらっていた。
その頃より、私はずっと強くなっただろうか？
大好きなお兄ちゃんの手を離して自分の意志で歩けるほどに……。

「――　……お兄ちゃん……。私も好きだよ。大好き」

ここはとても居心地が良くて不安になる。でも、私には愛した人が、ブラックがいる。みんながいる。もし私が一人で立てなくても助けてくれる人たちがいる。

「だから、分かって欲しい。許して欲しい。馬鹿な妹でごめんね……いつもお兄ちゃんにしてもらってばかりで、いつも……」

じわじわっと目の前が波打つ。

瞼が熱い。
声が震える。
泣かないようにしようと思ったのに、限界みたいだ。
そんな私を宥めるように、ゆっくりはっきりと紡いでくれる。
「真白は良い妹だよ。僕を良いお兄ちゃんで居させてくれた。なんでもしてあげるよ。なんでも真白がして欲しいことなら、なんだって……」
ぎゅっと腕の力が増すと私の肩口に臣兄の額がぐりぐりと当たる。
「分かって、欲しいんだよね……許して、欲しいんだよね……」
声が出なくて、私はこくこくと必死に頷くことしか出来なかった。
「うん……、うん……。分かった。分かったよ。僕は、許す。許すよ……」
掠れた声で締め括られて息も声も詰まった。
「真白。話してくれて、僕らのことも大切にしてくれてありがとう。真白は優しくて良い子だね……いつだって、僕の自慢の妹だよ」
「っく、ふぇ……おにいちゃ、ん……」
「ふふ、真白が泣くのは久しぶりだね。郁斗が出来てからは、真白もお姉ちゃんになってからは、殆ど泣かなくなったのに……」
いって笑って、臣兄は「良い子、良い子」と私の頭を優しく何度も何度も撫でてくれた。

小さな頃のように、まだお互いがお互いなしではいられなかった頃のように、何度も、何度も……。あの頃と同じように私の涙が止まるまで、ずっと、ず、っと……――

第三十九話：川の字

その夜。

私たちは一階の和室に布団を並べて、三人とプラス一匹で横になった。

郁斗は、盛大に嫌がるかと思ったけれど、割と従順に「俺は窓際が良い」と要求を述べただけだった。郁斗はこれでいて感の良い子だから、何か察しているのかもしれない。

「台風の日は、よくこうやって三人で寝たよね」

「郁斗が恐がりで、雷が鳴ると眠れなくて、風が窓を揺らすと泣き出して」

「――　……うるせーな。兄ちゃんが、それらしく怖い話を吹き込んで俺にトラウマを植え付けたんだろうが」

「そうだったかな？　郁斗は恐がると面白かったんだよね。実にからかい甲斐のある弟だったんだ」

いや、今も十分可愛くてからかい甲斐はあるけどね。とくすくす笑うと、思い当たる節があるのか郁斗は素直にむくれっ面になる。

そんな、沢山沢山懐かしい話をして、沢山沢山シル・メシアでの話もした。そのときも、やっぱり郁斗は大人しく聞いてくれて、茶化したり否定したりしなかった。

「つーかさ、猫のことは分かるようで分からないけどさ」

いいながら、私の傍に丸くなっていたブラックを見詰めつつ郁斗が切り出す。

「あの留学生？　何者？」
「王様」
「は？！」
「シル・メシアの三国王の筆頭」
「王様なにやってんの！」
「私を迎えに来てくれたの。凄く心配して」

素直に驚く目をくるくるさせる郁斗が可愛い。確かにね、普通に生きてて国のトップと面識出来ることなんてまずないよね。分かるよ、その驚きは……。

そして、どういうわけか「はぁ、王様。王様かぁ……はぁ、なるほどー……」と変に納得していた。

「ねぇ」

ふと、何か思い出したように臣兄が声を上げて、天井を指差した。

「あの染みが人の顔に見えるって、泣いてたのって、真白だっけ？郁斗だっけ？」
「真白！」「郁斗！」

被った。
正解は両方。
郁が生まれるまでは私が恐がって、そのあとは郁斗が恐がって泣いた。

「お兄ちゃんは恐くなかったの？」

僕？　僕は……と、少しだけ考える素振りをしてから、答える。

「もっと恐いものを知ってたから、怖くなかったよ。だって、ここで眠るときは誰かと必ず一緒だったから。寧ろ嬉しかった」
「兄ちゃんに恐いものなんてねぇよ」

郁斗が鼻で笑う。
話を逸らそうとしているのがバレバレだ。
バレバレだけど私たちは素直に「うん。もうないね」「ないない」と、それに乗っかる。

この家で一人が恐いということを知っているのは臣兄だけだ。だからこそ、お兄ちゃんはいつでも私たちの傍に居てくれた。

はぁぁあ、と郁斗まで盛大な溜息。それもワザとらしい。
「兎に角、ねーちゃんは、なんも上手く出来ないんだから、精々周りにやらせとけよ」

……無理するなよ……。

くしゃりと大きな手が私の前髪を掻き混ぜて、びしりっ！　とデコピンして離れた。

「ちょっ！　痛いよ、郁斗！　私もデコピンするっ。ちょっと、こっち向きなさいよっ！」

がばりっと起き上がると慌ててブラックが起き上がって、その場を離れた。

「やめっ！　やめろってマジ離れろっ、暴力姉貴っ！」

暴れる郁斗を、臣兄に手伝ってもらって押さえ込んで無理矢理顔を向けさせる。
手を郁斗の額の前で構えたところで、ふと、止めた。
「――　……泣いてるの？」
「……うるせ、見んなよ」
驚きに力が緩んだ隙に、ぷいっと顔を逸らされた。
郁斗、もしかしたら私と臣兄の話を聞いていたのかもしれない。
ドアは開いていたし、特に声のトーンを落とすこともしていなかったから。
「本当、郁は昔から泣き虫だよね」
デコピンの変わりに、少し日に焼けて固い髪をくしゃくしゃと撫でる。
顔を逸らしたままの郁斗の方が微かに震えていて……私は良いお姉ちゃんではないから、ほんの少しだけ嬉しかった。もうすっかり一人前の顔をして私の助けなんて微塵も必要としていないと、どこかで寂しく思っていた。
あ。
その瞬間、臣兄の言葉を思い出した。
きっと臣兄も今の私と同じ気持ちだったんだろう。嬉しくてどこか寂しい、永遠に続くはずはないと、最初から分かっている複雑な気持ちだ。
「真白、そろそろ眠らないと、朝が辛いよ」

身体を半分起こしていた私の腕を引いて、臣兄がそういって抱き寄せる。

朝……朝が来て、私が次に目を覚ましたら、きっとそこはこの見慣れた天井ではないだろう。

だって、私は今、とても満たされている。

寂しいとか哀しいとかそういう気持ちがゼロではない、でも、それ以上の暖かなもので満たされている。

――……やり残したことがあるのではないですか？

きっとこういうことだったんだろうと思う。

私はみんなに、特に二人に分かって欲しかった。何もいわずに、何の説明も出来ずに離れてしまったこと。仕方ないと分かっていてもやっぱり、罪悪感は消えなかった。

これは夢、でも、現実。

痛みもあるし、温もりもある。

ようやく解けた糸は、優しく私たちを繋いでいる。

優しく腕枕をして抱き締めてくれる臣兄に、あの子どもの日の頃よりも、ずっとぎこちなく私の手を握り私の肩に額を落とす郁斗。

私はこの中で育まれていた。

つ……っと涙が目尻を滑り降りた。そして、夜の無言（しじま）にゆっくりと支配されていく。

私はここがとても好きだ、とても、とても……だから、お願い。

私がここに居たこと。私が二人を、家族をとても愛していたこと、
忘れないで……――

第四十話：感動の再会だよ、ね？

＊＊＊

ふるりっと瞼が痙攣するように震え、私はゆっくりと瞼を持ち上げた。薄っすらと映る天井は、やはり

どふっ！　がしゃんっ！！

「げふっ！！」

痛いっ！　痛い痛いっ！！

今確実に顎に入った！

あうぅぅ。

「マシロちゃんーっ！　起きたっ？！　目覚めたっ？！」

「いや、今止めを刺されかけた……」

天井なんて確認する暇もなく、鈍い音と共にがっつり飛びついてきたアルファの頭が顎に入った。涙目だ。

もっときっぱりはっきりがっつり文句をいいたいところだけれど、飛び込んできた大きな碧い瞳がうるうると潤んでいると、怒る気は失せる。

かなり、心配掛けたようだ。ごめんねと、ありがとう、が……

「……マシロちゃんの石顎」

――　……ちょっと待て。

そのせいで涙目とか。そうか、そうなのか？　そうだよねぇ……アルファが泣くってないよね……というか、それ、自業自得で私には謝るべきところではないの？　いうに事欠いて石顎って。軽く傷付く。

はぁ、と短く嘆息すると「マシロちゃん？　マシロちゃん平気？」とぐいぐい人の顔を覗き込んであちこちぺたぺた触りまくる。

心配、してくれてるんだよ、ね……？

「ア、アルファ、分かった分かったからくすぐるのやめて」

「ちょっ！　僕、魔術的なものが開眼したんですか？　マシロちゃんの話が分かります！」

若干天パってるアルファを見ると、やっと戻ったんだなと、実感。声もちゃんと出るし、耳も聞こえる。ちゃんと戻ってる。アルファに魔術素養が開眼したわけでは決してない。

それに、大体こんな突撃してくるようなタイプ、向こうには居ない。そして、アルファ越しにちらと見える室内は、見覚えがある王城内の寮病棟だ。

「――　……ちょっと、アルファ……。今、僕のこと蹴っ飛ばしたよね？」

傍で白煙が上がっていると思ったら、隣りのベッドが破壊されていた。

どんな飛びつき方をしたらこんなことになるんだ、アルファ。その瓦礫からゆっくり立ち上がったのはエミルだ。

とっても丈夫な王様には、怪我は……多分ない。

「だってエミルさん僕を置いていくんだもん」

……って、それだけで王様、蹴っ飛ばしちゃ駄目だよ、アルファ。そして、ワザとだということをばらしては駄目な気がするのは私だけなの？　良いのそれで？

「やっと、起きたのか……」

ぎゅうぎゅうとアルファに抱きつかれたまま、その先に居るのだろうカナイの声がして、ようやっとアルファを引っぺがしていく。アルファは、いやいやいやっ！　と可愛らしく抵抗していたけれど、カナイの雷が落ちた。

文字通り雷が。

室内で、やめてください。

「――　……なんかやつれてるね？」

よっこいせと私のベッドの端っこに腰掛けたカナイは少し痩せたような気がする。そして、ふっかい深い溜息を吐いて当たり前だろ。と苦い顔をする。

「お前な、最終的に三人プラス半分くらいの生命維持続けてたんだぞ……ああ、でも、これでシゼのクソ不味い回復薬から解放される」

涙目だ。

シゼの薬の不味さは定評がある。

飲み続けるのが辛いのは私も良く分かる。少し同情的な気分にもなれるというものだ。しかし、今はそれよりも……

「え、えーっと……その、半分は大丈夫、なの、か、な？」

しどろもどろに問い掛ければカナイは「ああ」と頷いた。

そ、そっか……良かった……ほっと肩を落とす。

安心したのも束の間、カナイは真剣な顔で付け加えた。

「今は、ってだけだから、もう直ぐシゼが来る。チェックは受けろ。体力とか異常に下がっているはずだから、やばくないっていったら嘘だ」

「わ、分かった」

切々と語ってくれたカナイに私が重々しく頷いたところで「ねぇ、カナイ」とエミルが声を掛けてきた。怪訝な表情で、肩を押さえてゆっくりと回している。

「なんか身体の節々というか、全体的に固いんだけど、軋むんだけど……」

「死後硬直だろ」

即答だった。

とりあえず、私とエミルは同音を漏らす。

「――　……へー……」

「そりゃ仮死状態だったんだから、仕方ないだろ？　乖離しなかっただけでも良しとしろよ。無茶しやがって」

みんな王様の扱い雑です。

それだけ、エミルが無理を押したということなんだろうけど。私とエミルが顔を見合わせて苦笑したところで「退いて下さい」とエミルの肩に手が掛かった。

「マシロ？　マシロは大丈夫ですか？」

ぐいっと強く引かれたのか、少しだけよろめいてエミルは下がった。

その奥から出てきたのはもちろんブラックだ。いつも通りに見慣れた耳と尻尾がある。そう思ったら、ふふっと笑みが零れてしまった。

「大丈夫、そうですね？」

そんな私の様子に、ほっと安堵の息を吐くとそのまま歩み寄って抱き締めた。

私の意識に連動してみんな目が覚めたんだなと胸を撫で下ろし、ブラックのいつもと変わらない体温にほっとする。

「なんだか騒々しいですね？　カナイさんが暴れているんですか？」

かちゃりとノックもなし――したかも知れないが、室内が騒がしすぎて全く聞こえない――で扉が開いて入ってきたのはシゼだ。カナイが苦い表情をして「なんで俺が暴れるんだよ」と零すが誰も拾わない。

相変わらずだ。

「シゼ、久しぶり」

にこりとベッドの上から声を掛けると、暫らくシゼはマジマジと私を見たあと「あれ？」エミルとブラックを順番に見て暫し固まったあと

「皆さん、おはようございます」

驚きのあまり他の言葉は浮かんでこなかったらしい。

無茶苦茶普通に声を掛けてきた。みんな起きてるけど部屋はぐっちゃんぐっちゃんになってるし、起きてたはずのアルファは潰れてるしね。

そりゃ吃驚だよね。

一番不測の事態に弱そうなシゼには気の毒な展開だった。

第四十一話：薬の主成分は優しさです。

その日のうちに私は帰路に着いた。
本当は、一日くらい寮病棟にという勧めだったけれど、私は病気ではないし、他の部分に何か支障が出ているとも思えない。

何よりも、居て居てといってくれるエミルは、ラウ先生に首根っこ掴れてあっさり退席させられた。いつも飄々としているラウ先生が普通に感情を表に出していることが吃驚だ。

そんな姿を見てしまっては、ここでのんびり厄介になっているわけにもいかないだろう。それに私にはブラックも居るし、何かあっても心配はない。

「あのあと、大丈夫だったの？」

翌日、ベッドから抜け出すことを硬く禁じられた私は枕を背もたれにして、お見舞いに来てくれたアルファとカナイにのんびりと話しかける。二人とも女の子の寝室だというのに勝手知ったるなんとかというように、完璧に寛いでいた。
ベッドの足元側に腰を降ろしていたアルファが

「知らないです。こき使われていることは確かだと思います」

と楽しそうに笑い、ベッド横に置いてある化粧台の椅子を反転させて、背もたれを抱えるように座っていたカナイは、背もたれに預けた腕に顎を乗せて、うーんっと唸る。

「ラウさん、かなり怒ってたからなー。絶対に溜まった仕事はエミ

ルにやらせるって、張り切って缶詰だよ。暫らくは出てこれないんじゃないか？　気の毒に……」

本当に他二人の王様は機能しているんだろうか？　まあ、それだけエミルが頼りにされている――ある意味都合よく使われている気がしないでもないがそれはいってはいけない――ということだろう。私は、そっか。と苦笑する。

「あー、俺も異世界見学行きたかった。スゲー行きたかった……行きたかった行きたかった。また、夢に堕ちる機会があったら絶対俺も連れてけよ」

愚痴愚痴とそう溢すカナイに私は「そんな良いところでもないけど」と笑い、そして続ける。

「もし同じ病気にかかることがあっても、私はもう元の世界には堕ちないと思うよ。きっともう、どこにも堕ちるところはないと思う」

現実により近い夢が、悔恨や懺悔をあらわすのだとすれば、私にはもうその先はない。

私はそういう意味ではとてもスッキリしていた。

身体はだるいけどね。

清々しい私の気持ちを察したのか、カナイは「そっか」と口角を引き上げ「マジで残念」と踵で床をこつんっと蹴った。

「それより、マシロちゃんっ！　どうしていってくれなかったんですかっ！」

「え」

「赤ちゃんのことですよっ！」

ぶーぶーっ！　と頬を膨らませて抗議してくるアルファに私は曖昧な笑みを溢した。
いいたくても、私は知ったその日に癇癪を起こして、そのまま耳と声を失ったのだ。話す暇なんてどこにもなかった。

「まあ、良いんですけど。マシロちゃん、安心してくださいっ！　大丈夫、僕が鍛えてあげますから！　きっと立派な騎士になります」

待って、待って待って、なんでそこで騎士決定？　いや、違う。突っ込みどころはそこじゃなくて。

「アルファ、子ども苦手だっていってたじゃない？」

そこでもないけど……。

「大丈夫ですよ。小さい子って加減が分からないから苦手なだけです。ブラックの子どもでしょう？　ちょっとやそっとで壊れたりしませんって！」
「うちの子に手を出すな」

子どもを使って私怨を晴らそうとしないでください。
むすっと告げれば「えーっ」と本当に残念そうに唇を尖らせる。

「絶対に楽しいと思ったのにーっ」

お前がな。

「なぁなぁ。俺、一番に抱いても良い？」
「――　……良いわけないでしょ」

ちょっと黙ってると思ったら口開くとカナイもろくなことをいわない。

うそっ！　何でっ！　俺って命の恩人だろう？　そのくらいの役得あっても良いじゃないかっ！　って本気で頭を抱えてショックを受けている顔をしても駄目だ。

大体どうして、そんな話になるんだ。

おかしいよね。

私の子どもです。私が一番に抱くんです。

ていうか、なんで私の周りの男たちのがテンション高いんですか？　ブラックなんて私の心配はしてくれたけど、とりあえず、ばたばたしてたから、子どもの話しなんてまともにしてないっていうか、ぎこちないっていうか。

はあ、と溜息を落としたところで

「何を騒いでいるんですか？　マシロさんはまだ本調子じゃないんですよ……あまり通常通りの騒ぎを起こさないでください」

ぶつぶつとお小言をいいながら入ってきたのはシゼだ。

本当なら、ブラックが付きっ切りをしてくれそうな勢いだったのだけど、種屋が暫らく傀儡だけで回されていたせいでてんてこ舞いだと思われる。

だから、エミルに頼まれて様子を見に来たという、シゼに渋々あとを任せてブラックは種屋に戻った。

「これ、何？」

つかつかと真っ直ぐ私に歩み寄って来てくれたシゼは私にカップ

を渡してくれるけど……中身が微妙だ。

私は薬師だ。

紛い形にも、専門職だ。

……専門職だけど、この甘苦い臭いに覚えはない。

「ヒスライン草を煎じたものですよ？　体調を整えるのに良いですから」

朝から来て、ずーっと何か煮込んでくれていたのは知っている。

因みに私もヒスライン草は知っている。ここには乾燥させたものしか常備していないけれど、そこそこ貴重で重宝される種類の薬草だ。

「センブリ茶くらいの勢いで苦いはずじゃないっけ？」

恐る恐る問い掛ければ、シゼは不思議そうに首を傾げた。

「……聞いたことのないお茶ですね？　マシロさんの世界特有のものでしょうか？」

授業中。試しにと粉末を舐めさせられてそんな印象が私に着いただけだ。

こっちにセンブリはないし、向こうでだって私は飲んだことない。

バラエティー番組の罰ゲームの反応くらいだ。

「確かにヒスラインは、苦味が強いです。なので、飲みやすいように甘さをプラスしてみました」

にこり。って良い笑顔ですね。苦味に（激）甘さをプラスってど

んな優しさですか！

「苺ミルク味です」

呪いを重ねた。

「いち、ご、ミルク」

改良するところが違うーっ！！

シゼの無駄な頑張りどころが分からない。そばでだらだらりーんっとしていたカナイが、がたっと椅子を揺らした。寝落ちしそうだったのか、はたまた私と同じことを考えたのか、きっとそのどちらかだろう。

「あはは、罰ゲームみたいですね」

アルファ。空気読め。

「どうしたんですか？　駄目ですよ、薬を嫌がるようなことは。その重要性も、マシロさんだって薬師なのですから、分かるでしょう？」

さあ、どうぞ。ってそんな良い笑顔でいわれたら……味が恐いとか、そんな理由で断れない。

重ねるが、シゼは朝から頑張っていた。

でも、ふんわりと立ち上ってくる、甘苦い香り。萌黄色した食欲をこれでもかというほど減退させてくれる、色味。視覚、嗅覚……恐らく味覚も。

華麗に拒否している。

ちらと見れば、やはりいつもより数段毒のない笑顔を向けられる。

嫌がらせ、じゃないんだよね。

シゼは心の砕きどころを完全に間違えている。私はじわりと浮かんでくる涙を堪えて、きゅっ目を閉じ手の中のものを呷ろうとしたら

「うわっ！　まっずっ！　何これ？　何しでかしたらこんな味になんの？！」

ふっと手の中のぬくもりが無くなった。それとほぼ同時に暴言が響いた。

「ちょっ！　どうして貴方が飲むんですかっ！！」
「飲むも何も、この甘苦いの何っその上乳臭っ！！」
「な、何って、ヒスラインですよ」

突然現れたルカは、ふーんっといいながら、いらね。と、ぽいっと窓の外に投げた。
駄目だよ、外に放ったらっ！　止める暇はもちろんない。

それに目くじらを立てるのは当然シゼだ。
タダでさえ、シゼはルカのことを快く思っていない。今回エミルが重用したことも拍車を掛けてくれて、益々根は深まっていると見える。

「あんたあれ、飲んだの？」
「飲みましたよ？」

……飲んだんだ。

「格段に飲み口は向上したと思いますけど」
「――　……あんた、うちの店長以上に悪食なんじゃねぇの？」

なぜ、そこで私を引き合いに出す。
じりじりと睨み合う二人に、私は冷や冷や、アルファはうきうき。
カナイは無関心――と、いうか寝落ちしそうだ。そんなに気だるいならこなきゃ良いのに――となると止めるのはやっぱり私しかいない。

「シ、シゼっ！　ごめんねっ。もう残ってない？　飲む。あったら飲むから、持ってきてくれる？」
「え、ええ……構いませんけど……」

ああ、あるんだー。
あるよねぇ。そうだよねぇ。
継続して飲まないといけないから、あれだけってことないよねぇ。

ぶつぶついいながら部屋を出て行ったシゼを見送って、私はがっくりと肩を落とした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7482w/

白蒼月夢幻譚～二つ月の二つ世界（種シリーズ?）

2011年12月13日10時11分発行